

指揮官には友達がいない

狂乱のポテト

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ぼっちで捻くれ者の指揮官と人形や職員たちの平和な日常を描いていくお話

モブキャラとしてオリジナルのキャラが登場しますが、物語に大きな影響を与えるほどではないレベルです。

SSや二次小説を書くのは初めてなので、至らない点があるかと思いますが スラム街にある小ライスを見るような温かい目でみてください。

誤字脱字の指摘、アドバイス等いつでも待っています！

## 目次

#1	しかし、飲み会には参加する	1
#2	それでも、彼ら彼女らの日常は始まる	4
#3	こうして、彼の休日は終わりを告げる	9
#4	男はみな、そういう生き物である	16
#5	女とは、こういう生き物である	22
#6	恐らく、彼の妄想は現実にならない	29
#7	いつでも、彼女は完璧を貫く	36
#8	天才と変態は紙一重	44
#9	彼女の本音は彼に届かない	52
#10	いつも、彼は彼女たちに振り回される	63
番外編	ともあれ、人形と結婚するのはどこかおかしい	72
番外編	それぞれの思いが錯綜するなか	82
番外編	戦いがここまで長引くとは誰も思わない	90
番外編	いつかあなたが振り向いてくれる日まで	102
#11	彼女たちはプライスレス	119
#12	Do not give liquor to TIDo	133
11's	—————	133
番外編	人生とは短篇話の連続である	149
#13	言わなければ分からない たと言ったとしても	158
#14	その時、彼は本音に気づく	177
#15	UMP45は動き出す	187
#16	そしてまた、彼女は強くなる	202
【特別編】	たとえばこんなバースデー	214
#17	The Enemy of my enemy	229

# 18	ついに、A R—15は告白する	243
# 19	またしても、彼は地獄を生き延びる	258

## #1 しかし、飲み会には参加する

「ノーマッド、聞こえるか？屋上にいるから早く迎えにきてくれ」

ヘリパイロットへ帰りの足、もとい翼になってもらう連絡を済ませた俺は、グリフィンのほぼ全ての指揮官・職員が参加する新年会を終えたところだった。グリフィン本部が佇む都市部の会場で開催されたため、古参指揮官や幹部職員はタクシーや自前の高級車で帰路についているが、ほど遠い最前線の支部所属の俺は移動手段がヘリという大掛かりな乗り物である。

「しきかくん、もう帰るんですかあ？二次会行きましょうよ」

隣で酔っ払ってるのは、この新年会にバーターとして同伴してくれた副官のUMP45だ。本来こういうのには向いてないタイプだと思っていたのだが、『指揮官の人間関係を知りたい』という興味本位で付いてきたらしい。

二次会？行くわけないだろ、と口直しのガムを噛みながら自嘲気味に応えると

「だよね、だって指揮官は友達どころか私以外の話し相手もないもんねwwww」

と、小馬鹿にされてケラケラ笑われる始末。悔しいがその通りだった。上司や先輩方とは形式的な挨拶こそすれど、世間話や雑談、愚痴を言い合うほど仲の良い同期や後輩は皆無だった。今思えばほとんど45と話してた気がする。

私と一緒によかつたね、とニヤけながら煽る45を余所に、汚染と枯渇で塗れる地上とは似つかない煌びやかな夜空を見上げると、メインローターで空を斬る音を響かせながら近づく黒い鳥が見える。

「こちらノーマッド62、まもなく到着する」

ようやくこの寒さと酔っ払いたちの喧騒から解放されると安堵しながら、傭兵としての日常を思い出させるUH-60に乗りこむ。

「新年会はとうでした？楽しめましたか？」

「愚問よ、ノーマツド。だってこの指揮官よ？」

それもそうだと笑いながら俺を見るパイロットを睨むが、それが逆効果だと気づいた俺は不貞腐れて座席に寝転んだ。ガムを噛む歯に自然と強い力が入る

「指揮官が私以外の人と話したのって、スタッフに飲み物を頼んでお礼を言っただくらい？」

「えっ、なにそれ…あんたよく生きていけるな…」

「今度余計なことを言うとか口を縫い合わすぞ」

とはいえ45がいなければマジでヤバかった。もしも俺一人だったら多分ずつとトイレの個室でほとぼりが冷めるまでゲームしてた。そもそもこの話、俺はこの手の集まりに参加することはまずない。ぼっちの俺はこうなることが分かっているからだ。

しかし悲しいかな、世の中には『強制参加』という四文字熟語がある。この世で最も忌まわしい四文字だ。周りが友達同士でくつつく中、よく先生とペアを組んだ学生時代の思い出が甦る。やめろ、思い出したくねえよ。

と、一人でトラウマに苛まれていると、一人の操縦士と一体の人形が件の話の花を咲かせていた。

「それでね、私がお手洗いに行きたくて席を外そうとしたら」

『えっ…ああ…うん、分かった…』

「って、捨てられる仔犬みたいな目で見てくるのよ？」

「ソフツwwwwなんか想像できるwwww45がない間オドオドと拳動不審だったんだろなwww」

おいノーマツド、ちゃんと操縦しろ。ちょっとヘリが傾いたぞ。

なにも一人が嫌なんじゃない。むしろ一人の方が好きだ。問題なのは、周りがそれぞれ固まっているなか、自分だけ一人”ということだ。電車などの公共交通機関やファーストフードなど比較的軽めの飲食店ならともかく、こういう職場の集まりや娯楽施設。いわゆる『仲間と集って楽しく語らうのが大前提の場』だとキツイ。自分が場違いすぎて居た堪れない気分になる。

「でも指揮官からはともかく、指揮官に話しかけてきた同期の人たちってそこそこいたよね？なんでその人たちと一緒に過ごさなかったの？」

「愛するかわいい45と一緒にいたかったんじゃないか？ヒュ〜♪お熱いねえ〜！」

俺は噛んでたガムを吐き出し、ノーマッドに気づかれぬように彼のヘルメットに貼りつけた。

けれども45の言う通り、話し相手や友達が皆無だったというわけではない。話しかけてくる同期はいた。

だが待つてほしい、彼らには俺よりもっと仲のいい人間がいる。つまるところ彼らについていっても、時が経つにつれ俺の知らない他の人達が寄ってきて談笑する。俺を放っておいてだ。

「ああ〜：要するに指揮官の優先順位がかなり低いつてことだね〜：」  
「そういうことだ。たまに気を使ってるのかずつと俺と一緒にいてくれる優しいヤツもいるが、俺ごときに付き合わせて楽しい時間を無碍にするのは申し訳ないから、俺から席を外すか気を使うなと声をかける」

「捻くれてんなー：こりゃ結婚どころか彼女すら無理だな」

余計なお世話だ、と年齢⇨彼女いない歴の俺は、交際2年目の彼女がいるノーマッドのヘルメットにコンビニで受け取ったレシートを気づかれぬよう貼り付けた。

俺が所属する支部までまだ距離はある。仲良く会話をするノーマッドと45を尻目に、無駄に疲れた俺は機内で浅い眠りに入った。

#1 しかし、飲み会には参加する

## #2 それでも、彼ら彼女らの日常は始まる

「いい加減に起きろボス、もう12時だぞ」

痛いなあ…叩くなよ…寝かせてくれ……。

「はあ…いいか、ボスを叩いてんのは左手だ。利き腕じゃないんだぜ？」

この声は…トンプソンか……？

「起きろこのポンコツが！起きろってんだよ!!」

「痛え!!」

「この手に限る」

「ああ…：…頼むからもうちよつと優しく起こしてくれ…」

「休日とはいえ、いつまで経つても惰眠を貪るボスが悪い。…：…いや、お姫様だったな」

お姫様あ？なにを言ってるんだコイツは。とうとうAIがバグったのか？

「ハハッ、気にしないでくれ、ボスは食事でもしてきたらどうだ？」

クッククック…と一人で笑っているトンプソンに奇妙な印象を抱きつつ、身支度を済ませた俺はランチを取ろうと社員食堂へ向かった。

---

おかしい。

食堂への道中、人形や職員とすれ違う度にクスクスと笑われる。あれだな、少しでもカツコよくなるうと慣れないワックスで髪型をセツトするも、めちやめちやおかしくて周りにすげえ笑われたあの頃を思い出す。

桃太○電鉄のキン○ボンビーみたいな髪型だと言われた時はさすがに凹んだ。その話をRFBにしたら、『どんな髪型wwww』とめちやめちや笑われた。

ちなみにプレイしたことはないが、2060年を越えた今でも新作

が発売される不朽の名作だ。やったことないけど。

しかし、それは俺が19歳の時の話だ。トラウマ少なくとも今は笑われるような髪型はしていない。

そしてもう一つ不可解なのが、チラホラと聞こえる「お姫様」という単語。トンプソンといい、みんなしてお姫様お姫様ってなんなんだ……。昔流行ったクツ○姫がまたブレイクしたのか。

寝起き早々に周囲から謎の視線を感じてフラストレーションだったが、幸か不幸かある人形のおかげで解決した。

「あら、今頃起きてきたの？眠りのお姫様。」

まるで女王様のような貫禄と、含みのある笑い方で話しかけてきたのはFALだった。正直なところ、俺はFALが苦手だ。無論嫌いというわけではない。むしろ大好きなまでである。

とても優秀でどんなに厳しい作戦も必ず成功させ、エースを名乗るのに相応しい彼女であることは、戦術指揮官の自分がよく分かっている。しかし、しかしだ。

「ちよつと、なにその服？いくら休日だからって、そんな部屋着みたいな格好で出歩かないでよ」

「ああ…すまん…」

なんかこいつ、昔クラスにいたトップカースト集団の女子に似てるんだよなあ。基本的にカースト最下層に属する俺にとってはとにかく苦手だった。まあそんなくだらないことはさておき、俺は問題の『お姫様』について問い質す。

「昨日の夜、帰りのへりで寝てたあなたをUMP45が部屋まで運んであげてたのよ」

「ああ…そうだったのか。道理で記憶にないわけだ…」

戦術人形である彼女らにとって、俺のような成人男性一人を運ぶくらいどうということはない。だが問題はその運び方と時間帯だった。「お姫様抱っこでね。ちよつと夜勤シフトと入れ替わる時間だったからほとんどの人が見てたわよ」

「なななななんだってエ!?!」

なるほどそういうことか完全に理解したぞ、俺をお姫様抱っこって

……。俺だつてまだしたことないのに…。

眠っていた俺をお姫様抱っこする45を想像したらすごいドキドキしてきたんだがロマンスの神様UMP45この人でしょうか。

「いっただきまーす……」

一人孤独に食事をとる俺は例の件を未だに引きづっていた。

「まさかスプリングフィールドにも見られてたとはなあ……」

先ほどブランチメニユーを運んでくれたスプリングフィールドが

『今度は指揮官がしてあげる番ですよ♪』

と、からかつてきたせいでもある。あややだ冷静に考えたらあのスプリングフィールドがからかつてくるなんてまたドキドキしてきたわ。やっぱりロマンスの神様スプリングフィールドこの人でしょか。

なんて馬鹿なことを考えながら、右手にフォーク、左手にモバイルデバイスを持って食事を進める。周りの職員たちは各々のグループで談笑しながら昼食を取っているが、もちろん俺は一人だ。

よくみんなで食べるとより一層美味しく感じられるというが、それはなんの科学的根拠もない迷信、もしくは集団心理の錯覚である。第一口に物を入れながらの会話なんてマナー違反だ。誇り高きぼっちは、マナーやモラルを遵守する気高い生き物なのである。

「なに一人でブツブツ言ってるんですか指揮官さま……」

えっ、これって他の人にも聞こえるの？嘘でしょ？

「いえ、マナーがどうか急に言い出したので」

……どうやら自分でも気づかないうちに声に出てたらしい。フツ…俺としたことが。それはそうと急に話しかけてきたのは後方幕僚のカーリーナだった。データルームでの作業を済ませて休憩に来たらしい。

お疲れさん、と労いの言葉をかけ、このご時世では一般的な代用コーヒーを1杯奢る。

「あつ…ありがとうございます！指揮官さま！」

屈託のない年相応の明るい笑顔を向けられて、俺はちよつと目を逸らしてしまった。カリーナが悪いんじゃない、耐性のない俺が悪いんだ。ろくに女子と関わらなかつたからな。

「でも指揮官さま、そんな性格なのに彼女たちとは普通に会話できるんですよ。不思議です。」

「戦術人形だからな、好かれることはあつてもよほどのことがない限りは嫌われないし、悪口や陰湿な嫌がらせを受けない。」

ふーん。と、納得したのか適当な返事なのか分からない相槌を打たれた俺は、空になった食器を片付けようと席を立つ。決してこの前技術スタッフの女性職員たちが通路で

『あの指揮官、部隊の子達をいやらしい目で見てるよねw』

と言っていたのを思い出したわけではない。

「でも、」

「ん？」

俺はその場に踏みとどまり、食器の乗ったトレイからカリーナへ目を向ける

「それでもみんな指揮官さまが好きで、みんなあなたについて行くんですよ。私だって……」

そう言いかけたカリーナは、ハツとしたようにコーヒーごちそうさまでしたっ！と駆け足で去っていった。

……。

……………。

これだから人間の女の子は嫌いだ。思わせぶりな態度を取って、他人に好意を抱かせて勘違いさせる。訓練された俺は二度も同じ手は喰らわない。

ただ……。

か  
カリーナの顔が赤くなっているように見えたのは気のせいだろう

#2 それでも、彼ら彼女らの日常は始まる

### #3 こうして、彼の休日は終わりを告げる

「あ…ありのまま！今起こったことを話すぜ！……」

M4達に下着泥棒の疑いをかけられた」

さかのぼること30分前……

?  
?  
?  
?  
?  
?

場所は基地内、作戦を無事終了させたAR小隊の面々が戦いの疲れと汚れを癒しに大浴場へと足を運んでいた。

「やつとお風呂に入れるよー！久々だあー!!」

「だいぶ厳しい戦闘だったからな、こうゆっくりできるのも身体を張った甲斐があるってもんだ」

「……。」

「…?どうしたの、AR―15」

「…いえ、なんでもないわ。」

「そう?早く入りましょう?」

(胸だな)

(胸だね)

心なしか約一名、やや落ち込んでいるようにも見えるが、湯船に浸かれればそこは極楽浄土。細かいことなどどうでもよくなるほど全身の力が抜けて気持ちよくなれる。それは人間のみなならず、戦術人形といえど同じであった。

脱衣所で自らの衣類を綺麗に畳んでロッカーへ収納する彼女たちは、人形であることを除けば育ちのよいお嬢さまのようであり、そして……

「あら、私たち以外誰もいないのかしら？」

「この時間だとかおかしくはないんじゃない？まだお昼を過ぎたころだし」

「わーい！お風呂だあ!!」

「あ、こちら！待ちなさいSOPⅡ！ちゃんと体の汚れを落としてから入りなさい」

「ぶー、M4のケチ……」

「これがお風呂のルールなの。指揮官に教えてもらったでしょ？……ほら、シャンプーしてあげるからこっちにおいで」

「はははっ！たしかに広い湯船を見るとテンションが上がるな。……つと、しまった。石鹸を忘れてしまった。SOPⅡ、貸してくれるか？」

「いいよー！せいっ！」

「投げるなバカ」

……そして、仲睦まじい姉妹であった。

「……あ”あ”あ”、いい湯だあ……」

「ちよつとM16姉さん、おじさんみたいだからやめてください」

「でも、本当に気持ちいいわね。指揮官に感謝しなきゃ」

そう、本来“お風呂”といえば浴場ではなく、簡素なシャワールームがベターな業界である軍事企業。にもかかわらずこのような裸の付き合いをする場を設けたのは、他でもない指揮官だった。冷酷かつ残酷な最前線で文字通り命懸けなのは当然、戦術人形である。生気を無くしていくうえに娯楽や癒しが乏しいこのご時世、身も心も温かくなってほしいと指揮官が労いの意を込めて特注で建てたのである。

「あ、そうだ！ねえAR-15！お背中流しましょうか？」

「なによ急に……、さつき自分で洗ったからいいわよ」

「まあまあそう言わずに〜」ザバアツ  
「ちよつと……!……もう……」ザバツ  
「えーと、ボディークリームを掛けてつと……」ドバドバブチャア  
「かけすぎよバカ」  
「……どうだM4、私も流してやろう」  
「ひやっ!ちよつと姉さん!どこ触って……」  
「M4の肌はキレイだな……ここなんてすべすべで……」サワサワ  
「ちよつ……んっ……はあ……やめっ……」  
「ねえAR―15、あの二人はなにしてるの?」  
「羨ましい……私もM4と……」(さあ?またくだらないことやってるんでしょ)  
「多分だけど言ってることと思ってること逆じゃない?」  
「も……もう!先にお風呂から上がりますからね!!」  
「あ、私もあがるー。なんかのぼせちゃったかも……」  
「ああ!まだ満足してないのに!」  
「そこまでよM16、まったくあなたは……」

---

---

---

大浴場で心身ともに清らかになった4人は、脱衣所で再び己の衣服に身を包む。だがしかし、ここで問題は起こる……

「……あれ?」  
「どーしたのー?M4」  
「下着がない……」  
「?!?!」  
「おかしいわ……お風呂に入る前にちゃんとここに……」  
「つまり……M4の小さなリボン付き白パンツが盗まれたってこと?」  
「いったい誰がM4の白いレースのブラジャーを……」  
「あっ……!足音が聞こえる……近くに誰かいるみたい……」

「よし…AR—15、取り押さえるぞ」

重い空気が漂うこの脱衣所へ繋がる廊下に、一人の足音が鳴り響く。その足音の主は久々の休日を楽しもうと街へ向かうために、なにも知らずその道を闊歩していた。恐らく今日の基地内で最も運のない者といえるだろう。

このM4下着紛失事件に何らかの関与があると判断したM16とAR—15は、戦術人形らしい面構えと洗練された立ち回りでゆつくりと近づき……

「誰だ！」

「っ!？」

「あら？指揮官じゃない、こんなところでなにしてるの？」

「なにつて…、久々の休みだから出かけようと思って…」

「ほほう…？わざわざこの道を通ったのか？エントランスは逆方向だぞ」

「ああ、出かける前に総務課へ書類を提出しようと思ってな。…それより二人とも……」

「なんで下着を頭に被ってるんだ？」

—  
—  
—

そして時は現在に至り……

「…つまり小隊のメンバーで入浴し、風呂から出たらあるはずのM4の下着がなくなっていた。そして廊下に怪しげな俺がいたと……」

「まったく…失望したわ。変態指揮官さん？」 ↑頭にパンツ被ってる

AR—15

「私の可愛い妹に手を出すとは…いくら指揮官といえど許しはしない。覚悟はできてるんだろうな？」 ↑ブラジャーを眼帯代わりにして

るM16

「いや待て！俺はたまたま通りがかったただけだ!!てかお前ら二人が頭と顔につけてるのが問題の下着だろ!!」

と、この流れをかれこれ10分はやってる。痴漢の冤罪ってこんな感じなんだろうなあ(遠い目)

しかしやってないものはやってない。しかも俺よりも怪しいヤツらが目の前にいる。どう考えても現行犯やろがい!!いくらシスコンだとしても度が過ぎるだろ！

「しきかくん……」

「SOPⅡ！お前もあの二人に言ってくれ！」

「ごめくん……のぼせちゃったみたいい……。部屋に戻ってるね……」

ガツテム！長湯は禁物だつて前に言っただろ!?

「あ……、私はSOPⅡを部屋まで送ります……。その……えと……し、失礼します……」

M4……俺と目を合わせてくれなかったな……。高校の時に自分一人だけ舞い上がって女の子に告白したら、思いのほかドン引きされたあの時を思い出す。あれ、目から水が止まらないぞ。

そう言つてSOPⅡとM4は自室へと去つていった。脱衣所にいるのは重度のシスコン変態人形二人と俺だけ……と思いきや、SOPⅡたちと入れ替わりで戦術人形のスコープオンがやってきた。

「え、指揮官なんでここに居るの？ここ女性専用の脱衣所だよ……？」  
↑ブラジャーを眼帯代わりにしてるスコープオン

「なんでお前もブラジャーを顔につけてんだよ」

「指揮官にはM4の下着を盗んだ容疑がかかっていてな、今取調べをしてるんだ」 ↑ブラジャーを眼帯代わりにしてるM16

「信じていたのに……悲しいわね」 ↑頭にパンツ被ってるAR—15  
「ここには変態しかいないのか」

スコープオンに関してはそれ誰のブラジャーなんだ。持ち主に返してこい。

「えっ……指揮官ってそんな趣味が……」

「俺に幻滅したような目を向けてるけど、俺もお前らにそんな趣味があつたなんて幻滅したわ」

ふっ……、まあいい。お前らはどうしても俺を犯人に仕立て上げたようだな。だが甘い、俺にはM4の下着を盗む動機がない。いやもつというど証拠もないんだけど。

「なんだと…?」

「それはどういふことかしら?」

「なぜなら俺は裸や下着では興奮しない!むしろ普段着や私服などの『着衣』の方がそそる!!」

「つまり!M4の服装に興奮することはあつても下着を盗もうなどという不埒な考えには至らないんだよ!!」

「服装を見て興奮するのも十分不埒だと思っただけ」

スコープピオンになにか言われた気がするが聞かなかつたことにする

「なん…ですって…!?!」

「そういえば指揮官はさつきから目の前に女性物の下着があるのに見向きもしていない!!クソツツ!見誤つた!!」

勝負あつたな…。さあ、お前らその下着を持ち主に返してこい。素直に謝罪すれば、今回の件は不問にする。

「……時に指揮官、私たちと取り引きしないか?」

「ここにM4が履いていた靴下があります。今回の件を見逃して頂けるのなら、こちらを差し上げます」

お前らクズすぎるだろ、取引成立だ。

---

---

---

「すみません、指揮官!姉さんたちがご迷惑をおかけしました……!」

「ああ…いや、いいんだ。慣れてるからな……」

クラスの女子のリコーダーを舐めたという根も葉もない噂を流されたあの時に比べればなんともない。てか舐めねえよ、汚いだろ。

「その…あの指揮官！」

M4は突然大きな声をあげ、俺に近寄る。いや、身長差があるとはいえだいたい近いよ？

「私は戦術人形で…あなたは指揮官です。あなたからの命令は絶対で、私もあなたを信頼しています」

「ですので…、その…スコープオンに言われたのですが…あなたがお望みとあらば…私ば…」

「M4…な…なにを……」

いや待て待て待てなにこの展開。え？どういふこと？なにがあつたの？

「私は……」

「ブ…ブラジャーを眼帯代わりにしますっ!!」

あの毒サソリ 分解してコア抜き取ってやろうか

#3 こうして、彼の休日には終わりを告げる

#### #4 男はみな、そういう生き物である

最近、うちの支部近くに『映画館』が建てられた。

といつてもこの荒廃した世界じゃまともな映画なんて作られていない。そこで、数十年前に世界中で大ヒットした映画を最新の記録媒体へ書き写して上映しているらしい。コメディィやアクション、ミステリーなどさまざまなジャンルがあるが、なかでも人気なのがホラーと恋愛モノだ。一般市民のみならず、戦術人形達も足を運んでいる。俺は興味ないけどな。せいぜい偶然金曜ロー〇ショーでやってたら観るか、たまにTS〇TAY Aで借りてくるくらいだ。

---

---

---

グリフィン所属の汎用ヘリ、UH-60が広大な大空で豪快な飛行音を響かせて羽ばたいていた。機内では、哨戒任務を終えて基地へ帰還する戦術人形が、件の映画についての話題で盛り上がっていた。

「あら、ノーマッドもあの恋愛映画を観たの？」

「ああ、この前彼女と観に行ったんだよ。俺はまったく興味なかったんだが、まあなかなか面白かったぜ」

「たしかに他の作品と比べるとセンスはある方ね、悪くはなかったわ」パイロットと映画の感想について話しているのは戦術人形のFAL。数々の映画を観てきた彼女は、エンターテインメントを嗜んでいるオトナな女性そのものだ。

「へえ、珍しいね。FALがなにかを褒めるなんて」

あの辛口なFALが称賛の意を示していることに少しばかり驚いているのは、普段表情を崩すことが少ない戦術人形のVectorである。

「そっぴやVectorはあの映画観たのかい？」

パイロットからの問いかけに、彼女は目を合わせることなくぶつき

らぼうに答えた。

「はあ…、興味ないよ。私はただの商品だもの。人間ごっこをするために生まれたわけじゃない」

「あなたは相変わらずね…。人形だって、趣味や好きなことをもつと案外生きるのが楽しくなるものよ」

「そうだな。そう不貞腐れてないでたまにはああいう芸術作品に目を通してみたらどうだ？」

自分の人生観を語っただけで二人に諭された彼女<sup>vector</sup>はやり場のない憤りを覚えた。

戦術人形は人間の代わりに戦うために生まれたのである。それ以上、それ以下の存在価値はない。彼女<sup>vector</sup>からしてみれば、まるで自分は人間だと言わんばかりの行動をしているFALたち他の人形や、戦術人形の存在意義を履き違えているノーマッドの方が馬鹿げているのである。

私は間違っていない、そんな考えを吐き出したい衝動を抑えてポーカーフェイスを貫き通したVectorは、生粋の戦術人形といえるだろう。

「余計なお世話。そんなことよりノーマッドは操縦に集中したら？また前みたいに墜落するよ」

「いや堕ちたことないから」

「指揮官、戻ったわよ」

「ただいま」

「おお、おかえり。ご苦労さん」

基地へ帰還したFALとVectorは、哨戒任務を終了した旨を伝えに指揮官のもとへ訪れていた。すると、FALは指揮官のデスクに2枚のチケットが置いてあることに気づく。

「指揮官、それは？」

「ああこれか、映画のペアチケットだよ。同期のヤツから譲り受けてな。ひと組2名なんだが、なんでこういうのってペアにするんだろうな。ぼつちにケンカ売ってるよな、マジで」

「あなたも相変わらずね……。」

チケットを見てみると、先ほどヘリで話していた例の恋愛映画のもので、有効期限は明日までであった。

「明日までか……、残念だけど私は後方支援に参加して一日中いないから一緒に行けないわよ」

「分かってるさ、だからコイツをどう処分するか考えてるんだよ」

分かってはいたけどこう、面と向かって振られるとちよつと傷つくな。好きな人を食事に誘ったら2日後の夜に返信がきて断られたことに比べれば屁でもないが。女の子って48時間も睡眠とるんだね、健康的だあ（涙目）

「たしかVectorは明日休みじゃなかったかしら、二人で行ってきたら？」

名前が挙がったVectorの方を見ると、明らかに嫌そうな顔をしていた。そうだね、俺みたいなヤツと一緒に街を歩きたくないよね。ごめんね。

「ああ……いや……、そういうわけじゃないよ。ただ、私はそんなものに興味はないから行きたくないだけ」

なんだよかった……、と安心したいが単に俺を気遣っているだけかもしれない。安堵するのはほどほどにしよう。

「そう言われればたしかにVectorはこういうの興味なさそうだな。まったく同感だ、俺もない」

映画のジャンルは数あれど、恋愛モノだけはどうも観ようとは思わない。他人の恋愛を見てなにが楽しいんだ？

やれ恋だの愛だの、「二人じゃない」だの、「会いたい」って言うってやっぱ「会いたくない」だの、んでもって結局「会いたい」だの、終いには「会いたくて震える」だの、上映時間が長い割りにやってることが何ひとつ変わらないんだよな。

なんてことを言っていると、FALが『それ以上喋るな』とでも言

いたげな視線を向けていることに気づいた俺は目を逸らして口を閉じた。

「あなたねえ……観てもないのに知ったような口を叩かないでくれる？少なくともあなたが年甲斐もなく観ている女兒向けアニメよりはマシよ」

「ふざけるな！プリ○ユアはみんなに夢と希望を与えてくれるんだよ！みんなはプリ○ユア。俺もプリ○ユア。お前もプリ○ユアだ！」

「あなたいろいろと終わってるわよ」  
なんてやり取りをFALとしていたら、V e c t o rからも冷たい視線を向けられていることに気づいた。お……おう……なんかごめん……。

「まあでも、指揮官が言ってることにはだいたい同意かな。戦術人形の私が恋愛映画なんて馬鹿馬鹿しいからね」

「はあ……、ほんとあなた達ときたら……」

と、FALは頭を抱えていた。なんだ、文句あるのか。

「ちようどいいわ、この映画、あなた達二人で観てきなさい」

先程のパツと思いついたようなノリとは違い、強い命令口調で提案された俺は少し萎縮してしまった。

「あの映画を観れば、少しはその腐った心と考えがマシになるんじゃないかしら。私が見たところ、なかなか悪くない作品だったわよ」

ほう、あのFALのお墨付きとはちよつと興味が湧いてきた。まあ無料で観れるから俺は別に構わないけど、V e c t o rはどうする？無理にとは言わないが

「……それが命令っていうなら付き合うけど」

「決まりね。明日感想を聞くから、上映中に寝たりしないでよ」

---

翌日……

時間は午前11時47分、お昼休憩の時間だからか街にはより一層

人が溢れる。そんななか俺は、駅前のコンビニでVectorを待っていた。待ち合わせの時間は12時なのだが、女性を待たせるわけにはいかなかったので早めにきていた。あれ、これもしかしてデート？すると、綺麗に手入れされたショート銀髪をなびかせた一人の女性が、駅の入口で人混みから抜け出してくるのが見えた。あの人可愛いけど、誰かに似ているな……。ん？あれ？近づいてきてね……。あ、よく見たらVectorだ。見慣れない私服だから気づかなかつた……。

「ごめん、待たせた？」

「…いや、ちょうど今来たところさ」

なんてテンプレのセリフをお互い無意識に言い合った。やっぱりデートじゃないか！（困惑）

「それ、Vectorの私服か？」

「そう…だけど……。変かな…？」

上目遣いで見るんじゃない、ドキドキする。思わず目を逸らしてしまった。

「全然。とても似合ってて可愛いよ。それはそうと時間も時間だし、お昼ご飯でも食べに行かないか？」

しかし、Vectorからの返事はない。異変に気づいた俺は彼女の方を振り返ると、珍しく驚いた顔で固まっていた。

「どうした？鳩がアンチマテリアルライフルを食らったような顔をして」

「いや…指揮官もそういうこと言うんだね……。意外…」

「あー…、…引いた？」

「…別に、ほら早く行こう。この時間だと混んでるよ」

ちよっ……。待ってっ！お前早歩き速いな！

#4 男はみな、  
そういう生き物である

## #5 女とは、こういう生き物である

「Vectorはなにか食べたいものはあるか？」

「私はなんでもいいけど…、指揮官は？」

なんでもいいが一番困るんだよなあ…。

ふと、俺は彼女の好みをまったく知らないことに気づく。いや他の人形たちの好みもそこまで知らないんだけど。

彼女自身が周囲から距離を置いていているというのもあるが、普段からのコミュニケーション不足がこのような形で枷となるなんて思いもしなかった。部隊を指揮する立場でありながらその部隊をよく知らないとは、実に情けない失態だった。

こんなことなら実戦でVectorとバディをよく組む416に好みを聞いとくんだった……。と、後悔しても時すでに遅し……。ん？お寿司？

「そうだ、回転寿司はどうだ？最近この辺にできたんだよ」

あります！…こんな時代でも!!スシ〇ーが！

「お寿司？でも値段高いんじゃない？」

その通り、この環境では新鮮な生魚なんて貴重である。ひと皿100円の時代はとうの昔に終わりを告げていた。

「別に構わないさ。お金なんてこういう時にしか使わないし、今日はVectorと一緒に楽しみたいから」

「……そう」

「昼から回転寿司なんて酔狂な奴らは少ないから、比較的空いてそうだしな」

目的地は決まったことだし、移動しよう。ということで俺は彼女に手を差し出す。

「？…その手は？」

「こんだけ人が多いとはぐれるかもしれないだろ。手繋ぐぞ」

と、キザな真似を試してみたが、こんなの普段の俺なら絶対に言えない。拒否されて傷つくのが目に見えている。とはいえ、今日はVec

torへの気遣いや配慮は徹底するべきだ。断られるのを恐れている場合ではない。

「…っ…またそうやって…」

「ん？なんか言った？」

「…なにも。さっさと行こう」

「え、あ…うん……」

普通に手を繋ぐのスルーされた。やばい泣きそう。

---

---

---

「ふう…。ご馳走さま指揮官、美味しかったよ」

「いえいえ、一番気に入っただのはなんだ？」

「うーん…ハマチ……だっけ？ほどよい脂で私は好きかな」

ハマチが好きなVectorとか可愛すぎるだろ、いやどれを好きといっても可愛いな。

「さて、時間もいい感じだし、そろそろ映画行くか」

「そうだね、あまり気乗りしないけど」

「…まあ俺もそうだが……、でもこんな可愛い女の子と一緒に観れるっただけで俺はテンション上がるけどなwww」

HHHHAH!と笑っていると先程まで隣で歩いていたVectorが、少し後ろで足を停めていることに気づく。顔は俯いてて表情は分からないが、少し肩が震えていた。

「…:Vector?」

「…指揮官はさ、私のことをなんだと思っているの?」

その問いかけに、俺は首を傾げる。

Vectorのことをなんだと思っているか?

彼女は少し愛嬌はないものの、俺の可愛い部下で、共に死線をくぐり抜けてきた仲間で、いつも近くで楽しく過ごす家族である。これまでもこれからもずっとそばにいてほしい存在だ。

しかし、彼女が求めている答えはそうではなかった。

「私は戦術人形であって、指揮官の友達でもなければ恋人でもない！」

私は戦うためだけに生まれたただの機械！」

「あなたは私の存在意義をどう解釈しているの!?!なにを考えて私を人間扱いしているの!?!」

「さっきだってそう！私のことを可愛いって褒めたり…手を繋ごうと言ったり……」

「私は……！ただの…機械なのにつ……」

普段の寡黙な彼女とは思えない突然の激昂ぶりに、俺は戸惑いながらも彼女の言い分を理解した。

彼女は戦いこそが使命で、勝利することが自らの存在証明だと自負しているのだ。だとすれば俺がこれまでに彼女へしてきた行いは、人間扱い戦術人形の本来の用途から外れており、彼女の存在意義を否定していることになる。Vectorにとって、自身の尊厳を踏みにじられたも同然である。

「でも……」

「あなたが私を人間のように扱ってくれるのが……とても嬉しくて…それが情けなくて……」

顔を上げた彼女の瞳は涙で溢れていた。

しかしこの涙も、自らの考えを吐露する行為も、あくまで造られた偽りのものなのだ。人は人形を人間のように扱い、人形は人に人間のように扱われることを望む。どれだけきれいな事を並べようがこれはエゴにかわりない。

だがそれでも、偽りの涙だろうが造られた感情だろうが、彼女が吐き出したこの気持ちだけは間違いなく本物である。

俺は彼女をそつと抱きしめて頭を撫でた。

「とある国に生まれた一人のお姫様がいた。身勝手な大人たちはゆくゆくは彼女に女王の座を引き継がせるために、本人の意思と同意なく英才教育をする毎日だった」

「だが彼女は女王になることを望んでおらず、静かな田舎で自由気ままな生活をするのが夢だったんだ」

「そこで現れたのは人知れず彼女を想う一人の執事。彼は裏から手を回し、彼女を連れて王族から逃げた」

「やがて二人はどこかの田舎で楽しく平和な日々を過ごしている……って話があるんだがな」

「この世に生を受けた理由がどうであれ、自由に生きる権利は誰にだってある。それは人間だけじゃなく、戦術人形も同じだ。戦うことが使命なのは当然だが、それは自由な生活を送ることを縛る縄じゃない」

「まあ……つまり……なにが言いたいのかっていうと……」

「お前が人間のように扱われることも、人間のように過ごすこともなにも間違っちゃいない。それが戦術人形のなり損ないなんてことはないんだ。俺はお前に、人形という枠に囚われることなく、自由に生きてほしい」

彼女はただ真っ直ぐと俺の顔を見つめていた。どうやら涙は止まっただけで、しつかり俺の話に耳を傾けていたようだ。

「……フフツ、やっぱり指揮官は指揮官だね……」

「どういうことだよ……貶してんのか？」

先程までのクールでニヒリストな面影はなくなっていた。目の前にいたのは吹っ切れたような、それでいて新たな希望に満ち溢れた笑顔の Vector だった。

「さあね。ほら映画始まっちゃうよ」

涙を拭った彼女は、俺に右手を差し出してきた。

「手、繋がらないとはぐれちゃうんでしょ？」

「……そうだな。よし、行くか！」

そう言っただけで俺は彼女の手を取り、彼女も俺の手を受け入れ、映画館へ向かった。

---

「へえ……映画館のスクリーンってこんなに大きいんだ、すごいね」  
「分かる。俺も初めて見た時は驚いたなあ」

売店で買ってきたポップコーンとドリンクを彼女に手渡し、俺は席に着いた。思ったより人少ないんだな。平日の昼過ぎだからかな。

「ありがとう。…あれ、指揮官はポテトなんだ」

「ああ、ポップコーンも好きなんだがやっぱ映画館で観るならポテトは欠かせなくてな」

ほんと、なんで映画館のクランチポテトってこんなに美味しいんだろうな。俺はポテトと塩があれば生きていけるね。あとマヨネーズ。

「ふーん……」

と、彼女は興味なさげな表情をしながらも視線はポテトに固定されている。なんだ、欲しいのか？

「えっ？あつ、いや…別に……」

「ハハツ、可愛いやつだなお前は。ほら、あーん」

「ちよっ…いいよ、自分で食べるから……」

「いいからほら、あーん」

彼女は赤面しながらも小さく口を開けてポテトを食す。

「どうだ？」

「……うん、おいしい」

「だろ？映画を観ながら食べるこれが格別なんだよなあ」

ハツハツハツと笑う俺が少々面白くなかったのか、V e c t o r もポップコーンを一つ掴み、俺の口元へ差し出す。

「ほら指揮官、あーん」

「……いや…俺は……」

「ポテトのお返しだよ。はい、あーん」

彼女の善意を無碍にするわけにもいかず、俺は彼女からのポップコーンを受け入れる。くそっ…これけっこう恥ずかしいな…。嬉しいし美味しいからいいけど。

すると場内の照明が暗くなり、本命の映画が始まることを教えてくれた。

「お、いよいよ始まるぞ」

「F A L に感想を聞かれるんだから寝ないでよ？」

……善処する…。そう言ってこれから始まる映像作品を静かに見つめた。

「案外面白かったな、さすがはFALが評価しただけある」

観るまでは乗り気じゃなかった映画を堪能し、余韻に浸りながら基地への帰り道についていた。

「そうだね、特にあのキスシーンはよかったかも」

ほう、やはり女の子はああいうのが好きなんだな。一度は憧れるんだろう。

「……でも、指揮官が私にあの言葉を言ってくれなかったら、私は多分映画を楽しめなかったと思う」

俺は数時間前の出来事を思い出した。クサイセリフを吐いた恥ずかしさに苛まれるが、それを表情に出さないようにするのが精一杯だった。

「指揮官はさ、私たち人形を見捨てれば自分は助かるような状況でも、私たちを助けようと自分を犠牲にする人だよ」

「当然だ。お前らは大事な仲間で、唯一の家族だから」

この考えが指揮官失格であることは分かっている。

人間というのは一度死んでしまえばそれまでだ。替えがきかない儂い存在である。しかし人形は破壊されてもバックアップと新たな本体があれば、記憶を引き継いで復旧することができる。

そのための戦術人形であり、そのための戦術指揮官だ。これを履き違えては本末転倒だろう。

それでも、俺は彼女達を一度とて喪いたくない。記憶を引き継ぐことはできても、これまで共に過ごしてきた身体の替えはないのだから。

「でも、もしそんな状況になったら、迷わず私たちを見捨てて逃げてほしい。指揮官さえ無事なら、また会えるから」

「……そうだな……。でも、そんな状況にならないために俺がいるんだ。俺は決してお前たちをそんな目にさせない」

「フフツ……、頼りにしてるよ」

俺たちは手を繋ぎながら、人混みをかき分けて帰りの駅へ向かつ

た。

#5 女とは、  
こういう生き物である

## #6 恐らく、彼の妄想は現実にならない

「ふう……疲れた……」

死闘とも呼べる長丁場の会議を終えた俺は愚痴をこぼしながら廊下を歩いていった。

「ヘリアンさんはまた合コンで失敗したんだろうな、めっちゃめっちゃイラついてたし」

グリフィンの今後の方針を決めるという比較的大規模な会議で、ファシリテーターを務めていたヘリアンさんはとにかく怖かった。周りに畏怖の感情を与えたせいで俺たち出席者が萎縮して話がまったく進まず、1時間程度で終わる予定が3時間もかかってしまった。ただいまの時刻は22時。当然まだお風呂も食事も済んでいない。

「先に風呂入るか……サッパリしてからうまいメシ食いたいし」

すると、風呂上がりとみられる女性と出くわした。大浴場から自室へ戻るだけだからだろうか、濡れた金髪を束ねてシンプルなパーカーとショートパンツを着ていた。

はて、こんな人いたっけ。と違和感を感じていると、彼女から声をかけてきた。

「あ……指揮官……。お疲れ様です……。」

「……もしかして、AS VALか？」

このオドオドした感じ、間違いない。戦術人形のAS VALだ。一瞬TMPかとも思ったが、彼女自慢の尻尾とネコ耳がないので見分けるのは容易だった。

「すまん、メガネをかけてないから誰だか分からなかった」

「えと……、お風呂入ってたから……部屋においてきたの……」

なるほど、と適当な相づちを打ち、俺は普段とは雰囲気が違う彼女をまじまじと見ていた。

「なにか顔についてるの……？」

「ああ、すまん。いつものAS VALと違ってなんか新鮮だなあつ

て思っつて。メガネを外した姿も可愛いな」

「かつ…可愛っ…?!?」

途端、彼女の顔が赤くなつた。風呂上がりだからかな？

「ああああのーその…し、失礼します!!」

そして走り去っていった。なんかマズいこと言っちゃったかな…。

「あー、さっぱりしたあ！やっぱお風呂で足を伸ばせるって最高だな」  
仕事の疲れを湯船で落としてきた俺は先ほどとは打って変わってとても高揚していた。やはりお風呂とは偉大である。

しかし、まだ腹の方は満たされていない。数時間ぶりの食事に取りつけるということもあつて、なにを食べようか考えながら社員食堂へ向かう。もちろん今回もぼっち飯だ。とはいえこんな時間ではそもそも人が少ないだろうから、必然的にぼっちになりそうではあるが。「ボス、こんなところにいたのか。探したぞ」

振り向くとそこには作戦報告書を持っているトンプソンと…え…M4…かな…?がいた。多分M4だろう…メガネかけてるけど…。「えつと…M4だよな?なんでまたメガネを?」

「この前の戦闘でアイカメラを損傷してしまつて…こここの設備では直せないから、ペルシカのところへ修復してもらおうと思つたんですけど…」

「あいにくペルシカの姉御も最近忙しくて予定が合わなくてな。で、戦術人形用のアイウェアを装着してるってわけだ」

「なるほど…」

M4がかけてるのはシンプルな黒縁メガネ。色白の肌と綺麗な黒髪ロングにとてもよく似合つていた。普段とは違う姿だからつてもあるんだろう。所謂ギャップ萌えつてやつだ。

「おいおいボス、私だつてメガネかけてるじゃないか」

「お前のはメガネじゃなくてただのサンングラスだろ」

「チツ…M4、ちよつとメガネを貸してくれないか？」

「ええ、どうぞ……」

トンプソンはM4からメガネを受け取り、サングラスを外してかけてみた。

「どうだ？」

「うーん……」

なんだろう、凄まじいコレジャナイ感。トンプソンは逆に普段のサングラス姿に慣れてるからだろうか。似合っていないことはないが、サングラスじゃないことにすごい違和感を感じる。

「トンプソンさんはヘリアンさんのようなモノクル片眼鏡なら似合うんじゃないんですか？」

「あんな婚期を逃して必死な人と一緒にしないでくれ……」

「ほう…トンプソン……。それは誰のことを言ってるんだ……？」

「ハハッ！そりゃあもちろん昨日の合コンでも失敗し……た……」

トンプソンの背後から子供に話しかけるような優しい声と未恐ろしい表情で彼女の肩を掴んだのは、ただいま合コン7連敗中のヘリアンだった。まあさつきまで一緒に会議してたんだからまだ支部内にいるわな。哀れトンプソン。

「へへヘリアンの姉御!?いやあ、違うんですこれは！あのー…その……！」

突然の本人登場でAIがバグったのか、普段の男らしいシカゴタイプライターはいずこへ。めっちゃめっちゃテンパってる。テンパってるトンプソンってなんか可愛いな。これまたギャップ萌えてやつか。しかしいくら可愛いとはいえヘリアンさんの怒りを買ったやつにこれ以上関わりたくない。すまんがここは撤収させてもらおう。M4と一緒に逃げるか。

「さて、俺は食事を済ませてくるよ。M4も一緒にどうだ？」

「あ…はい！ご一緒させていただきます！」

「そんな！ボス！M4!!」

「来いトンプソン！私と楽しい恋バナでもしようじゃないか……！」

さらばだ、シカゴタイプライター。君のことは忘れない、2分くら

いは。

「時に指揮官」

「うえっ!? な…なんででしょう…?」

急にヘリアンさんから声をかけられた俺は、驚きのあまり声が裏返ってしまった。M4が口を塞いで俯いてるけど、笑われてないよね？

「その…私も…メガネをかけたなら…異性の目を惹くことができるのだろうか…」

まさかこの人、さっきの会話を全部聞いていたのか…。いやなに顔を赤らめて部下にそんなこと聞いてんだよ。トンプソンとM4が（うわあ…）みたいな目で見てますよ。

「あ…ああ、そうですね…。可能性はあると思います。メガネ女子が嫌いな男なんていないでしょうから」

「つまり、普段からかけてる方がいい…ということでしょうか？」

「うーん…それもまたいいと思うんだが、やはりメガネ女子最大の魅力はズバリ！生活感だ!!」

「生活…感…?」

3人が声を揃えて首をかしげた。まあこればかりは男にしか分からないかも知ないかな。ふっ…よかろう、教えてあげよう！メガネ女子の魅力を!!

時刻は午後11時。遅い時間ながらふと小腹がすいた俺は近所のコンビニに立ち寄っていた。今日は土曜日だからな。明日も休みだし、なにか食べながらゲームでもするか。

財布を片手にお菓子コーナーへ立ち寄ると、なんと同じクラスの女子とぱったり出会ったのだ。

風呂上がりなのだろうか、可愛らしい寝巻きの姿…。黒髪からほのかに漂うシャンプーの香り…。いつものコンタクトレンズとは違い、知的なメガネをかけている彼女は、いつも教室で見かける可憐な

姿とはまた違った印象を与えていた。

「あ……えと、こんばんわ。こんなところで会うなんて奇遇だね」ニッコリ  
「お……おう、そうだな……その……メガネ姿って珍しいな」

「家だと面倒だし、寝る前だからね。家ではいつもこんな感じだよ」

い……家ではいつもそうなんだね!!ご両親の前ではそんな感じなんだね!!

自分だけが彼女の家での過ごし方を知っているという背徳感。それを煽るかのような彼女の微笑み。たまらず俺はレジでフランクフルトを買って食べさせたい衝動に駆られるうううっ!!!

?  
?  
?  
?  
?  
?

「と、まあこんな感じでメガネ女子には男を簡単にオトせるという強力なアドバンテージが……あれ?」

気づくとそこにトンプソン達の姿はなく、代わりにこれから夜間作戦へ赴くノーマッド率いるヘリパイロット達が、生ゴミを見るような視線を向けていた

「あんた……、こんなところでなに一人で妄想を垂れ流してんだ……」

こうしてまた、俺の黒歴史に新たな1ページが増えた。

「ああああああああああつ!!墮ちろ!あいつらのヘリ墜ちろ!  
『帰ったら一杯どうだ?いい店を知ってるんだ』」

つてフラグを立てた後にどこからかロケットランチャーが飛んできて墜落してしまえ!!」

「また一人でなにを言ってるんですか…指揮官さま……」

ひとり食堂で食事をしながら先ほどの失態に苛まれていた俺は、またまたカリーナに気味悪がられていた。

?

?

?

?

?

?

「ふーん、メガネ女子…ですか。でもさすがにその妄想は気持ち悪いですよ、指揮官さま…」

彼女にこの顛末とメガネ女子の魅力<sup>妄想</sup>を布教した俺は、またヘドロを見るような目を向けられる。あいつら<sup>ノーマット達</sup>からはともかく、女の子<sup>カリーナ</sup>からはさすがにヘコむわ。

「にしてもあのM4さんがメガネを……。たしかに彼女<sup>戦術人形</sup>たちのメガネ姿って新鮮ですね」

「そーいやカリーナも書類仕事とかパソコン使う時はかけてるよな、結構似合ってるぞ」

「あはは…、なんか照れますね……。指揮官さまもかけてみては?これなんてどうですか?」

「それお前がクリスマススの時にかけてたおふざけメガネじゃねえか」

—

—

翌日。俺はAR小隊を交えて、ヘリアンさんとクルーガーさんへ作戦報告をしていた。

「S04地区からの報告は以上です。クルーガーさん」

「分かった。これからもAR小隊を頼んだぞ、指揮官。ああそれとへリアン」

「?なんでしようか」

「新しいメガネに替えたんだな。老眼か?」

絶対に笑ってはいけないグリフィン  
24時

#6 恐らく、彼の妄想は現実にならない

## #7 いつでも、彼女は完璧を貫く

「今日もいい天気だな……」

賞味期限切れ間近の配給を手に、俺は窓から覗く雲一つない晴れ渡った蒼空を見上げてつぶやいた。

午前の仕事がいよいよほか長引いてしまい、やっとの思いで作業を終えて食事がありつけると思ったのだが、時計をみると食堂が清掃のために閉鎖されてる時間帯だった。コンビニ弁当でも買いに行こうと思っただが、この寒い中外へ出るのは気が進まない。なんかないかなー、と戸棚を漁っていると、備蓄していた野戦糧食レーションを見つけた。ちよūdいいや、賞味期限近いし捨てるのはもったいないから食べてしまおう。

……うん。相変わらずうまくもまずくもない味だ。クルーガーさんに品質改善の申し立てしようかな……。無理かな……。

思い詰めた表情で食べていると、コンコンとドアをノックする音が響く。俺は食事の手を止め、訪問者へ顔を向けた。

「HK416です、作戦から帰投しました」

「おう、おかえり。無事でなによりだ」

「損害報告と入手資源の詳細はこの書類を、ハイエンドモデルについての更なる情報はこちらに記載してあります」

「ありがとう、あとはやっつく」

やっどひと区切りついたと思えばまた新たな仕事だ。もうため息しかでない。とはいえ最前線へ投入され、生死を賭けた戦いをする彼女たち戦術人形に比べれば、書類仕事なんて生ぬるいものである。

彼女たちのお陰で今があるのだ。彼女たちの為にもへこたれてる場合ではない。

「……指揮官、なにを食べてるの……?」

「あ?ああ、レーシヨンだよ。食堂は閉まってるとし、賞味期限が近いからな。処理するにはちよūdいと思っただ」

「そんなんじや、お腹は満たせても元気でないわよ……。まだ仕事残っ

てるんでしょ？」

おっしやる通り、おいしいモノを食べないとやる気スイッチが入らない。やっぱりファ○マで弁当でも買ってくるべきだったか。

でも残業明けとか食堂に行けない時は大抵コンビニ弁当で済ませてるんだよな。けっこうな頻度で食べてるからちよつと飽きてきた。ちなみにセブン○レブンとファ○マの弁当はすべて制覇したぜ。

なんてドヤ顔で言ったら、『もっと身体にいいもの食べなさい！』とけっこうキツめに注意された。416から漂うお母さん感。

「はあ……忙しいのは分かるけども……」

「ははは……たまに食堂で食べられるだけマシだがな」

「……今日は一日中この部屋で仕事するの？」

「ああ、そのつもりだよ」

「……そう。あまり無理はしないでよ、指揮官」

そう言っただけで部屋から去っていく416に手を振り、食べ終わったレーションを片づけて再度仕事に取りかかる。今日中に終わればいいけど……。

「指揮官さま……、本当にいいんですか？」

「ああ、あとは俺の決裁が必要な書類と処理だけだから。こんな時間だし、カーリーナはもう休んでくれ。ありがとな」

時刻は夜の0時。昼から休憩なしのぶっ続けで必死に仕事をしてきたが、結局日付が変わるまでに終わらせることはできなかった。夜遅くまで残業に付き合ってくれたカーリーナを退勤させ、最後の仕上げに取りかかる。集中してやれば2、30分程度で終わるだろう……。多分……。

いや、正直キツイ……。お腹は減ったし超眠いし……。温かいオフタウンで寝たい……。でも朝まで終わらせないと……。あれ、眠気覚ましのがムどこだっけ。あ……昼に食べたので最後か。もうこのまま寝ようかな……。ダメだ仕事を終わらせ……寝たい……。お腹空いた……。

脳内で理性と欲望が死闘を繰り広げている矢先、深夜を回った時間にも関わらず訪問者が現れた。

「指揮官、入るわよ」

「ん…、416か。どうしたこんな時間に」

「目の焦点が合っていないわよ、どこ見てるの……」

そういつて彼女は俺のもとへ近づいてデスクに散乱している書類をかき集めてペラペラとめくり、仕事の進捗具合をみる。

「なによ、指揮官の決裁が必要な書類なんてないじゃない」

「あー…？なんでそれを……？」

「さつきカリーナに会ったのよ。あなた、彼女に気を遣ってあげたんでしょ」

はは…バレたか。こんな時間まで部下に手伝わせるのは気が引けるからな。カリーナは若い女の子だから尚更だ。ここまでスムーズに進んだのも彼女の尽力あってこそなのに、これ以上迷惑をかけるわけにはいかない。

「無理しないでって言ったのに……。そんなふうになるまで自分を追い込むのはかえって効率が悪いわよ」

「ぐうの音も出ねえ……」

「仕方ないわね…、あとは私がするわ。幸いそこまで大変なものでもなさそうだし」

「いやそういうわけには……」

「……あれからなにも食べてないのよね？」

「あ？ああ、そうだな。ガムぐらいしか食べてない」

「…はいこれ、私が仕事を片づけている間に食べて」

すると、416は可愛らしいネコのデザインがあしらわれた小さめのトートバッグを差し出した。中身を見ると入っていたのは弁当箱。

「指揮官のお口に合うかは分からないけれど。…たまには栄養のことを考えなさい」

「416……」

まさか416の手作り弁当を食べられる機会があるとは思ってもなかった。というか、誰かの手料理を食べるなんて何年ぶりだろう。

ヤバイ泣きそうだ…。めっちゃめっちゃ温かい…。

弁当箱のフタを開けると、お弁当には欠かせないウインナーや玉子焼きなどの定番から、小さいナポリタンやベーコン巻きなどのひと手間加わったものまでバラエティーに富んだものとなっていた。

もちろんトマトやブロッコリーなど色とりどりの新鮮な野菜も入っており、栄養バランスがきちんと整ったものとなっている。

極めつけは様々な具材を駆使してネコのキャラクターを描いたご飯だった。いわゆる”キャラ弁”ってやつだな。食べるのがもったいないくらい上手くてできる。

けれども部下に自分の仕事を任せてのうのと食事をするのはさすがに躊躇する。こんな俺でも指揮官としての威厳ってものがあるのだ。しかしこんな美味しそうなものを目の前に置かれては、どうしても俺の腹の虫が鳴ってしまう。携帯の着信音かな？ってくらい鳴り続けている。誰かから着信や通知が来ることなんてめったにないけど。

「……いいのか？」

「このまま睡眠不足と空腹で倒れる方が困るわよ」

「…いただきます」

デスクにいる416が小さな声で「召しあがれ」とつぶやくと同時に、俺は半日ぶりの食事を口にした。質で考えるとこのようなまともな料理は1週間ぶりである。空腹は最大の調味料とよく言うが、それを抜きにしても416の手作り弁当は絶品だった。あまりのおいしさに箸が止まらない。おそろしく速い箸さばき、俺でなきや見逃しちゃうね。

「お味はどう？」

「…めっちゃくちゃうまいです……！」

「！……そう、ならよかったわ」

「いやー、さすがというか416はすごいな」

「当然よ、私は完璧なもの」

心なしか416の声がいつもより明るい気がする。ともあれ仕事を手伝ってくれるだけでなく、わざわざ手の込んだお弁当を作ってく

れるとは、416には感謝してもしきれない。俺はものの数分で彼女の手作り弁当をたいらげた。

「ふう…、ごちそうさま。美味しいものでお腹いっぱいになるなんて久しぶりだなあ」

「お粗末さまでした。私ももう少しで終わるからシャワー浴びてきたら？」

「えっ、いやお腹も膨れたことだし、後の仕事は俺がやるよ」

そういつて書類とペンを手に取ろうと伸ばした俺の腕を、416が掴んで制止した。

「本当にあと少しで終わるから。指揮官はお風呂に入ってリフレッシュしてきなさい。疲れがちゃんと取れないわよ」

「でも……」

「いいから」

昼間の時のような有無お母さんモードを言わさない416の指示には逆らえず、結局彼女へ労いと謝罪、感謝の旨を伝えて、俺は自室に備え付けられた風呂場へと向かった。



「いやあ…こんなに心に余裕を持ってシャワーを浴びたのは久しぶりな気がする」

心身ともに清らかになり血行もよくなった俺は、先程とは見違えるほど清々しい顔で風呂場からデスクへ戻った。

「普段どれだけ過酷な日々を過ごしてるのよ……」

「最前線に駆り出される中間管理職ってのはそういうもんさ、ほんとイヤになる」

「はい、全部終わったわよ。確認する？」

「ありがとう、416のことだからミスはないだろうし大丈夫だろ」

俺は416のことを信頼している。どれだけ厳しい作戦でも難なくこなすし、俺が管轄する部隊のなかでは比較的古株であるということもあるが、ただそれだけが理由というわけではない。

404小隊……特に416と45は心を開いてくれるまでかなりの時間がかかった。作戦中の指示や情報伝達など、仕事に関してはごく普通に接してくれるのだが、それ以外の場面で会話することや触れ合う場合は皆無と言っている。

当時の416はかつてのVectorのようにどこか壁を隔てて、“指揮官”と“戦術人形”の関係に徹していた。45は表面上は気さくに接してくれるものの、人間に対して心の奥に深い闇を持っているのか本心を見せてはくれなかった。まあ戦術人形を人間のように接する俺が不審というか奇妙というかなにか裏があると感じたのかもしれないが……。

ではどうやってここまで親密な関係になれたのか、と答えたいところだが今回は割愛させていただく。とどのつまり、長い時間と多大な労力を費やして得た人間関係というものは、それに見合う信頼関係へと成り立つのだ。

「こら、ちゃんとタオルで髪を乾かさないと駄目でしょう」

ぼーっとしてたら416にタオルで頭を撫でられていた。彼女の優しい手つきが、幼少期に同じことをしてくれた母親を思い出させる。

「……おかん」

「な　ん　で　す　っ　つ　て　？」

「すみません……」

「まったく……はい。あとは自分で乾かしなさい、私は部屋の片付けをするから。朝から仕事あるんだし、はやく寝なさいよ」

「ああ、ありがとう……」

—————  
—————  
—————

……。

……。

……。

眠れない。なぜだ。先程まで睡魔と戦っていたのに……。隣で41

6がゴソゴソと散らかった部屋の片付けをしているが、物音はとても静かで安眠を妨害するほどのものではない。だがなぜか、どうしても寝つくことができないのだ。

「416」

「あら、起こしちゃった?」

「いや、そうじゃない。さっきまで眠かったのになぜか寝れないんだ」  
こうなったら睡眠薬を飲むしかない。20代で薬がないと眠れないってどうなのよ。

416に引き出しから睡眠薬を取ってくれと頼んだが、ため息混じりに拒否された。

「まさか薬に頼らないといけないレベルにまで追い込まれてるなんて…。仕方ないわね……」

すると416は片付けのために動かしていた手を止め、なにを血迷ったのかベッドに入り込んできた。

「444416さん!? ななななにを……!」

「質のいい睡眠を得られないと困るでしょう。私が添い寝してあげるわ」

いやいやいやいや! これ逆にドキドキして眠れねえよ!! あっ、なんか腕に柔らかいものが……

わ…分かった! ドッキリだな!? カメラはどこだ!? どうせ45が、『ドッキリ大成功!』って書いた看板を持ってるんだろう! 出てこい45!!

「そんなもんじゃないわよ……。いいからはやく寝なさい」

と、グイッと身体を引つ張られ、416に抱きつく感じになってしまった。あ…でもこれ落ち着くかも……。416自身の温かさと、彼女が寄り添ってくれている安心感が相まって心が安らいでいく。一気に瞼が重くなつていくのが分かる。

「……416」

「なに?」

「ありがとな……」

「ふふ…おやすみ、指揮官」

彼女に頭を撫でられながら、俺は深い眠りについた。

「……………」

時刻は午前7時。こんなスッキリとした目覚めは久しぶりだと感心しながら隣を見たが、そこに416はいなかった。俺が寝ている間に自室へ戻ったのだろうか。とにかく恋愛漫画でよくある朝チュンの展開にはならなかった。

が、なんか隣の部屋からすごいおいしそうな匂いが広がってくる。寝起きにもかかわらず食欲を刺激された。

「あら、起きたのね。朝食できてるわよ」

「わざわざ作ってくれたのか?」

テーブルには芳醇な香りをするコーヒー、こんがりと焼けたトーストにスクランブルエッグやソーセージ。低い気温で冷えた身体を温めてくれるスープが用意されていた。

「416みたいなお嫁さんがいたら幸せだな…」

「なっ…!?!」

しまった。あまりの出来栄えに本音が漏れてしまった。

途端に顔を赤面させた416の顔を笑いながら撫で、「ありがとう」と感謝の言葉を伝える。

冷めないうちに食べないとな、これなら今日の仕事も頑張れそうだ。

「うん、うまい!やっぱ416の料理は完璧だな」

「ふふっ…、ええもちろん。私は完璧よ」

#7 いつでも、彼女は完璧を貫く

## #8 天才と変態は紙一重

午前中の会議を終わらせ、俺は部屋でキーボードを叩きながら戦術人形のバイタリティや周辺地域の治安情報が表示されたモニターとにらめっこをしていた。けれどもあまり根を詰めていると416ら辺に怒られそうなので、少しひと息つこうとキーボードを打つ手を止め、時間が経ってぬるくなったコーヒートを啜る。

ふと時計を見ると、後方支援へ送り出した部隊が帰還する頃合いだった。幸い今日中に終わらせないといけない仕事は済ませたし、せっかくだからあいつらの出迎えでもしてやろう。

しばらくぶりに席を立つてヘリポートに向かおうとした矢先、充電しているスマホから着信音が鳴り響く。

おおっ珍しいな。暇つぶし機能付き目覚まし時計と化した俺のスマホに誰かから電話がかかってくるなんて。あまりにも珍しすぎて一瞬なんの音か分からなかったレベルだ。えーつと誰からだ……？

—— ペルシカさん ——

応答 ↑—— 着信中 ——↓ 拒否

「……。」

と…取りたくねえ…。あの人から着信ってことは多分ロクなことじゃない。なにかしら面倒ごとを押し付けられるに決まってる。誰が好き好んで自分から請け負うのかって話だ。

うん、無視しよう。もし今度会った時になんか言われたら、『すみませーん、会議中で席を外してましたー★』とでも言えばいいだろう。戦術指揮官というのは多忙な仕事なのだ。『I. O. P社の首席<sup>ペルシカ</sup>研究員さんよりも忙しいのか?』という質問に関しては、現在担当者<sup>ペルシカ</sup>が不在のためコメントは差し控えさせていただきます。

「さーて、そんなことよりあいつらの出迎えに行かないと……」  
一向に鳴り止まないスマホをソファアールへ放り捨て、俺は上着を羽織って部屋を出た。

タンDEMローター式のヘリ、CH-47のローター音が広大なヘリポートに響きわたる。吹き荒れる強風に耐えながら、後部ハッチから戦術人形たちが出てくるのを待つ。

「ご主人様ー！ただいまー!!」

最初に元気よく飛び出して来たのはG41だった。後方支援に出ている時間はたったの半日ほどだったが、まるで数年ぶりに会う親子のようにはしゃいで俺に抱きついてきた。

「おう、おかえり。よく頑張ったな」

そう言っって頭を撫でてやれば、彼女はこのために仕事を頑張ったと言わんばかりの満足気な表情を浮かべる。ふとハッチの方に目をやると、他の隊員達が続々と降りてきた。

「まったく…、G41は相変わらずだな……」

「ははっ、ボスも罪な男だぜ」

そう言っってきたのはダネルNTW-20とトンプソン。やれやれと呆れながらも、G41へ送る視線はとても優しいものだった。

「お疲れ、ダネル。怪我はなかったか？」

「ああ、心配ない。後方で狙撃してたし、敵には見つからなかったからな」

「おいおいボス、怪我の心配は私にしてくれよ」

「お前は耐久性的に考えたら死ぬこと以外はかすり傷だろ」

そう言っって冗談を混じえながら2人の頭を撫でる。G41のようにコロコロと表情を変える2人ではないが、戦闘での疲れが癒されたのか、少し顔をほころばせて微笑んでいる。女の子の頭を撫でるのってなかなか勇気がいるんだぞ。ちなみに人間の女の子を撫でたことはない。

なんてことをやっていると、トンプソン達の後ろから妙にそわそわしながらこちらを見ているM i c r o U z iの存在に気づく。彼女のことだ。こういうのには自分から寄ってこれないだろう。もうちよつとそわそわさせたいが、あまり焦らすのも可哀想なので気を遣うことにした。

「おかえり、U z i。よく頑張ったな。期待していた以上の戦果だ」  
「……別にあんたのためじゃないんだからね！勘違いしないでよね！！」

「あら、帰りのヘリで『これなら指揮官も喜んでくれるかな』ってつぶやいてたのは誰だったかしら？」

会話に参加してきたのはA R—15。本来なら彼女の所属はA R小隊なのだが、試験的に別部隊の人形達と組んで作戦に参加してもらったのだ。

「ちよつ……ばつ……バカじゃないの!?!私がそんなこと言うわけないじゃない!!」

突然のカミングアウトに慌てるU z iを落ち着かせようと優しい手つきで彼女の頭を撫でたのだが、どうやらそれは逆効果だったようで顔を赤くして宿舎の方へ走り去ってしまった。

「ははは……。お疲れ、A R—15。A R小隊以外のメンバーでの作戦はどうだった？」

「実戦では初めてでしたが、模擬作戦などでM4達以外の子と組むことはよくありましたから。それほど問題もありませんでしたし、順調でした」

「そうか、じゃあ今度M4たちも他の人形と組みさせてみよう」

そういつて一緒に基地内へ戻ろうと歩を進めると、A R—15が俺の服の裾を引っ張っていることに気づく。

「……どうした？」

「指揮官……その……、私の頭も撫でてください」

そこには普段のクールで凛々しい姿はなく、顔を赤くしてモノ欲しげな表情を見せる可憐な少女だった。

「ああ、よく頑張ったな。A R—15」

「指揮官、私も撫でてよ」

「はいは……あん？」

本来ならこの場にはないはずの者の声が聞こえ、思わずその声の主を二度見した。こんなこと、誰が予想できただろうか。

「ペツ…ペルシカさん!?なんでここに!?てか今へりから出てきませんでした!?!」

ARR-15の背後からひよつこりと顔を出したのは、かの16Lab首席研究員ことペルシカさん。そう、さつき電話を掛けてきたヤベーやつである。

「実は指揮官に用があつてね。ARR-15に連絡して研究所に迎えに来て乗せてもらったの。事前にアポを取ろうと思つて君に電話を掛けたけど出なかつたでしょ?」

なんだと。いや、だからといって帰還する最中とはいえ作戦行動中であるPMCのへりをヒッチハイクするって、普通に考えておかしいでしょ。ARR-15も勝手にになにやつてるんだ。

「す…すみません!私もこのような真似は決して許されることではないと思つたのですが、グラニットさんにペルシカとの会話を聞かれて……」

「うんうん、グラニット彼は話が早くて助かるわ。ふたつ返事でわざわざ迎えに来てくれたんだから」

「……。」  
想定外すぎて思わず頭を抱える。とりあえずARR-15以外の人形たちに、宿舎に戻つて修復を済ませるよう指示を出し、俺は全ての元凶であるへりパイロットのグラニットの元へ詰め寄る。

「おいお前なんてことしてくれたんだ…。よりよつてペルシカさんを連れてくるなんて……」

「いや、だつてあの美人なペルシカさんだぞ?そんなお方の頼みを断るわけにはいかにないに決まつてるだろ」

「テメエの好みなんて聞いてねえんだよツ!そんなんだからお前はいつまで経つても童貞なんだよグラニットオオツ!!」

「さんをつけるよデコ助野郎」

「指摘するところそこなんですね…グラニットさん……」

「あははっ！やっぱり指揮官は面白いねえっ！」

「すみません、こんなものしか用意できなくて」  
「いえいえお構いなく」

AR-15に後ほど作戦報告書を提出するよう指示し、ペルシカさんを執務室へと案内した俺は、コーヒーを差し出して本題へ切り込む。

「それで、ペルシカさん。ご用件とは？」

「指揮官はさ、”ケモ耳”って好き？」

「……はい？」

思いがけない質問に一瞬思考が止まってしまった。ケモ耳……というTMPやG41のアレだろうか。

「うーん…TMPの猫耳も一応そうなんだけど、ここでいうケモ耳っていうのはIDWやG41みたいなリアルな方のヤツだね」

「はあ…。別に嫌いではないですけども……」

「だよね！やっぱりそうだよね！指揮官なら分かってくれると思ってたよ!!」

「ペルシカさんちよつと…近いです……」

こうして見るとグラニットがペルシカさんのことを美人だと評価する気持ちは分からんでもない。顔はキレイな方だしな。隈が酷いけど。

「私もね、猫耳や犬耳などのケモ耳は大好きでね。私は主任だから自分の好みで人形たちの外見をデザインすることができるわけなのよ」  
「つまり、戦術人形の外見にはペルシカさんの性的嗜好や性癖が詰まっていると」

他人のそういうのを知るのってなんかやだな……。

「ふふっ、それはちよつと大げさよ。あくまで見た目の可愛さを追求しただけだし」

「で、A R小隊の外見を考案する際にも猫耳を付けようとしたのよね」  
「でもほら、A R小隊はいわゆる”戦術人形による特殊部隊”って位置づけじゃない？だから戦闘に必要なもの以外は付けるなあって上に怒られちゃって……」

「はあ…それで結局ペルシカさんの意見は通らず、標準的な人型のまま開発されたと……」

「そういうこと。あーあ、やっぱり強く反対するべきだったかなあって前までずっと思ってたんだけど……」

「ところがどっこい。ここからが本題なんだけど、ついにオプション装備の開発に成功してね……」

「オプション装備？」

話の流れ的にしようもないんだろうな……。ロクなもんじやなさそう（予感）

「それがこのカプセル！ケモミミハエール！」パツパカパーン

ロクなもんじやなかった（的中）

「見た目は戦術人形の強化に使うただの増幅カプセルだけど、これを飲めばなんと猫耳や犬耳が生えてくるのよ!!」

「ソツスカ」

「試作品だからどんな耳が生えてくるかは完全にランダムなのよね。持続時間はだいたい目安として24時間程度」

「スゴイツスネ」

「で、これをあなたの部隊の人形に投与して実験してほしいの」

「へー……」

「……はあっ!？」

なにそれ……。 (困惑)

いや、なにそれ (再認識)

「それ、服用したらAIがバグったり不具合が起きたりしませんよね……っ?」

「そういう検証も含めての実験よ。まあそんなヤバい成分を含んでいるわけじゃないし大丈夫よ★……タブン……」

「いま、たぶん」って言いました？」

「あーつとー！これから16Labで専用装備の開発しなきゃいけないんだった!!その薬の詳しいことはこの紙に書いてあるから！」

「ちよつ……！ペルシカさん!？」

「じゃ、頼んだよ指揮官。君ならその薬の良さを分かってくれると思うわ。あ、グラニットとヘリ借りていくわね」

そういつてペルシカさんは足早に執務室を出ていった。部屋に残っているのは面倒ごとを押しつけられて困惑している俺と、忌々しい問題の薬だけだった。

「……。」

「……………」

「…これ、どう使えばいいんだろう（裏声）」

「まさかとは思うけどそれ私のマネじゃないよね？」

「!？」

振り向けばそこには汚物を見るような目でこちらを見るUMP45の姿が。お前いつからいたんだ……。

「ついさっきよ。指揮官がペルシカにコーヒーを渡してた時ね」

「会話の冒頭からじゃねえか」

まずいな……。よりによって一番マズいヤツに知られてしまった。45の目を見れば分かる。あれは新しいおもちゃを手に入れた子供のような目だ。

「しきかあくん♪面白そうなもの持ってるわね、私にも見せて♪」

「ダメだ、お前が絡んでくると厄介ごとが増える」

「ひどいなあ…そんな悪いことにはしないわよ？」

「俺は騙されんぞ。前もそう言っつてペルシカさんから押し付けられた誓約の指輪（試作品）の存在を皆に言いふらしただろ」

おかげで部隊の人形たちに言いよられてきて大変だった。普段大人しくて奥手なM4でさえ、積極的になってきたほどである。

「いいか、このことは絶対に誰にも言うなよ」

「口止めするのはいいけど……なにか見返りがほしいなあ」

そう言う45の目は例のカプセルに釘付けだ。

「それ、最初は私に飲ませてよ」

「…本気で言っているのか？」

「本気よ。今のところ私と指揮官、2人だけの秘密なんだしちようどいいじゃない？もし問題が起きてもそんなに広まることはないわ」

彼女の言うことも一理ある。ここで第三者の人形へ渡して無駄に話を広げる必要はない。それでもしなにか問題が起きれば支部内は混乱するだろう。この場にいるUMP45だけならば、最悪の場合は俺一人でなんとかすることはできる。

「……分かった。言う通りにしよう」

「やった♪指揮官のそういうところ好きよ♪」

よく言うわ……とため息をつきながら、例のカプセルを彼女に手渡した。

この時はまだ知らなかった。まさかあんなことになるなんて……

## #8 天才と変態は紙一重

## #9 彼女の本音は彼に届かない

前回、『UMP45一人なら俺だけでもなんとかなる』と言ったな。

「しきかん…ごめん…我慢できないかもおっ……」

「ちよっ！待て45……！クソっ！動けねえ……！」

「……にやあく♪」

「…っ!?!どこ舐めっ……!?!」

あれは嘘だ（涙目）

さかのぼること数分前……

? ? ? ? ? ? ?

「あら、案外すんなりと渡してくれるのね」

「これに関してはお前の言い分が正しかったからな。今回だけだよ」

ケースからカップセルをひとつ取り出してUMP45に手渡す。が、彼女はなぜか受け取らない。

「?…なんだ?飲まないのか?」

「ん〜?せつかくだし、普通に飲むんじゃないか?……」

45の眼差しは、いつものように何かよからぬことを考えている時の目だった。俺は過去の事例から危険を察知し、少し距離を取ろうと

後ろに下がる。

が、一歩下がったところで壁に背中が当たり、完全に逃げ場を失う形となってしまった。

トンツ…

「指揮官に口移ししてほしいな♪」

「っ!？」

両手で壁につき甘い声でおねだり悪ふざけをしてくる45。壁ドンって普通は男がするもんじゃないの？

「…あまり俺をからかうな、本気にしちゃうだろ」

身長差も相まって至近距離から上目遣いで見つめられ、堪らず目を逸らしてしまう。やはり予感は的中していた。

このように、45は二人きりになる度にいつも俺をドキドキさせては、その反応をみて楽しんでる。前回グラニットのことを『童貞』呼ばわりしていたが、お察しの通り俺も童貞である。おまけに女子への耐性が皆無なのだ。

とはいえ相手は生身の人間ではなく戦術人形なので、それほど困るものでもないはずなのだが……。

「ん〜？なんで目をそらすのかなあ〜？」

「ちよっ…近い…!」

悔しい！でもドキドキしちゃう!!童貞で遊んじやいけませんって何度も言ってるでしょっ!〜

「い…いいからさっさと飲めっ。こんな面倒ごととはさっさと終わらせるぞ」

「ふふっ♪本気にしてもいいのに〜」

「はいはい、そういうのはグラニットにしてやれよ」

俺はさも冷静を装って45を適当に受け流す。本当はドキドキして顔がにやけてるんだけど。いや、45のことだから多分見透かされてるんだらうな…。

「じゃあ飲むわよ?」

「おう、グイツといっっちゃえ」

ゴクンツ

「……」

「…どうだ？」

「うーん…別になんともないけど…。これ本当に効果あるの？」

「一応試作品らしいからなあ。失敗作なのかもしれない」

「ぎーんねん。せっかく指揮官を萌え死にさせようと思っ……」

「……？」

途端、45の口が止まった。どうしたのかと振り返ると、口だけではなく45のすべての動作が停止していたのだ。彼女の目の前で手を振ってみるがなにも反応がない。

戦術人形の活動が完全停止する条件は主に三つある。

一つは自身の修復やスリープモードへ移行する際の活動休止状態。二つ目は人工血液の失血やコアの破壊など、動力源が無くなることによる停止。そして三つ目はAIの破損である。これまでの状況から考えると、停止の理由は確実に三つ目だろう。

見た目は人間そっくりの戦術人形だが、完全に動きが止まればその人間らしさはたちまち消え、あくまで彼女たちはロボットなのだという現実を嫌でも叩きつけられる。

「…45？」

恐る恐る彼女へ問いかけるが返事はない。なにか異変が起きたのか。AIに不具合が生じたのか、バグが発生したのか。はたまた取り返しのつかないことになってしまったのか。

不安や後悔、大事な仲間を喪った消失感に苛まれるなか、指揮官はひとつの解決策を見出す。

そういえば、ペルシカが帰る際にある紙を渡された。カプセルの詳細が記されているらしいのだが、この状況を打破するカギになるかもしれない。

急いで二つ折りになっている紙を開き、書類仕事で培われた速読術を最大限に活かす。とりあえず今は全文を読んでいる暇はない。

「なにになに……、『強制停止について——ケモ耳を生やすだけ

でなくメンタルもケモノ化させるため、AIの書き換えを行っている状態。正常なので不具合等ではない。』…か。」

「どうやら最悪の事態は避けられたらしい。胸をなでおろして安堵すると、45の身体がほんの少しだけ動いた。どうやら目を覚ましたようだ。」

「し…きかん…」

「45！起きたkぐえっ!!」

俺は45に床へ強く押し倒された。

「45…なにをして…うおっ！本当にネコ耳が生えてる！すげえ!!」

「しきかん…ごめん…我慢できないかもおっ…」

「は？なにを言ってる…」

俺が疑問を口にするよりも早く、45が抱きついてきた。

「ちよっ！待て45…！クソっ！動けねえ…！」

立ち上がるにも戦術人形が抑えつける力に人間が勝てるわけもなく、彼女の拘束を解こうとするがビクともしない。

「……にゃあく♪」

「…っ!?どこ舐めっ…?!」

あらわになつた首元を45の舌が伝う。その姿はまるで主人に甘える飼い猫のよう。俺はというと今まで体験したことのない感覚に思わず身体が跳ねてしまった。いくらなんでも童貞には刺激が強すぎである。

いや誰だコイツ（困惑）

本当に45か？いくらなんでも人格変わりすぎだろ…。

「しきか〜ん♪」

「分かった…！分かったから身体を擦りつけるのはヤメナサイ!!」

服越しとはいえ美少女に全身をスリスリと擦りつけられて無反応でいられるだろうか、いやいられないだろう（反語法）

普段からG41やSOPMODの相手で慣れてはいるものの、さすがにこれ以上甘えられると理性が吹っ飛びそうなので、とりあえず頭を撫でて落ち着かせる。欲望に身を任せて過ちを犯すわけにはいかない。

「♪」

「はは…、普段もこんなに素直だと助かるんだがな…」

思わずポロツと出てしまったつぶやきを聞いて、少し落ち着きを取り戻した45はムツとした表情になる。今まで自分がしてきたことは本意ではなく、あくまで薬のせいであることを主張する。

「…私だつて好きでこんにゃことしててるわけじゃにやいんだから…！」

「……」

「……」

「えっ」

「にや…にやにこれ!?」

「これは……」

ここで新事実。まさかの猫語である。あまりにも恥ずかしかつたのか、45の顔がみるみる赤くなっていく。こいつもこんな顔するんだな。初めて見た。

「うー……これじゃあまともに喋れにやい…」

「まあ416やM16が聞いたらめっちゃめっちゃ笑うだろうな」

頭にびよこんと生えたネコ耳。薬のせいとはいえ、俺にデレデレな甘えっぷり。加えて口調が猫語になるといふ、普段のエリートな彼女からは想像できないギャップ萌えの連続。ペルシカさん、あんた最高だよ。

「こんにゃの他の人に見られたら…」

うなだれながらもネコ耳をびよこびよこ動かす45。それ動くんだ、すごいな。

「つていつても明日のこの時間までは多分そのままだぞ…」

「……」

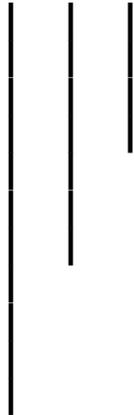
いまものすごく後悔してるんだろうな。より一層絶望に打ちひしがれてる顔をしている。とはいえ自分の意思で薬を飲んだわけだし、自業自得といえはその通りである。本来ならいつもからかわれる仕返しとして、無慈悲に見捨てたいところなのだが……。

「にやんでこんにゃこと……」

可愛すぎるので救いの手を差し伸べることにする。こっ…今回だけなんだからねっ!!

「…仕方ない、薬が切れるまではこの部屋にいろ。幸いなにも予定はないしな」

「にやあん……」



「45さん?」

「にやに?」

「なんで僕の膝に座ってるんですか?」

「さあ?」

「正直おも「は?」ナンデモナイツス」

怖い。

仕事は済ませたしすることもないのでどこかへ出かけたいたのだが、45を置いて部屋を空けるわけにもいかないし面倒を見なければならぬ。となると必然的に俺もこの部屋で今日を過ごすしかないのだ。室内でできることなんて限られているが、こうして45とゆっくり部屋で過ごすのもたまには悪くないかもしれない。

「にやんでか分からなやいけど、指揮官の膝がすごい落ち着くんだよね」

「薬のせいだろうな、普段の45ならしないだろうし」

「してほしい?」

「べっ…別に!」

ふふつと笑ってた45だがすぐに退屈そうな顔を見せる。俺はというとソファに座って久しぶりにゲームで遊んでるわけだが、45はゲームよりも身体を動かしたいらしい。もはやただの活発な仔猫である。

「ねえ、しきかくん。ゲームばかりせず私と遊んでよ」

「悪いな45、このゲームは一人用なんだ。だいたい友達もいないのにみんなでするゲームを買うわけないだろ」

「いやゲームでは遊ばにゃいけど…。この前RFBとやってたじゃん」

「…なんで知ってたんだ…」

「さあね♪」

「そうかよ…まあそれはそれ、これはこれだ」

「むう……」

再びコントローラーの操作に集中する俺が気に食わなかったのか。膝に座るのを辞めたかと思えば体勢を変え、対面座位の姿勢になった。いわゆる『だいしゆきホールド』ってヤツ。

「なっ…い…おい!!45…!」

「あはっ♪しきかんの心臓がすごいバクバクしてる♪」

こども密着されれば無理もない、童貞だもの。相変わらずこいつは人をからかうのが好きだな、ある意味で天敵だ。

だが45のターンはまだ終わらない。

「ねえ…指揮官、私と楽しいこと…しよ?」

「…っ!!」

耳元で囁かれ、強い刺激に思考の処理が追いつかず身体が固まってしまう。あ、やばい。理性が……。

「なあ45…お前は薬のせいでおかしくなってるんだ…。すこし冷静になれ。なっ?」

まだだ…まだ終わらんよ!俺はありったけの自制心をかき集めて45を落ち着かせる。めっちゃめっちゃ声が震えてるけど。

「んー、それもあるだろうけど……」

「!？」

ぐいっとソファに押し倒された。あれ、これすごいデジヤブ

「もつと指揮官と繋がりたいって、ずっと前から思ってたよ?」

「なっ……」

服に手を入れて胸を撫でまわされる。耳にかかる彼女の吐息、イヤらしい手つきと味わったことのない感触にアタマがクラクラしてき

た。45から漂う甘い香りが、麻薬のような快楽を誘発する。

その告白はいつもの悪ふざけなのか、それとも彼女の本心なのか。いや、もう難しく考えるのはやめて、目の前の45を受け入れようか。

「ねえ…しきかん……」

「うあつ…」

耳元で囁かれる度に、僅かに残った理性が崩壊していく。正直もう限界だった。

45…もう……

「にゃんちやつて〜♪」

「…はっ??」

パツと動きを止め、そそくさと俺から離れる45。先程まで男を誘惑していたとは思えないほど、流れるような素早い動きだった。

「ふふっ♪本気にしちやつた?」

「……お前……」

もはやため息しかでない。やはりこいつはこういうヤツである。あまりにも悪ふざけがすぎるのでキツク言いたいところだが、欲情した自分もいるので一概に怒ることはできない。どうしようもないので考えるのをやめることにする。

「…ごめん指揮官、ちよっとお手洗い借りるね」

「はいはい、トイレでもどこでも行って…?」

不自然なほど足早に去っていく45。一瞬でよく見えなかったが、彼女の顔が紅く染まっていた。

「あいつ…?」

なんで顔を赤くして?…と疑問に感じたが、この際もう面倒なのでやっぱり考えるのをやめることにした。

「私のバカ……」

一人トイレの個室で佇み後悔に耽ける45。顔を手で覆い、項垂れるように落ち込んでいる。彼女は先ほどの愚行を後悔していた。

さっきの告白は、間違いなく本心からの言葉だった。いつも指揮官をからかう私だけど、それは私なりの照れ隠しと愛情表現であった。大好きな彼に想いを告げたい。

だが彼は戦術人形を人間のようには扱いきれず、”一人の女性”として、すなわち恋愛対象としては見ていない。そんな彼に告白をしても、結果は目に見えている。先日ペルシカが持ってきた誓約の指輪（試作品）の件で確信したのだ。

彼は、戦術人形 私たちをそういう目で見ていない。

頭ではそれを分かっているけども指揮官から直接拒否されたら、多分私は私でいらなくなる。すべてを放棄してしまうだろう。

にもかかわらず、薬の力とその場のノリで過ちを犯すところだった。私としたことが冷静じゃなかった。

「にやにしてんだろ…わたし…」



「うん、やっぱりムカついてきた」

先ほどから考えないようにしていたが、やっぱりよくよく考えたら腹が立ってきた。これは然るべき報いを45に与えなければ。童貞で遊んだら痛い目を見るってことを教えてやらないとな…！

「あいつがトイレから戻ってきたら仕返してやろう、飢えた狼は恐ろしいんだぜ……」

もちろん本当に襲うわけじゃないけどな。ただ10倍返しくらいはさせてもらう。……来たっ！

「ちよつと指揮官…トイレトペーパーが切れかけだったんだだけ…!？」

不意をついて45を壁に押し倒す。か…壁ドンってこんな感じでいいんだよね…!？」

「し…しきかん？」

恥ずかしすぎて声が震えそうだが、勇気を出して自分を奮い立たせる。

「いつも俺が手を出さないと思うなよ？男を甘く見てると後悔するぞ」

45の顎をクイツと持ち上げ、キスをして（当然しない）やろうと顔を近づける。

「…っあ…」

（なんで抵抗しないんだこいつ…）

少しでも拒絶の意志を示せば辞めるつもりだったのだが、なぜか45は動かない。意地でも耐えるつもりか…？

そうしている間にもどんどん顔は近づいていく。お互いの唇が触れ合うまであと5cm…3cm…1cm…

「指揮官、入るわよ。明日の模擬訓練についてだけど…」↑業務連絡で訪れた416

「あつ…」↑45を押し倒して無理やりキスをせがんでいる（ように見える指揮官）

「んにゃっ？」↑顔を赤らめているうえにネコ耳を生やしている45

「「……」」

「これは…どういう状況かしら…?」

#9 彼女の本音は彼に届かない

#10 いつも、彼は彼女たちに振り回される

「指揮官……」

「詳しく……説明して下さい……」

「今、私は冷静さを欠こうとしています……」

「イヤ……ソノー……」

「ちつ……違うのよ416！指揮官はホラ……！ふざけてただけで」

「45、指揮官に脅されたんでしよう。ネコのコスプレまで強要されて……」

「大丈夫、あなたは悪くないわ。全部この変態指揮官が悪いんだから……!!」

すごい誤解が生じてしまっている……。いや、こんな状況じゃあそういう考えになっても無理はないけども……。とにかく416をなんとかして落ち着かせよう。きちんと説明すれば……。

「……待て416、違うんだ。これは……ペルシカさんに頼まれたカプセルの実」

ダアーンツ！

瞬間、416がセカンドリとして身につけているHK45が火を吹いた。一発の・45ACP弾が顔を掠め、すぐ後ろの壁にめり込んでいる。

「あ……」

「もう少しまともな言い訳をしてください……指揮官」

怖い。

とてつもない覇気だ……。今のこいつなら1人でマンティコアくらいは倒せそう……。あの45でさえ、あまりの狂気に萎縮して動けないくらいだ。

「もう一度聞きます、指揮官。あなたはここで45になにをしたんですか？」

ダメだ……本当のことを言っても分かってもらえそうにない。45を頼りたいところだがこの状況じゃあ無意味だろう。

すると、先ほどの銃声を聞きつけた1人の戦術人形が駆け足でやってきた。

「指揮官！さっきの銃声はなんですか!？」↑武器を手に突入してきたM4

「……」↑指揮官を狙いながらも黙ってM4を睨む416

「え……M4……」↑416に銃口を向けられている指揮官

「あー……」↑ネコ耳を生やしてその場にへたりこんでいる45

カオスとしか言いようがないこの状況に舞い降りた1人の天使<sup>エムフォエル</sup>もといM4に416を取り抑えるよう頼み、俺は事の真相を打ち明けた。

「はあ……ペルシカがそんなカプセルを……」

「じゃあさっきのはネコ化した45に欲情したってわけね」

「ちがつ……!あれは日頃の仕返しに……!」

「しきかんつたら〜♪ケダモノ〜」

「実際に獣化してるのはお前だけだな」

変態を見る眼差しを向けてくるM4と416に、俺は必死の弁解をした。45はとうとうとなぜか機嫌がよくなっている。耳がすごいパタパタなってる。

「……あの、そこにいるのは私たちが知っているUMP45なんですか？」

「性格どころか人格まで変わってるわね……」

「メンタルも一部ケモノ化するらしくてな、こいつの場合は人懐っこい仔猫になったわけだ」

「ふーん……」

興味なさげに気取っている416だが、その目はカプセルに釘付けになっている。M4はネコ耳が生えた45をジッと見つめていた。そんな彼女たちを見かねた45が、薬が入ったケースを2人へ近づける。

「416も飲んでみれば?」

「…遠慮するわ、こんな怪しい薬…」

「そう?じゃあM4は?」

「えっ、わ…私?私は…えっ…」

キツパリ否定する416と違い、どっちつかずの態度を取るM4。そんな2人を見て後者はあと少しでオトせると踏んだのか、M4の耳元で45がつぶやいた。

「(この力は強力よ、謎の勢いで指揮官に甘え放題にやんだから。いつもはできにやい、あんにやことやこんにやことだつて…)」

「(あんなこと…こんなこと…)」

「…うーん…」

めちやめちや悩んでいらつしやる…。そこまで無理して決断するほどのものでもないと思うんだが…。

「なあM4、そんなに悩むなら飲まない方が…」

「…飲みます。指揮官、私にも一つよろしいでしょうか」

「え」

普段の自信なさげなM4はどこへやら、こんな英断を下すなんて珍しい。とはいえ俺としては正直これ以上の面倒ごとを増やすのは避けたいのだが…。

「ほら指揮官♪M4が自分の意志を示すにやんて滅多ににやいわよ?」

45の言うとおり、M4は戦術人形という立場を弁えているのか元々遠慮がちで真面目な性格なのか、なにかを求めることはほぼ皆無である。以前、日頃の感謝を込めてなにか労わせてほしいと何度か言ったが、『お気持ちだけで十分です。』と、すべて断られている。あまりによそよそしいので嫌われているのかと思っただくらいだ。

「…そうだな…。M4が望むなら…」

M4本人の意思とはいえ大義名分を振りかざす45に反論できず、M4がカプセルを飲むことを渋々許可することにした。1人も2人も一緒だしな。

「で、416は本当にいいの?」

「しつこいわね、飲まないわよ」

「ふーん？M4は飲むのに？」

「……」

明らかな敵意を剥き出しにする416。無理もないといえそうですが、彼女がほぼ一方的に嫌っているM4と比較されたうえ、遠回しではあるが『M4の方が優秀』というニュアンスだけでも、完璧主義者の416が激昂するには十分すぎる理由である。

「おい……45……」

殺伐とした空気に居た堪れなくなり、下手に416を刺激しないよう45を止める。頼むからこれ以上面倒なことを増やすのはやめてくれ（懇願）

「…あなたの安い挑発に乗るのはかなり不本意だけど……」

「いいわ、やってやろうじゃない…!!」

「ふふっ♪そうこにやいと♪」

自称・完璧な女、まさかの承諾。いやチヨロすぎるだろ……。

「うるさいわよ指揮官、いいから早くカプセルを超越しなさい！」

「し…指揮官！私にもお願いしますっ！」

「あー……」

1人も2人も一緒なら、2人も3人も同じか…。

—  
—  
—

「いくわよ……」

「「せーのっ……」」

「……」

「……」

「……やっぱり不気味だな……」

「仕方にやいわよ、戦術人形だもん」

同時にカプセルを飲み込んで機能停止状態となった416とM4。

この状態を見るのは2回目とはいえ、やはり人間と変わらぬ容姿で動きが完全に止まっている違和感は拭えない。

「…指揮官はさ……」

「ん？」

「私たちのこと、どう思ってる？」

「なんだ急に…。Vectorに影響されたか？」

「いいから」

いつも軽口を叩いたりからかっている彼女ではなく、心の底からの疑問を呈した45。冗談を言って軽く流そうと考えていたがどうやら通用しなさそうだ。

「どうって言われてもなあ…」

「大事にや家族とか大切にや仲間にやんて無難すぎる答えはダメだからね」

「おいおい…」

分からない。

先日、激昂したVectorが望んでいたのは戦術人形であることを肯定する意見だった。今の彼女はそんな考えは捨てて自分に正直に過ごしているが、45は元からそういう思想を持っているわけではない。故になにを肯定してなにを否定してほしいのか、なにを求めているのかが分からないのだ。

無論、彼女らの一部が俺に好意を寄せていることはさすがの俺でも気づいてはいる。それが親愛か、友愛か、恋愛なのかはさておき、好かれていることに違いはない。俺も彼女たちのことを愛している。

だからこそ。だからこそ俺は戦術人形と一線を越えた関係を持つ気はないのだ。詳細を述べるのはまたの機会にするが、俺のこの意思は彼女たち全員に告げている。

「……」

「ねえ…」

「…前にも言っただろう、俺は……。……!」

「…うつ…しきかあん……」

な……!あの45が泣いている…!?

まさかこれもカプセルの影響なのか。情緒が不安定になる副作用とかそういうやつだろうか。

「よ…45！悪かった！俺が悪かったから!!」

「あら、仔猫を傷つけるなんて酷いことをするのね。指揮官」

背後から聞こえたのは胸に突き刺さるような416の冷たい声。停止状態から目覚めたのだろう。声がする方へ振り向けば、カプセルの影響でネコ化した416が尻尾をパタパタと動かし、イラついた態度で俺を睨んでいた。

416の姿を猫で現すとするなら黒猫だろう。クールな彼女らしいといえれば彼女らしいといえる。でも黒猫って威嚇する時の目が怖いんだよな…。今まさにその状況である。

「誤解だ！泣かしたのは俺じゃない！」

「さつき『俺が悪かった』って言ってたじゃない。まさかとりあえず謝ればいいとも思っているの?」

「うっ…」

「こわい…。なんかいつにも増して圧力がすごい…。」

「まあ…。童t…指揮官にオンナの扱い方を求めても仕方ないわよね」

「ちよつと?わざとらしく言い間違えるのやめて?」

「あら、完璧な私が言い間違えるはずがないじゃない。ところでお腹空いたでしょう?チェリーパイならあるけど食べる?」

「優しさに見せかけた精神攻撃やめろ」

「ほら45、いつまでも泣かないの。指揮官<sup>チェリー</sup>パイ食べる?」

「指揮官と書いてチェリーと読むってやかましいわ」

「416う…ひつく…ありがとう…」

「口を開けなさい。はい、あーん」

「ん…おいひい…!」

優しい顔で45の頭を撫でる416。45が仔猫ならさしずめ416は母猫だろう。すつきり泣き止んで幸せそうにパイを食べる45を見て一安心する。

と、ここでもう1人の彼女を思い出す。

「…あれ。そういえばM4は……？」  
「え？」

416と周りを見渡すがどこにもいない。机の下やベッドルームなど、部屋中を探し回ってもM4の姿はない。となると考えられるのは……。

「まさか外に……」

「指揮官！入口のドアが開いてる……！」

「……嘘だろ……」

最悪の事態だ。基地内での混乱を避けるため、薬を飲んだ45を部屋に隔離していた。同様に416とM4にも外出は控えるようにさせるはずだったのだが、そういえば2人にはまだ言っていなかったのだ。

「まずいぞ……。ネコ耳が生えたM4が基地をうろついて混乱を巻き起こせば、ヘリアンさんに怒られる……！」

「指輪の時もこっぴどく叱られていたわね……」

「よし、俺はM4を探してくる。416は45と部屋にいろ。絶対に外に出るなよ」

「分かってるわよ、さっさと見つけてきなさい。あいつのAIがどう変化したか知らないけど、1人にしておくのは危険すぎるわ」

「しきかーん、いつてらっしやーい♪」

(なんか妻と娘みたいだな)

「クソっ……どこにいった……!?!」

基地内を走り回ってM4を探すが、どこにもその姿は見当たらない。立地が最前線というのもあってうちの基地は比較的大規模なので、1人で見つけだすのはかなり難しい状況である。下手に情報を漏らせられないので誰かに手伝ってもらおうわけにはいかない。唯一事

情を把握している416と45は部屋にいるから頼れないし……。

頭をフル回転させてM4がいそうな場所を割り出す。が、Vectorと映画を見に行った時もそうだったけど、あいつらの好みとかなにも知らないんだよな……。なんだ詰みか。

「これキリがねえな……。ん？」

足を止めて訪れたのは救護室。迷い込んできた野良犬や野良猫を保護し、ペットとして宿舎で飼育しているのだが、ここならケモノ化したM4が迷い込んだりしてそうだ。いやどういう理論だよ（困惑）

ガチャツ

「M4ー、いるかー？」

「あああつ!!可愛い!!ホントもふもふ最高く？」↑猫じやらしを手に猫と遊んでいるWA2000

「↑固まる指揮官

「はあく……。あんたはいいわよね、指揮官に甘えられるし頭を撫でてもらえるんだから。……。私だって……指揮官に触ってh……」

「あつ……」

「……」

「……な……なにも見てないし聞いてないから……」

「ーっ?!!?!!」

「指揮官のバカあつ!はやく出ていって!!」

「ちよっ……痛い!ネコカン投げるなっ!!」

「うるさいうるさいっ!さつき見たことは全部忘れなさいよ!!」

バタンツ!

……わーちゃんもあんな顔するんだな……。初めて見た……。うん、いいモノを見た。

「いや違う違う……M4を探さないと……」

どこいったんだほんと。他の職員や人形達が騒いでいる様子はなから多分誰にも知れ渡ってはいないっばいが時間の問題だろう。

なんか面倒ごとを増やさないようにしているつもりがどんどん増えてる気が……。

#10  
いつも、彼は彼女たちに振り回される

番外編　ともあれ、人形と結婚するのはどこかおかしい

数ヶ月ほど前のこと……

「大変参考になりました。メンバーの選定が完了次第折り返しご連絡します、ペルシカさん」

「いいよー。麻薬組織が相手の作戦に参加するなんて、指揮官も大変だねえ」

「はは…、仕事なんで……」

我々民間軍事会社グリフィンが戦う相手は鉄血……だけではなく、地元管轄の法執行機関から犯罪組織の検挙を委託されることもある。もちろん非正規な依頼ではあるのだが、戦術人形を一般人に紛れ込ませて潜入捜査をしたり、高い戦闘能力を活かしてテロ組織の制圧に派遣されることが多い。

「でも鉄血の殲滅だけでひと苦労なのに、犯罪組織の取り締まりまでさせられるのはブラックすぎない？この会社」

「まあ…仕事なんで……」

ペルシカさんと話していたのは、近々行われる麻薬カルテルへの強制捜査の件。うちの支部からは4名の戦術人形が参加することになったのだが、いかんせんカルテルの装備が尋常ではなく、質も数も多いことが問題となっていた。

上層部もそのことを懸念しており、16Labの首席研究員ことペルシカさんにこの問題を打破する新装備を開発するよう指示していた。

「ふーん…仕事……」

「…指揮官はつまらないね」

「え……」

心做しかペルシカさんの目が笑ってないように見える。研究熱心な日々から生まれた目の隈のせいではなさそうだ。

「指揮官はさ、人形たちのこと…好き？」

「急になんですか……」

先ほどの冷たい視線から打って変わり、いつもの気だるげな彼女から投げかけられたひとつの問い。

「そりゃあもちろん好きです。彼女たちが僕をどう思っているかは知りませんけどね」

「ひねくれてるなあ、本当はあの子たちの気持ちがあんたに分かってるくせに」

「僕は彼女達の上司ですよ？変なことをしようものならセクハラ行為としてクビになります」

「知ってる？合意ならセクハラにはならないんだよ」

「…あなたって人は……」

まったく…この人の相手をするのは疲れる。だいたい俺が隷下の人形たちに真剣に恋をしていたところでなんだったって話だ。

「バカなこと言ってる暇があるなら、カルテルとの戦力差を解決する装備を考えてください」

「ひどいなあ、ちゃんと考えてるよ。ていうか、もうできてる」

「……は？」

「ふふつ、首席研究員をなめてもらっちゃあ困るなあ？」

「……さて指揮官くん、もう一度質問です」

「君は人形たちは好き？」

---

「これが人形の能力を上げる装備……」

「そ。とてもそんなものにはみえないでしょ」

机に置かれたのはひとつの指輪。とくに希少な宝石があしらわれているわけではなく、なんの変哲もないただのリングだった。

「……ついに変な宗教に手を出したんですか……？」

「違うわよ、そんな目で見ないで」

とはいえ指輪を嵌めただけで能力が上がるなんてどういいう原理なのかさっぱり分からない。もつとこう……中身を変えなきゃスペックなんて上がらないんじゃないのか……？

「まーその辺の説明をしたって指揮官には分からないだろうから省くよ」

「はあ……。で、どれくらい強くなるんですか？」

「まだ試作品だからね、明確な効果は未知数だけど理論上は1割増つてどこかな」

「……なんかシヨボいですね……」

「ちよつと、人が一生懸命作ったものにケチつけないでよ。いらなら別にいいたよ？」

思わず口が滑って本音を漏らしてしまった。作戦遂行のためにも、ペルシカさんの機嫌を損ねるのは賢明ではないのでとりあえず謝っておく。

「第二世代の戦術人形だし、やろうと思えば能力を5割ほど引き上げることはできるんだけどね。ただ、あくまでもここのは民間向けの戦術人形だから……」

「ああ……そういう……」

グリフィンが運用しているのは第二世代戦術人形。規格は正規軍所有のT-Dollと同じではあるものの、いちPMCが正規軍以上の戦力を保持することは許されない。武装レベルや保有できる人形の数量制限など、越えてはならない規制の壁があるのだ。

だがここでひとつの疑問が生まれる。

「でもこれ指輪にする必要ありました？」

「そこ。そこだよ指揮官くん」

「この指輪は通称『誓約の証』」

「誓約？」

「ようするに結婚みたいなもんだね」

「……ええ……」

結婚って……。戦術人形と結ばれるってことか……？女子と手を繋いだことすらない俺が……。

「簡単に説明すると、人形の性能と権限を部分解除するのがこの指輪。本来ならグリフィン所有の人形を指揮官個人のものにできるわけ」

「そんなことができるんですか……」

「っていつても火器管制コアを抜いたらI・O・Pに返却しなきゃいけないことになり変わらないけどね」

「まあでも人形とそういう関係になるなんて、このご時世珍しい話でもないでしょ」

荒廃し人口が減りつつあるこの世界では、まともに人間同士で交際する方が珍しい。その辺の人間よりも自律人形の方が見た目もいいし、人間に対して好意的という点が大きい。

聞くところによると、なかには部下の戦術人形を毎晩とつかえひつかえ抱いている指揮官もいるらしい。セクサロイドかなにかと勘違いしてないか……。

「そのせいでヘリアンさんみたいな人があふれかえってるんですけどね……」

「この子に聞いたけど、あなたは人形たちとそういう関係にはなっていないらしいわね。珍しい」

「あくまで上司と部下ですからね、彼女たちの信頼を失いたくないし」

「……本音は？」

「これが本音です。第一、俺よりもいい男なんてここの職員に腐るほどいますから」

「ひねくれてるねえ。確かに他の支部と比べるとここの雰囲気はかなりいいと思うよ」

「……この指輪…使わないとダメですか？」

「その判断は指揮官に任せるよ。作戦成功の可能性を少しでも上げたのなら使うに越したことはないけど」

「ちなみに誓約したら後戻りはできないからね、誓約する人形は慎重

に選びなさいよ？」

「……」

作戦成功率を上げるため、藁にもすがる思いではあるものの、どうにもメリットとデメリットが割に合わない。部下の人形と一線越えた関係になるとというのがネックだ。

「心配しなくてもこの子たちなら快く受け入れてくれるよ。みんな指揮官のことが好きだし」

「そういう問題では……」

「…考え方が特殊な指揮官くんには扱いづらいかもね」

「でも大丈夫、私にいい考えがあるわ」

「？」

「はーい、これでみんな集まったかな？」

「ねえM4、なんでペルシカは私たちを集めたの？」

「さあ…？私もなにも知らされてないから……」

「寝てたのに呼び出さないでよお…416……」

「あなたまた模擬作戦中にだらけてたのね…！真面目にやりなさい！」

場所は変わって4階の第3会議室。100人ほど入り込めるこの部屋に、ペルシカの一声で集まったのは俺の隷下にある戦術人形たち。ざっと数えて40余名ほどだ。まあそんなことはさておき、まずは416を落ち着かせよう。

しかしペルシカさんは話を始めず、未だに私語をして騒いでる人形たちを見つめるばかり。やがて彼女の雰囲気を感じた人形が一人、また一人と口を閉ざしていく。

「はい、皆さんが静かになるまで7分もかかりました」

学校の先生かよ。

「コホン、えー皆に集まってもらったのはとある新装備の説明をするためよ」

「……!?まさか…!!」

この人…人形たち全員に俺と誓約できる指輪の話をする気だ!!ま  
ずい…そんな話をされたら混乱どころの騒ぎじゃない!

「ペルシカさんちよつと…:…んぐつ!」

「まあまあしきかん♪とりあえず話を聞こうよ♪」

「くつ…45…:…」

まったくこいつは…面倒ごとを察知するのが早すぎる…。しかも  
45は火に油を注ぐだけ注いで消火活動をしない奴だからな。余計  
にタチが悪い。

「ここに出したるは誓約の指輪!説明すると…:…」

「け…結婚!」

「指揮官と…!?!」

「これで家族が増えるよ!やったね指揮官!!」

「おいばかやめろ」

「へえ…けつこう面白そうじゃない、しきかん?」

「……」

ああ…面倒なことになった…。人形たち全員から不気味な視線  
を感じ取った俺はとりあえず会議室を出て自室に戻る…:…つもり  
だったのだが、ここでペルシカさんが追加の油をまき散らす。

「あ、この指輪は全部で4つしかないからね。早い者勝ちだよ」

「[「G:」]」

「あー…」

なぜここで闘争心を煽るんだ…。アーマー○・コアの新作が出るの  
か?

身体が闘争を求めた結果、より騒がしくなってしまった第3会議  
室。やがてここで1人の人形が動き出した。

「指揮官!指揮官は私のこと好き?」

「ぐつ…Five—seven…:…」

「指揮官の好きにしているのよ?だから…ね?」

「ちよつ…近い近い!」

その姿を見た他の人形たちも我先にと俺に抱きついてきた。

「指揮官…その…また一緒に映画観に行かない？」

「Vector…お前まで……」

「指揮官わたしも!!」

「指揮官さま〜♪」

「うっ…お前らちよつと離れろ…!!」

「…なんか新手の宗教みたいね……」

少し距離を置いて引き気味につぶやいたのはわーちゃんことWA 2000。傍から見たらそう見えるのも無理はない。

「わーちゃん助けて……」

「ふ…ふん! あんたなんか知らないわよ! 他の子たちに言い寄られて鼻の下を伸ばすなんて…この変態!!」

「ええ……」

「あらあら。指揮官にそんなことを言っただメですよ、わーちゃん」  
「スプリングフィールド……」

「指揮官、よかつたらご一緒にマフィンでも食べませんか? わーちゃんもどうですか?」

「ふえっ?! わたし…私は…指揮官がどうしてもっていうなら仕方ないわね。付き合っただけあげる!」

「ちよつと? 勝手に話を進めないで?」

駄目だこいつら…早くなんとかしないと……。

どいつもこいつも食事に誘ったり直接言い寄ってきたりと冷静じゃない…なぜそこまでして……。

「お前ら騒がしいぞ! なんの騒ぎだ!」

「…へリアンさん」

「む、指揮官。なぜ人形たちに抱きつかれて……業務中に不純異性交遊とはいいい度胸じゃないか……」

「ち…違うんです! これは……!」

助け舟を求めようと近くの人形たちを見るもみんな目を逸らしやがる。この裏切りもんがあああつ!!

仕方ないので捨てられた仔犬のような目でペルシカさんを見つめる。「うわあ…」と若干引いているがこの際気にしない。

「はあ…あのねヘリアン、実は……」

その後、ペルシカさんによる事情説明のおかげで特に罰を受けることもなく、ひとまず今日のところは解散するよう告げられた我が部隊。ゾロゾロと退出する人形たちを尻目に、ヘリアンさんが俺に話しかける。

「指揮官は次の会議までに作戦に参加する人形4体、そしてその指輪を使うかどうかを決めるように」

「はあ…。ヘリアンさんはどう思われます？この指輪」

「私は上級代行官だ。直接人形を指揮する立場ではない」

「よって、この件に関しては指揮官の好きにしてい。常識の範囲内でな」

「……おかしいと思いませんか？指揮官と人形が愛し合うだなんて…」

人形たちの退出が完了し、ヘリアンさんと二人きりとなった第3会議室で俺は思いの丈を述べる。

「…続けたまえ」

「僕も人形は好きですし、差別をしたりしません。しかし、指揮官という立場や人間に忠実であることを利用して逸脱した行為をするのは容認できません」

ここはハーレムもののラノベの世界じゃない。俺はE. L. I. D. や鉄血を殲滅し、殺された家族のために戦術指揮官になったんだ。恋愛ごっこをしにきたんじゃない。

これ以上、俺のような人を増やさないためにも……。  
「我々はPMCです。上司と部下、指揮官と兵士の立場を一貫するべきです」

「たしかに、権限を利用して部下の人形にそういう扱いをする指揮官はいる。それに関しては上も対策を考えているところだ」

当然だ。一般人と民間の自律人形による恋愛は知ったこっちゃな

いが、少なくとも戦場に生きる俺達は考えを改めるべきだ。

「……つまり、貴官は戦術人形が人を愛するのはおかしい。そう言いたいんだな？」

「なにもそういうわけでは……」

「同じだよ」

「……！」

「人が人形を愛するだけでなく、人形が人を愛することだってあるんだよ」

「まあ……そういうこともあるでしょうけど……」

「私も人形を差別したりしない。こんな世の中じゃなければ戦術人形だろうが自由に生きてほしいとは思っている。貴官はどう思う？」

「……同意見です」

「なら……、戦い以外の生き方を見出してもよかろう。貴官が言っていたそうじゃないか。『それが戦術人形のなり損ないではない』と」

「その戦い以外の生き方が、誰かを好きになり愛し合う……というだけの話だ」

「……とはいえ僕は人間です。仮に人形と愛し合ったとして、人形を取り残して死んでいくのは避けられません」

「そんな辛い思いをさせるくらいなら……」

「どうせ傷つくくらいなら、いつそ誰とも関わらない方がいい……と。相変わらずの捻くれ者だな……貴官は……」

ヘリアンさんは微笑みながら俺の頭をポンと撫でた。

「傷つくことを恐れていたなら、人間関係なんてものは築けない。誰も愛せないし、誰からも愛されないんだよ」

「貴官は優しい。だからこそ、もっと報われるべきだ」

「……」

「お説教は終わりだ。作戦の件、任せただ」

「そう告げたヘリアンさんは部屋を出て、会議室に残ったのは俺だけとなった。」

「……」

『傷つくことを恐れていたなら、人間関係なんてものは築けない。誰も

愛せないし、誰からも愛されたいんだよ』

先ほどの彼女の言葉が重くのしかかる。

「…はあ…」

「これ…どうするかなあ……」

先ほどの騒がしさが嘘のように静まり返った会議室。空調設備の音を除けば、室内はしばらくの間静寂を貫いていた。

番外編　ともあれ、人形と結婚するのはどこかおかしい

## 番外編 それぞれの思いが錯綜するなか

【戦術人形と愛し合った指揮官は不慮の事故に遭い、愛する人形を置き去りにしてこの世を去った。】

【戦術人形にプロポーズをした指揮官は、その後人間の女性と結婚し、家庭を持って退職した。】

【数々の戦術人形をはべらかして肉体関係を持った指揮官は、夜の寝室にて背後から謎の負傷で死亡した。】

どれもすべて実話だ。その指揮官たちと関わったことは数える程しかないが、戦術人形と一線を越えた結果がこれである。

この話の共通点はただひとつ。最終的に傷ついているのが指揮官ではなく、戦術人形ということだ。これが俺が恐れている最大の理由、家族同然の人形を裏切る行為だ。

だがヘリアンさんの言うように、彼女たちの新しい生き方として誰かを愛することを肯定するべきだと言うのならば……。たとえ最終的に彼女たちが傷つこうと“今”を楽しく生きるのが正解なのだろうか。

俺には分からない、だからこそ…。

俺は彼女らの“指揮官”をやる。

《ノーマッドよりHQへ、ランディングゾーン LZに到着。プレッジ0―1と0―2の降下を確認》

「了解だノーマッド、LZから南へ1キロ先の商業ビル屋上でフェンサーチームが待機中だ。回収を頼む」

「予定通りプレッジ0―1と0―2が作戦エリアへ進行中。2名のバイタル、メンタルともに正常です」

時刻はPM 23:00

麻薬カルテルと過ごすパーティの幕開けだ。

場所は司令室。ここでは作戦地域に展開している全部隊の映像がモニターに映し出され、リアルタイムに指示を出すことが可能だ。的確な指揮を執るため、司令室内には後方幕僚のカリーナをはじめ、3名のオペレーターがサポートについている。

今回の作戦に参加しているのは法執行機関直属の特殊部隊15名、グリフィンからは3つの支部から戦術人形が4体ずつ。計27名の隊員が参加している。

「指揮官、プレッジ0―1と回線を繋げます。3、2、1……」

《オーバーロード、こちらプレッジ―01。目標のホテルを確認したわ。ここからは徒歩で向かうわよ》

あえて説明するとこの司令部自体が『HQ』、俺のコードネームが『オーバーロード』だ。本作戦においてグリフィン側の全面的な指揮権を託されたのだが、なぜ上はひよつこの俺を選んだのか理解に苦しむ。別の支部のベテラン指揮官の方が適任だろうに……

「了解だ。フェンサーチームの報告では複数のターゲットが会合場所のホテルへ向かっている。今夜取引が行われるのは確かなようだ」

《りようかい♪バックアップは任せたらね、しきかくん？》

「……作戦中だ。コールサインを使い」

《はいはい。もう、こういう時だけ真面目なんだから……》

「こういう時だからこそだ……頼んだぞ。オーバーロード、アウト」

プレッジ0―1と通信を終え、隊員達のライブ映像を映し出すモニターへ視線を向ける。おい、カメラに向かって手を振るんじゃない。

ちゃんと真面目にしなさい。

「相変わらず彼女たちに好かれていますねー、指揮官は」

「好かれてるんじゃないかっていいおもちゃにされてるんだよ…。特に45からはな」

「…思えばあなたが仲良くしているのは人形くらいでは…」

グサツ

「たしかに指揮官が会話しているのはペルシカさんやカリーナくらいな気が…」

グサグサツ

ふっ…言ってくれるじゃないか…。よかろう、俺がなぜぼっちなのかを教えてやろう！

仕事柄、俺は人形と関わることが多い。だからまあ人間よりも人形の方が仲が良いのは当然であり、必然であり、逃れられぬカルマなのである。したがってこれは俺の対人コミュニケーション能力が低いというわけではなく、指揮官ならば誰しもがなりえ「はいはい指揮官さま、その辺にして作戦が始まりますわよ！」

「な…なんだよ…」

「指揮官さまは指揮官になる前から元々その性格です！仕事は関係ありません！」

パンパンと手を叩くカリーナになにも言い返せず、俺は不貞腐れながらコーヒを一気に飲み干した。淡い苦味とカフェインが頭を嫌でも仕事モードに切り替えてくれる。

「……苦い…」

「……ふっふっふ」

「なにニヤけてるのよ、気持ち悪い」

つい最近まで第三次世界大戦が行われていたとは思えないほど賑わっている繁華街。今なお鉄血人形の脅威があるとはいえ、ここまでの復旧ぶりをみると人類はひとまず安寧を取り戻したといえるだろ

う。

その人混みに紛れ込む2体の戦術人形。

「…なんでもないわ、それより情報は？」

1体は思わず緩んでしまった顔を引き締め、もう1体はやや呆れ気味に得た情報を伝える。

「地元警察によってホテルに繋がるすべての道路の封鎖が完了。あとはグリフィンの狙撃チームが配置に着くのを待つだけよ」

大通りから離れ、狭い路地で作戦の打ち合わせをしているのは“プレッジ001 UMP45”と“プレッジ002 HK416”の2体。本作戦に参加するグリフィンの部隊でも、特に優秀なプレッジチームのメンバーである。

「了解、麻薬取締局DEAの部隊と合流するわよ」

「特殊部隊ってなにが特殊なのかしら…。大丈夫なの？」

「腐っているのは地元警察だけよ。人間だけの部隊とはいえかなり優秀なんだから。同じ人間だけの犯罪組織の相手くらいなんともないわ」

現状、犯罪組織が戦術人形を使うことはできない。人形のAIは法を犯すことができないようプログラムされているからだ。自律人形のAIプログラムを変更できるのはその人形のメーカーのみ、例えば戦術人形ならI.O.P社のみである。

つまり、犯罪組織とは違い警察には「戦術人形」という強力なアドバンテージがあるのだ。

「……そうじゃないわ」

「私が心配しているのは、人間だけの特殊部隊が信頼できるか」よ”  
” どれだけ人間と瓜二つの姿であろうと、戦術人形はあくまで”道具”である。人間の盾や囷になることはもちろん、最悪見捨てられたり放棄されることが普通だ。いくらでも替えがきくからである。

HK416は、自分たちが麻薬取締局DEAに捨て駒扱いされるのではないか危惧しているのだ。もちろん、自らが戦術人形であることを自覚しているし、それが宿命であることも分かっている。

だが自分が変わってしまった。1人の人間に出会ったことによつて、生きることには希望を見出し、死ぬことを恐れるようになった。

「そうね…もし私たちがDEA直属の人形なら、そんな扱いをされると思うわ」

「でも…」

UMP45は語りかける。

「でも、私たちには“私たちの指揮官”がいる。そうでしょ?」

そうだ。私たちには正しく導いてくれる指揮官がいる。

死ぬことを恐れるのが戦術人形のなり損ないではないと、それでもお前は完璧だといってくれた人が。

「ふふっ…そうね、私としたことがらしくなかったわ」

「なにニヤけてるのよ、気持ち悪い」

「……ちっ」

《HQよりプレッジ0-2へ、スカウトからの報告によると取引は17階のパーティー会場で行われている。すでに複数の武装した見張りや警備を確認》

「敵の数は?」

《正確な数は不明。今スカウトが敵の配置を割り出しているところだ。情報が入り次第知らせる》

「了解。0-2アウト…」

《オーバーロードの声を聞かなくていいのか? (笑)》

「…余計なお世話よ、私は完璧なもの」

《ははっ!さすがだな!この作戦が終わったら皆で一杯どうだ?》

「そうね…オーバーロードも参加するなら考えるわ」

HK416とオペレーターとの通信にUMP45が割って入る。

「その声はグリーンチね?416に酒を飲ませちゃ駄目って知ってるでしょ?…ろくなことにならないわ」

「え?どういうことよ?」

《あー…そうだったな…。忘れてた》

「ちよっと!なんで私は飲んだら駄目なのよ!?!」

「ほら、行くわよ。DEAが待ってるわ」

「皆さん落ち着いて！警官の指示に従ってすみやかに避難してください！」

ホテルの正面入口ではすでにD E Aと地元警察が展開しており、スタッフや一般客の避難誘導をしていた。もちろん麻薬カルテルたちに気づかれることなく。

そこへU M P 4 5とH K 4 1 6が合流。作戦では地上と屋上からの挟み撃ちを仕掛ける流れになっており、U M P 4 5達は入口を確保して1階から取引現場まで向かう。

戦術人形はプレートキャリアやヘルメットなど、戦闘に必要な装備は身につけていない。銃を除けば可憐な服装をしている2体の少女に、D E A隊員たちの視線はくぎ付けだ。

「お前たちがプレッジチームだな？たしかU M P 4 5と：H K 4 1 6だったか」

「よろしくね、D E Aの隊長さん♪」

「……軍が使ってる戦術人形と全然違うな……、本当に戦えるのか？」

D E A隊員が何気なく発した言葉。彼にそのつもりはなくとも、挑発として受け取ったH K 4 1 6が口を開く。

「これでも私達はP M Cの戦術人形よ、たとえばあなた達5人がかりでも私には勝てないわ」

ギラギラとした眼差しでD E A隊員を睨みつけた。ほんの数秒間、場の空気が固まる。

「すまないな、こいつも悪気があって言ったわけじゃないんだ。許してくれ」

最初に口を開いたのはD E Aの部隊長。どうやら彼は人形を差別するような人間ではなさそうだ。すかさずU M P 4 5がフォローに入る。これから行動を共にするチーム間でトラブルを起こすのは避けるべきだろう。

「ごちらこそ、彼女は完璧主義でプライドが高いの、ごめんなさい」

すると、1人の警官が駆け寄り、一般人の避難誘導が完了したことを知らせた。

「では最後の確認だ、まずは北側と南側の二手に分かれて行動する」  
「エレベーターで移動するのは14階まで。その後はエレベーターを  
停止させ、目標の17階までは徒歩で移動する」

《こちらスカウト、敵の配置をすべて把握。情報は端末に送るわ》  
「了解だ、感謝する」

「……多いわね」

17階を中心に上下2階ずつ、15階〜19階に武装した敵がい  
る。カルテルはこの階をすべて貸し切っているらしく、幸いなことに  
一般人が巻き込まれる心配はない。

《こちらアーチャー<sup>狙撃チーム</sup>、配置に着いたわ。いつでも支援可能よ》

グリフィンの狙撃チームによる準備完了の知らせ。作戦開始の合  
図である。

「H Q、こちらプレッジ0-2。これよりホテル内部への侵入を開始  
するわ」

《了解だ、君たちの侵入と同時にプレッジ0-3と0-4を屋上より  
侵入させる。以降の通信はオーバーロードの回線を使用するように》

「了解、0-2アウト」

「……あいつらもこの作戦に参加するなんて…ほんと気に入らないわ  
…」

同時刻、ホテル付近の上空にて

「了解しました、こちらでも行動を開始します」

ヘリの機内で同じく作戦開始の時を待っていた2体の人形。垂れ  
下がったロープを掴み、颯爽とラペリングしていく。

《グラニットよりH Qへ、プレッジ0-3と0-4の降下を確認。ス  
カウトチームの回収に向かう》

「プレッジチーム、こっちだ」

先行して屋上で待機していたのはDEAの隊員たち。カルテルの  
死体が横たわっていることから、屋上にいた見張りたちはすでに無力

化したようだ。

「M4A1です。よろしくお願ひします」  
プレッジ0ー3

「ARー15よ、よろしく」  
プレッジ0ー4

「ああ、よろしくな。すで見張りは始末したが、他のカルテルが巡回している可能性もある。アーチャーたちの支援を受けられない死角では注意しろ」

「この階段を降りたら二手に分かれる。M4A1は南側の班と、ARー15は俺たち北側の班と一緒に行動する。オフエンス重視で行くぞ」

「了解。オーバーロード、指揮は頼んだわよ」

《任せろ。DEAも含めて必ず全員生きて帰らせるさ》

「ふふつ、頼もしいわね…」

ARー15は微笑むと、ネックレスとして首に吊り下げた指輪を握りしめた。

プレッジ誓約のメンバー4人に渡された、星の光に煌めく誓約の指輪を――

## 番外編 戦いがここまで長引くとは誰も思わない

人の気配が消え閑散と化したフロア。明かりが灯っているものの日頃の賑やかな面影はない。

パシユツ！ パシユツ！

無骨な廊下に鈸響する裁きの銃声。

「Clear、そのまま前進維持」

「室内から複数名の声を確認」

法の制裁を与える執行者たちの足音。

「HK416、カバーを。制圧するぞ」

「Copy」

麻薬取締局

DEA×グリフィンによる麻薬密売組織摘発の合同作戦。数人の歩哨を処理し、一同は取引が行われているパーティ会場へ向かった。

やがて絢爛な客室から下衆な笑い声が聞こえてくる。会話の詳しい内容を聞き取ることはできないが、どうも物騒な話をしているようだ。

すかさずHK416は無駄のない動きで配置につき、マガジン内の弾数を確認する。突入の準備が整ったことをDEA隊員にアイコンタクトで伝えると、隊員はM84特殊閃光手榴弾スタンングレネードを室内へ投げ入れた。

「!?なんだ……!」

キイイイイインツ……!

楽しげに談笑していたさなか、突然強烈な光と音に包まれる3人の男たち。同時にHK416はドアを蹴破って部屋に突入し、男たちが銃で武装していることを瞬時に確認。奴らが狼狽えながら銃を向けるよりも速く、彼女と同じ名の“HK416”が一糸乱れぬ精確な狙いでカルテルの頭を撃ち抜いた。

「……All clear」

「…見事だな、さすがは戦術人形だ」

「当然よ。私たちが普段相手にしている鉄血と比べればなんともないわ」

これくらい朝飯前だと澄ました態度をとるHK416。しかし表情には表していないものの、こう見えて実は内心喜んでいた。優れた戦闘能力であるにもかかわらず、AR小隊の陰に隠れがちで正当な評価を受けることは多くないからである。

とはいえ今の支部に配属されてからはそんな待遇も改善され、以前のような劣等感やコンプレックスを抱くことはなくなった。職場の人間関係がガラリと変わったことが大きい。一番の理由はいつも彼女を見てくれている指揮官の存在である。

「416、少しは素直になつたら？」

HK416と違い軽い口調で話すUMP45。DEA隊員達とは冗談を言い合うなど、どうやら仲良くやっているようだ。はじめは可憐なルックスから戦闘能力を疑っていた隊員たちだったが、遺憾なく発揮される2人の戦いっぷりに舌を巻いている。

「素直じゃないのはどちらかしら？猫を被って人間に媚を売ってるあんたよりかはマシよ」

強化外骨格のような偽善の仮面を被った奴に言われたくない、と言いつつ。しかし案の定UMP45は『なんの事だかさっぱり♪』といった反応を示しながらDEA隊員たちと雑談をしている。

「はあ…、まったく……」

これ以上こいつの相手をして無駄だと考えたHK416。飽きるあまり深いため息をつき、足早に部屋を出ようとする。

すると部屋の入口で警戒していたDEA隊員があることに気づいた。

「…なんの音だ…？」

「音？」

その場にいた全員が口を閉じ、かすかに聞こえる謎の音に耳を澄ます。

ピッ……ピッ……ピッ……

「たしかになにか聞こえるわね」

HK416は聴覚センサーの感度を上げ、謎の音の発生源を探し出す。

ピッ…ピッ…ピッ…

次第に間隔が早まっていく甲高い音。それが窓際の机から聞こえてくることに気づき、恐る恐る身体をかがめて覗き込んだ。

「!?全員部屋から出て!!急いで!!」

「!?」

音の正体を知ったHK416は部屋から退避するよう大声で知らせる。それを聞いた隊員たちは素早く出口へと走り出した。

が、これでは間に合いそうにない。即座に察したHK416は強い口調で急ぎ退避するよう促す。

……しかし…。

「早く出…」

ドオオオオオンツ!!!

「ぐっ…」

「あいつらどうやってあんな装備を…っ!」

《プレッジ0-4!DEA部隊長ならびに0-1達の通信が途絶えた!そちらの状況は!》

「待ち伏せです!こちらの戦力は壊滅!我々は圧倒されつつあります!このエリアはもうダメです!!」

「M4!立てる!?!」

「っ……ええ……。大丈夫……」

「プレッジチーム！こつちだ!!」

……20分前……

屋上から侵攻するM4A1とAR-15たち…  
プレッジ0-3 プレッジ0-4

「地上チームが取引現場の確保に向かう、俺たちはその援護だ」  
「了解」

「まずは目標のフロアの電力設備を制御している制御室の確保だ。地上部隊の突入に合わせてパーティ会場の照明を落とす」

「制御室の場所は？」

「最上階だ。とはいえ一応ホテルの客である奴らがそこを守っているとは考えにくいかな」

カルテルとはいえ、ホテルの設備を占領することはないだろう。だが現実には彼らの想像通りにはいかなかった……。

「Contact、敵が複数」

制御室の入口付近では複数のカルテルが哨戒していた。部隊のいる立地が悪いことも相まつてうかつに手を出すことができない。

「まさかとは思ったが……。数が多いな…俺たちだけでは静かにやり過ぎせそうにない」

「プレッジ0-3よりアーチャーチームへ、制御室前に到着しました」

《了解だ0-3。視界良好、こちらも位置についた》

ホテルから400m離れた南側に佇む廃ビル。

そこではグリフィンの戦術人形による狙撃チームが待機しており、部隊の狙撃支援や敵勢力の監視に当たっていた。

「敵が多すぎて私たちだけでは対処できません。援護を頼めますか？」

《目標を複数確認した。そのまま待て》

《……了解だ、奥の見張りを始末する。私が指示するまで待機しろ》

狙撃チームからの指示に従い、M4たちは物陰に潜む。

ドシユツ!

ドシユツ!!

2発の重く鈍い音が響きわたる。

《見張りの無力化を確認、通路の5人をやれ》

「了解だ、攻撃する」

パンパンツ!パラパララツ!

《Clearだ、進め》

「了解」

無事通路にいた敵を始末し、部隊は制御室へ走る。

すると戦闘で起きた音を不審に思ったのか、奥の部屋から1人の敵が出てきてしまう。その事にいち早く気づいたアーチャーがさすがに部隊に知らせる。

《プレッジチーム、隠れる。接近中の敵を確認した》

「了解です」

ドシユツ!

アーチャーが放った1発の銃弾は見事にカルテルの眉間に命中。最低限の物音で処理したため、他の敵が音に気づいて寄ってくることはないだろう。

《周辺に敵影なし、制御室に突入して制圧しろ》

「各員配置につけ、突入だ」

M4とAR-15がドアの両脇に張り付き、DEAの隊員が突入態勢に入る。各自の準備が整ったことを確認したM4がカウントダウンを開始する。

「3…」

「2………」

「1」

バアアン！

「Go！Go！Go！」

「全員動くな！地面に伏せろ!!」

勢いよく突入する部隊。

だが突入した彼らを待ち受けていたのはライフルやマシンガンなどを装備した大量のカルテル達。無数の銃口を隊員たちに向け、指は引き金にかかっている。

「!？」

瞬間、凄まじい数の銃弾が隊員たちを襲う。

「下がれっ！一旦引くぞ！」

しかし奴らが引き金を引くよりも隊員たちが反応する方が早く、間一髪で射線から逃れることに成功した。

だがカルテルたちはそう簡単に見逃すわけもなく、壁越しに見境のない銃撃を続ける。7・62mmの銃弾は薄い壁をいとも容易く貫き、容赦なく隊員たちに襲い掛かる。

「ぐあっ……！撃たれたっ……」

「ジェフが被弾したぞっ！」

「カバーして！急いでっ！」

撃たれた隊員をカバーするため、M4A1やDEA隊員たちもおなじく壁越しにカルテル達へ向けて発砲する。しかし彼らの小銃とカルテルが持つ軽機関銃では制圧効果に雲泥の差があり、圧倒的な制圧射撃を前に反撃できずにいた。

「くそっ……！」

そして苦戦を強いられた彼らの前に、厄介な相手が立ちはだかる。

「なんだあれは……」

「強化重装甲歩兵……!？」

彼らの前に現れたのは対爆スーツの上からさらに防護アーマーを身につけた兵士。隊員たちの銃撃をもともせず、M249を片手に

ゆっくり近づいてくる。

「ふぎけないで！あんなの正規軍しか持っていないはずよ!!」

ジャガーノートスーツは正規軍が開発中の試作兵器である。現時点ではごく少数の部隊でしか配備されておらず、どう考えても一介の犯罪組織が持てる装備ではない。

「あいつらどうやってあんな装備を……っ!」

思わず愚痴をこぼしてしまうAR―15のもとにオーバーロードから通信が入る。

《プレッジ0―4!DEA部隊長ならびに0―1達の通信が途絶えた!そちらの状況は!》

「待ち伏せです!こちらの戦力は壊滅!我々は圧倒されつつあります!このエリアはもうダメです!!」

AR―15が焦燥感を露わにして無線越しに叫ぶ。このままでは全滅も免れないだろう。

「RPG!!」

DEA隊員の警告を聞いて視線を敵へ向けると、カルテルがRPG―7を担いでこちらを狙っていた。

「ちよつと……室内でそんな物騒なもの使うなんて聞いてないわよ!」

AR―15はすかさずRPGの射手へ狙いを定め、見事頭を吹き飛ばすことに成功する。しかし撃ち抜くのが僅かに遅かったか。射手の指はすでに引き金にかかっており、被弾して倒れる勢いで引き金が引かれロケット弾が射出されてしまった。

ドオオオオオオンツ!!!

発射されたロケット弾はM4やAR―15たちの数メートル近くの壁に命中した。直撃は避けられたものの、凄まじい爆風と衝撃波が彼女たちを襲う。

「ゲホッ……ゲホッ……!」

「M4!立てる!?!」

「っ……ええ……。大丈夫……。けど……今の衝撃で通信エラーが……」

咄嗟の出来事に防御態勢をとることができず、爆発の衝撃をもろに受けてしまう。その影響で頭部のマルチ通信モジュールに一時的なエラーが発生してしまった。

これではHQやオーバードと連絡を取ることができない。幸い戦術人形間の通信で用いるローカル回線は正常に稼働しているため、プレッジチームや現地にいるグリフィンの戦術人形たちと連絡を取り合うことは可能だ。

「ちっ…私の通信モジュールもダメ…。ペルシカに改善してもらわないと…」

「プレッジチーム！こっちだ!!」

辛うじて曲がり角まで退避することに成功し、カルテルたちの射線から外れられた。

だが安心してはいられない。カルテルたちに自分たちの位置がバレた今、奴らに包囲されるのも時間の問題である。最も厄介なのはあのジャガーノート。機動力こそ悪いものの、異常なまでの防御力でこちらの銃撃をまったく受けつけない。

せめてあのバケモノをどうにかできれば反撃の糸口を見出せるかもしれないというのに。

「いったいどうすれば……!」

《こちらアーチャー。プレッジチーム、聞こえるか?》

「!……ええ!聞こえてるわ」

《私が狙撃できる位置までヤツを引き付けてくれ、あのバケモノを撃ち抜いてやる》

「了解…頼んだわよ……!」

仲間からの頼もしい言葉のおかげで少し落ち着きを取り戻し、AR—15は部隊全員にジャガーノートを引き付けて下がるよう伝える。

アーチャーは感覚を研ぎ澄まし、狙いをジャガーノートの頭に定める。

何度か危険な状態に遭ったもののプレッジチームたちはうまく引き付けることに成功。絶好の機会が訪れる。

その瞬間をアーチャーは逃さなかった。

「…私を敵に回すとは、浅はかな奴め……」  
デアアンツ!

「う……………」

「…416、目が覚めた?」

爆発によつて辺り一面が瓦礫の山と化したフロア。

先に目を覚ましたのか、もともと気を失つてすらいなかったのか、HK416の目の前にはやけに落ち着いたUMP45の姿があった。

「これは…DEAの隊員たちはどうなつて……」

「彼らは“奇跡的に”みんな無事よ、先に行つといってもらつたわ」

あの爆発の後、負傷こそすれど“奇跡的に”誰も命を落とすことはなかった。部屋に設置された爆弾に最も近い位置にいたHK416はしばらく意識を失つてしまい、UMP45は彼女が目を覚ますまで1人で待つていたのだ。

「へえ…1人で……」

「……………」

「なにか私だけに伝えたいことがあるの?45」

「…後で分かるわ」

「今からDEAと合流するわよ」

「…」

意味深な反応を示すUMP45。そんな彼女に対して詮索をしたりすることなく、HK416は無言のまま彼女の後を追う。

「おまたせ♪隊長さん」

「……来たか、どうやら上の部隊がカルテルたちと派手にやり始めたようだ」

「そうみたいね、助けに行く?」

「その通りだ、二手に別れるぞ」

DEAの隊長は急遽部隊をふたつに分断することを決めた。ひと

つは予定通りパーティー会場を目指し、取引現場を取り押さえる制圧班。もうひとつは上の部隊の救援に向かう班だ。

「マイク、リード、キートン、ルノ、サンドは俺と現場を押さえる。他の4人はUMP45、HK416と共に部隊の救援に行ってくれ」

「救援部隊の指揮はフォーリーに任せる。頼んだぞ」

「任せてください、隊長」

そう言い残すと隊長は5名の隊員を率いて走り去っていった。

残された救援班の6名は戦闘中の部隊と通信を取り、カルテルたちの裏から攻められるよう打ち合わせをしていた。

ここでHK416は作戦を少し変更することを指揮官に報告する。

あの大きな爆発があったとはいえ、通信機能は無事だった。

「オーバーロード、聞こえますか？」

《こちらオーバーロード、どうやら回線が回復したようだ。正常だ》

「これより予定を一部変更。私たちは0-3達の救援に向かいます」

《了解だ、現在こちらからは0-3と0-4両名と通信ができない。

そちらから連絡は取れるか？》

「……ローカル回線は正常に稼働。どうやらかなりまずい状況のよう

ね……」

「事態は一刻を争うようだ、急ぐぞ」

「了解♪」

「…了解」

「HK416、UMP45、2人はポイントマンを。俺たちは後方から着いていく」

「先に行ってくれ」

「はあ…戦術人形だからって盾扱いしないでくれるかしら……」

「まーまー、そんなこと言わずに行きましょう。急がなきゃ」

HK416とUMP45は部隊を先導し、後ろから4名の隊員たちがついて行く陣形となった。今のところ、近くにカルテルがいる様子はない。

「……」

なのだが……

「……やれ」

突如銃を正面に向け、引き金に指をかける4名の隊員たち。

「……」

彼らが狙うその先にいる者は――

「ふんっ！」

「ぐっ……！」

「フッ！」

「っ！があっ!!」

「!？」

UMP45は隊員の顔を勢いよく銃床で殴り、HK416は腰に備えたナイフで別の隊員の右腕を突き刺した。

突然の出来事に戸惑い、動きを止めた残りの隊員。しかし彼らは即座に状況を理解し、2体の戦術人形に向けて銃を発砲した。

だが至近距離では銃よりもナイフ、格闘術の方が圧倒的に有利である。UMP45は隊員をねじ伏せて床に抑えつけ、HK416は隊員の間合いに入り込み首元に刃を当ててこう言い放つ。

動くも命はないわよ、と。

観念した隊員たちは武器を捨て、抵抗の意思はないことを示した。

「くっ……」

「…45、これで良かったのよね？」

「ええ。ありがとう」

《おい：2人ともなにを：!?》

《DEAの隊員たちはいったい……》

「指揮官は黙ってて、すぐに分かるから」

UMP45の尋問が始まる。

「さてと……」

「私たちが突入した部屋に仕掛けられた爆弾。制御室へ部隊が来るのを事前に知っていたかのような過剰すぎる戦力での待ち伏せ……」

「あなたたちね？カルテルに情報を漏らしていた内通者は」

「……」

番外編 戦いがここまで長引くとは誰も思わない

番外編 いつかあなたが振り向いてくれる日まで

「…いつから気づいていた」

隊員が口を開く。

「私たちの動きがここまで完全に読まれているとなると、内通者の存在を疑うのが当然よ。まあその内通者が私たちと一緒に行動しているのは予想外だったけど」

「腐つてたのは地元警察だけじゃなかったのね…」

《とにかくこの4人を拘束しろ、あとはトンプソンたちに回収させる》

「りようかい♪416、手伝って」

「はあ…やっぱり人間は信用ならないわ…」

指揮官から指示を受けたUMP45は手際よく裏切り者たちを近くの支柱に縛りつけ、DEA隊長と回線を繋げる。

《どうした?》

「隊長さん?あなたの部下、カルテル達と随分仲が良いみたいよ」

《…》

「…さつきまで45と楽しくお喋りしてたのに急に黙り込むのね。なんとか言いなさいよ」

露骨にイラついた態度を示すHK416に対してUMP45が「今は黙ってて」とアイコンタクトをする。

《その…すまない。君たちを危ない目に合わせてしまった》

「あの4人が内通者だって知ってたの?」

《疑惑はあった。だが確たる証拠がなくてな…、今のところはひとまじらず様子を伺うしかなかった》

「どうやら『表向きは』捜査線上に挙がっていなかったものの、ごく一部の捜査員の間では彼らの関与が疑われていたらしい。しかし彼らの特殊部隊員としての優れた実績、加えて警察組織の人員不足も相まって迂闊に手を出せなかったのだ。」

そして…

《俺はあいつらを…仲間を疑いたくなかった…》

「人間らしいわね、感動して涙が止まらないわ。こんなに堅い絆で結ばれているんだもの」

嘲笑うように皮肉を繰り出すHK416だがUMP45に鋭い視線を向けられてしまい、仕方なく舌打ちして周囲の警戒を続けた。

「そう、分かったわ…。どうするしきかん?」

ことの真相を聞き出したUMP45は指揮官へ指示を仰ぐ。これまで沈黙を貫いていたがすっかり会話を聞いていた。

《だからコールサインで…いや、もういい…》

《…このことは上に報告させてもらう。もちろんFBIにもだ。そしてDEAはただちに現場から引き上げろ》

《ここからは我々グリフィンが取り仕切る》

連邦捜査局

「指揮官さま、よろしいのですか…?今ここで人手が減るのは厳しいのでは……」

「…ひとまず本作戦が終了するまでは共同した方がいいかと」

カリーナ達の言うように、現状は正規軍レベルの重装備と大勢の戦闘員を持つカルテル相手に苦戦を強いられている。今は猫の手も借りた状況だが…

「これ以上彼らを信用するほうが危険だ。いつ裏切られてもおかしくない」

《オーバーロード!聞こえますか!?!》

他の支部に所属しており、本作戦において指揮下にいるデッドリッチームのMP5から緊急の通信が入る。

「こちらオーバーロード、どうした」

《奴らの待ち伏せ攻撃のせいで被害が甚大に…これ以上の戦闘続行は不可能です!!》

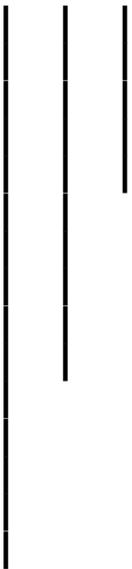
モニターを彼女たちのアイカメラによる映像に切り替えると先ほ

どのM4たちと同様、軽機関銃やジャガーノートで武装したカルテルが一方的な銃撃を与えていた。こちらは位置の関係からアーチャーの支援を受けられず、火力を犠牲に機動性に全振りしているMP5たちのチームでは歯が立たない。

「すぐに撤退しろ、屋上にへりを送る」

《り…了解ですっ!》

「……作戦を変更だ。プランBで行くぞ」



指揮官との通信を終了し、ひとまずHK416とUMP45はM4たちとの合流へ向かう。

「ほんと最悪な状況だわ、私たちだけで片付けろなんて…」

「私達はこういうの初めてじゃないでしょ? いつも通りにやれば平気よ」

《今の状況は多勢に無勢すぎる。できる限り戦闘は控えて目標まで向かえ。見つかるら厄介だ》

「了解」

指揮官の指示通り、彼女たちはカルテルたちの目をかいくぐり順調にパーティー会場に近づいていく。すると別行動をしているAR15から通信が入ってきた。

《こちらAR15、制御システムの工作は完了したわ》

待ち伏せに遭ったM4とAR15たちだったがアーチャーの支援もあり、なんとか制御室を制圧しジャミング装置の設置に成功した。これで電子システムを工作し、ホテルすべてのドアのオートロックをシステムダウンさせることができる。

「了解、急いで目標まで来て。時間がないわ」

「…(こ)ね」

「オーバードード、会場入口に到着。M4とAR15を待ちます」

HK416とUMP45がついにパーティー会場に辿り着く。見渡す限り周囲に敵はいないようだ。

「てつきり入口をがっちり固めていると思ったのに、私たちの捜索に駆り出されているのかしら」

「すでにけつこうな数を始末してるから人手が足りないのかもしれないけど、だからといって1人の見張りもいないのは妙ね……」

ひと段落ついた2人に指揮官から通信が入る。

《気をつけろ、サーマルでそちらに向かう反応を検知した》

「数は？」

《かなり多い、まるでDiner gateの群れだな》

「まさかハメられるとはね〜」

「…やるしかないわ……」

2人は左右の壁に張り付いてカルテルを待ち伏せる。

「2人とも聞いてた？なるべく早く来てちょうだい、長くはもたないわ」

《了解、死ぬんじゃないわよ！》

通信が終了すると同時に遠くから複数の足音が聞こえてきた。

支援もなし、味方は自分の相方1人だけ、対する敵戦力は甚大。これまで鉄血と過酷な戦いを繰り返した彼女たちだが、ここまで不利なものも久しぶりだった。

「私たちだけで何人倒せるかしらね……」

敵の足音が徐々に近づくにつれ、嫌な汗がHK416の身体を流れる。

「さすがの完璧なあなたもちよつと怖気ついちゃった？」

いつもの小馬鹿にするからかいか、それともHK416を気遣うための冗談なのか、UMP45が半笑い気味に言う。しかしそんな軽口を叩く余裕を見せる彼女だが、本心では死への恐怖と不安に襲われていた。

自分たちは人形だ。自分たちにはバックアップがある。たとえ死んでもデータさえあれば生き返られる。

そんなことは分かっている。ちゃんと理解しているつもりなのに、

頭のどこか片隅で死ぬのが怖いと訴えていた。

「…あなたも本当は怖いんでしょう？・45」

「……」

「まったく…今までこんなことなかったのに…」

そう呟きながらポーチに入れていた銀色の指輪を握りしめる。

不安に押しつぶされそうななか、最も信頼する者の声が届いた。

《あー…416、45》

「……しきかん？」

「…ついにあなたもコールサインで呼ばなくなったわね」

《こういう時は、ちゃんと名前で呼んであげないと。どこかの誰かさんみたいの不真面目なわけじゃないぞ》

いつも自分たちの面倒をみているあの人の声。戦闘続きの生活のなか、平和な時間を一緒に過ごした指揮官の声だ。

《その…すまない。2人をこんな目に遭わせてしまつて…》

「…ふふっ♪DEAの隊長さんと同じこと言つてるわよ」

「人間つて謝罪するのが好きなのかしら、それとも指揮官が中間管理職だから？」

一般の戦術人形のみならず、非合法に作られた彼女たちにも分け隔てなく接してくれる指揮官。彼の声を聞くと気づけば恐怖心はどこかへ消え、軽口を言えるほどに落ち着きを取り戻した。

《なつ…違うーいや…管理職だからつてのはあながち間違いじゃないが……》

2人にいじられて取り乱してしまいういかにも彼らしい姿。死と隣り合わせの状況にもかかわらず、いつも通りの彼に思わず頬が緩んでしまう。

《…2人とも誓約の指輪は持つてるな？》

誓約の指輪。本来制限されている人形の性能と権限を部分解除すると同時に、人形のオーナー権がグリフィンから指揮官個人の所有に移行するというもの。

ペルシカが開発した試作品らしいが、指揮官は指輪の使用にあまり乗り気ではなかった。

《そいつを指に嵌めろ。そうすれば勝機はある。奴らとも互角にやりあえるはずだ》

「……人形とはそういう関係になりたくないんじゃないやなかった？」

グリフィンの戦術指揮官としては珍しく、彼は人形たちと身体を交えたり身勝手な扱いをする人間ではなかった。どれだけ人形に言い寄られても彼は頑なにそれを断る。

指揮官は同性愛者だと考える者。過去になにかあったと決めつける者。人間にしか好意を抱かないと理解する者。たくさんの仮説があるがその真相はいまだ明かされていない。

《まあ……たしかにそうなんだが……》

《俺の勝手な都合を押しつけて2人が酷い目に遭うほうがもつと嫌だ》

「……」

「……」

《こんな考えは異端だと言われるだろうが、完璧なバックアップなんでもものは存在しない。記憶が戻<sup>データ</sup>っても、あの日を共に過ごしたその身体は完全に失ってしまう》

《俺は……俺は2人を失いたくない……》

《たとえこの思いが偽善で……欺瞞で……偽りの思考だとしても……》

《俺は……》

震えていた。いつも彼女たちの前では明るく振る舞い、頼もしくて温かい彼の声が震えていたのだ。

それは自分たちが知っているいつもの指揮官ではなかった。だが今まで見せていなかっただけで、これが本当の彼なのだろう。

「……私たちが誰だと思ってるの？しきかん？」

「404も舐められたものね……あなたの功績に最も貢献してきたのは誰か知らないの？」

《45……416……》

そう答えながら2人はホロサイトを覗き、距離を詰めるカルテルたちに狙いを定める。

「こんな指輪に頼らなくても人間の相手くらいなんてことないんだか

ら…」

パンパン！

「言つとくけど私たちは死ぬのが怖いわけじゃないわ。任務を失敗して今までの戦歴に泥を塗りたくないだけよ？」

パシユパシユパシユツ！パシユツ！

「私たちなら、大丈夫…」

—————  
—————  
—————

ズガガガガガンツ！！

ババババババツ！

通信機越しに鈍く重い銃声が伝わってくる。

「……」

「指揮官さま……」

「…ちっ……」

「…すぐにヘリを出せ、急いで4人の支援に向かわせろ」

「了解。HQよりノーマッドへ、至急プレッジチームの航空支援に当たれ」

アーチャーチームと通信中のオペレーターが指揮官に情報を伝える。

「アーチャーから報告、幹部の奴らが動き出しました。恐らく逃走の準備と思われます」

取引が終了したのか、それとも自分たちのすぐ近くまで戦術人形たちが迫っていることを危惧したのか。早々に撤収作業を始めたらしい。

「急げ、奴らに逃げられるぞ」

《まったく…！人使いが荒いんだから！バシユツ！バシユツ！》

《こちらAR—15！南側の通路から侵攻中、あと少しでそちらに着くわ！》

《了解。45！そつちから2人が向かってる！誤射しないでよ！》

《バンバン！ バババババツ！》

「地下駐車場に動きあり。SUVが3台、登録されているナンバーと一致します」

「…車だと？ 包囲網を無理やり突破する気か」

現場周辺の道路はすべて地元警察によって封鎖されており、勢いにかかせて強行突破するのはあまり得策ではない。

しかし…。

《まさか地元警察もあいつらの逃走に加担するんじゃないわよね？》

UMP45の言うようにこの国の警察は優秀だが汚職にまみれており、いつ寝返ってもおかしくはない。DEAがいい例だ

「……」

さまざまな予測が指揮官の頭をよぎる。

「…ひとまず今は目の前の敵を撃つことに集中しろ、いいな？」



「キリがないわね…！ジリ貧だわ！」

数の多いカルテルたちによる圧倒的な制圧射撃により、思うように反撃できない4人。残弾も逃げ場もなく、完全に窮地だった。

「このままじゃ…」

雨音の如く激しい銃声が響きわたるなか、空を切り裂くように羽ばたく鳥が彼女たちの前に現れる。

「あれは…」

グリフィン所属の汎用ヘリ、UH-60だ。

《よう、お嬢さんたち！俺を待ってたんだろ？》

聞き馴染みのあるパイロットの声、それはこの暗い状況を明るく照らしてくれた。

「ノーマッド！奴らにぶっぱなせ！！」

HK416が叫んだ途端、ヘリの側面ドアに搭載されているM134が凄まじい音を立てて銃弾を放つ。毎分3,000発の速さで発射される7.62mm弾がカルテルたちに降りかかった。

さながら、カルテルたちにとつては無慈悲な虐殺。戦術人形にとつては自らを救済する女神のようだった。

だがヘリの死角から攻撃してくる敵も多く、航空支援によってある程度の敵を減らせたものの、不利な状況下にあることに変わりはないかった。

M4A1は必死に思考を巡らせ、この戦況をどう覆すか、空になったマガジンを抜きながら様々な手段を考える。

やがてひとつの答えに辿り着いた。

「45さん！スモークはありますか!？」

「ええ！ひとつだけ!」

「それを投げてください！奴らの目をくらませている間にパーティー会場に突入、即座に扉をロックします!」

警備をする下つ端のカルテルと違い、目的の会場にいるのは幹部数名と少数の護衛のみだ。上手く行けば形勢逆転の可能性はある。

「OK、いくわよ!」

ピンツ シュツ……

UMP45がスモークグレネードを投擲すると瞬時に煙が広がり、辺り一面が濃霧に包まれる。

視界不良のなか進撃するのは危険だと判断したのか、カルテルたちは足を止め、引き金から指を離した。

M4A1たちはその瞬間を見逃さず、扉を開けて会場に突入。同時にジャミング装置を起動させてオートロックシステムをダウンさせることに成功する。これで外の下つ端たちが中に入ることはない。

だが突入するのが僅かに遅く、会場内はもぬけの殻で幹部たちの姿はなかった。

「ちっ……！一足遅かった!!」

道具を用いてドアを無理やりぶち抜いた痕跡があるのを発見する。幹部たちの逃げた道しるべが示されていた。

「ごつちよ！急いで!!」

「指揮官、奴らは現場から逃走。追跡します」

《了解だ。地下駐車場でカルテルのものと見られる車両が3台動いている》

《M4とAR-15はそのまま追跡を、416と45は一旦屋上に向かえ。ノーマッドを待機させてある。陸と空から奴らを追うぞ》

「了解です!」

「そっちは任せたわ、しくじらないでよ」

「…私は完璧なのよ。あなたたちに言われるまでもないわ」

そう言い残しHK416とUMP45は屋上に向かって走って行った。

「……」

「…行くわよ、奴らに逃げられる」

「…ええ」



「AR-15!運転は任せたわ!」

「OK、振り落とされないようにね」

ホテルの地下空間に激しい銃声と車の走音が鳴り響く。駐車場内の道幅は狭いのだがカルテルたちはそんなことお構いなし。追っ手を引き離そうとかなりのスピードを出している。

「へえ…、面白いじゃない…!」

ホテルの敷地内から飛び出ると出入口にはすでに地元警察が待ち構えており、複数の警察車両が追跡に参加する。その際に1台がパトカーに激突、停車したところを警官が取り囲んで確保に成功した。

だが残りの2台はそのまま逃走を続け、追跡するパトカーに差をつける。

「逃がさないんだから…!」

AR―15は見事なハンドルさばきで奴らの車にぴったり張り付き、M4A1が助手席から発砲。運転席を狙うも防弾ガラスによって銃撃を阻まれ、運転手を撃ち抜くことができない。

「駄目！通じないわ！」

「タイヤを狙ってバーストさせなさい！」

AR―15の指示通りM4A1は後方のタイヤに向けて発砲する。攻撃は見事に成功。カルテルの1台がスピードのあまりバランスを崩し、脇道へそれて横転する。

残るは1台。

ここでHK416とUMP45を乗せたヘリが現場に追いつく。

「あれで最後までいいね」

「地上のおまわりさんから報告。幹部が乗ってるのはあの車よ」

「了解、ここで終わらせましょう」

2人は揺れ動く機内から車のエンジン部分へ発砲する。ほとんどの弾は見事に命中し、やがて車体から白い煙が吹き始めて速度が低下していく。

「AR―15、M4、目標を確保する用意を」

「了解。速度が落ちてきてるわね、これなら追いつけるわ」

「目標はフェルブルク通りを南下中！ロードブロックの設置を!!」

M4A1の要請を受け、包囲していた警察が道路にパトカーを設置してカルテルたちの逃げ道を塞ぐ。車はパトカーに激突。ようやく停止させることに成功した。

警官とM4たちはゆつくりと警戒しつつ近づき、上空からUMP45とHK416が車のドアに狙いを定める。

「武器を捨てて！両手を挙げて降りてきなさい！」

M4が投降するようカルテルへ告げた途端、1人の大男が車から出てきた。かなりの体格で身長は2mを越えている。

「両手を頭の上にして地面に伏せなさい」

《奴がHigh<sup>高</sup>Value<sup>価</sup>Target<sup>目標</sup>だ、直ちに拘束しろ》

「了解…」

「…証拠品の押収を」

ゆっくりと動きだす大男は不敵な笑みを浮かべると銃を取り出しM4たちへ向けた。

『対物ライフル  
バレットM82…!』

『こいつを渡してたまるかアアツ!!』

ドンツ!

「くっ…!」

「まだ反撃する気なの!」

重い音を立てて放たれた12.7mm弾。M4たちは間一髪で避けたが、後方のパトカーのガソリンタンクに命中し、気化したガソリンに引火して大爆発が起きる。

《…対物ライフルを片手で…!!あいつ何者なんだ!》

『こうなったらお前らごとぶツを始末してやるっ!!』

ドンツ!ドンツ!

男は対物ライフルを乱射しているものの、冷静ではないようで狙いはかなりいい加減だ。

タイミングを見計らって反撃をするが、警官の持つ拳銃や戦術人形のライフルではいまいち効いていないように見える。強化装甲を着込んでいる可能性が高い。分が悪いため、M4は上空で旋回している416に支援を求める。

「416さん!上空から掃射できますか!」

「あんなバケモノをミニガンで倒せる気がしないけど…!」

HK416は目標に狙いをつけミニガンで掃射する。高速で発射される銃弾により、強化装甲を部分的に破壊することに成功する。

『グツ…』

「OK!効いてるわ!!」

『…鬱陶しいハエがアツ!』

銃弾の雨に怯みながらも男がへりに向けて対物ライフルの引き金を引いた。

ドンツ!

「…!!」

銃弾はへりの操縦系統に命中してしまい、機体は制御を失う。

《メーデー！メーデー！メーデー！被弾した！！》

「冗談でしょ……！」

警報が機内に鳴り響きぐらぐらと機体が揺れる。徐々に高度が下がるなか、なんとか体勢を立て直そうとするもだんだんと地面が近づいてくる。危機的状況に直面したHK416がパイロットに向かって叫ぶ。

「ノーマッド！大丈夫なの!？」

「フットペダルは生きてる！踏ん張れよクソツタレ…!!」

「危ない！」

ビルに激突する寸前でヘリは体勢を建て直し高度を上げる。奇跡的に墜落は免れた。

「トルクよし、テイルローター有効、油圧計安定。コレクティブピッチ問題なし、燃料70%」

「オーバーロード、飛行可能だ。だが安全のために一旦飛行場まで撤退する」

《了解だ、許可する》

「ふう…やるじゃない、ノーマッド……」

HK416たちの乗るヘリが無事に飛び続けているのを見届け、M4は安堵の表情を浮かべる。

「よかった……！」

だが

「M4！危ない!!」

「…えっ……」

ドオオオオオオンツ！

……

……

M……!

…M4……!!

「M4!!」

「う……」

至近距離で起きた爆発の衝撃でM4は吹き飛ばされてしまう。周

困の警官もほとんどが負傷やその救護にあたっており、まともに戦える者は残っていない。

「AR…15……」

「立てる!?一旦引いて…ぐっ……」

M4A1を庇うAR—15だが彼女は対物ライフルの一撃を食らってしまい、右腕を損傷していた。

誰も反撃できないまま幹部の大男が彼女たちに近づく。

『許さねえぞ…グリフィンの犬が……!!』

—  
—  
—

「M4A1!」

地上チームの危機にHK416が叫ぶ。

「ノーマッド!今すぐ引き返して!」

「馬鹿言え!あんなバケモノの相手をする気か!」

パイロットはたった2人であるの相手をするのは自殺行為だと判断し、彼女たちの要求を却下する。

「いいから戻りなさい!あいつらを見捨てるわけには行かないわ!!」

「危険すぎる!下手に近づいてまたヘリを撃たれたら確実に墜落するぞ!」

「しきかん!救出の許可を!!」

《…:…》

「指揮官っ!!」

《…:分かった…、許可する》

指揮官は危険な賭けを許可するかどうか決断を迫られるが、404小隊の優れた戦闘能力を信じ、2人を降下させる決断を下した。

パイロットは安全のため、戦闘区域から少し離れた場所にヘリを着陸させて2人を降ろす。HK416とUMP45は徒歩で現場に向かいM4たちの防御につく。

「2人とも無事!?!」

「…45…416…?」

「…あんたたちのことは心底どうでもいいわ。ただ、ここで死なれると指揮官に合わせる顔がないのよ」

「…ははっ…」

2人の登場に安堵するM4A1とARR-15は思いを2人に託し、物陰に隠れる。

「私がヤツの注意を引く、416は隙を見て榴弾を食らわせて!」

「OK、分かった」

UMP45は持ち前の高い機動力を活かし、素早い動きで大男を攪乱させる。

『ハエの次はゴキブリか!!』

「動きが鈍いわよ、ちよつとは痩せたら?」

対物ライフルを振りかざして射撃する大男だが、SMG型戦術人形のUMP45にとって銃弾の回避くらい造作もない。

『ちよこまか動きやがってエツ!!』

大男は自らの攻撃が命中しないことにイラつくあまりライフルを投げ捨て、UMP45に巨体を活かした肉薄攻撃を仕掛ける。

しかしこれこそUMP45の狙いだった。ただ回避していたわけではなく、車の近くに大男を引きつけるように立ち回っていたのだ。

そして猛突進してくる大男を回避し、UMP45の思惑通り、大男は数台のパトカーに突っ込む。

「416!今よ!!」

『……?!』

UMP45の合図を受けたHK416はグレネードランチャーの引き金に指をかける。

「私は完璧よ…」

ドオオオオオオンツ!

大男に向けて放たれた榴弾は複数の車両を巻き込み、相乗効果によって大爆発が起こった。

爆発が収まると同時に銃声は止み、辺りにサイレンの音が鳴り響く。爆発の跡、傷ついたパトカー、多数の血痕がこの事件の凄惨さを物語る。

やがて周辺は警察によって封鎖され、立ち込めた硝煙だけが永く漂い続けた……。

「話は以上だ、下がっていいぞ」

「はっ、失礼します」

合同作戦から4日後。

ヘリアンさんにすべての報告を終えた俺は部屋を後にし、基地の屋上で年甲斐もなく黄昏れていた。

「はあー……」

「ここにいたんですか、指揮官」

現れたのは416、チームを勝利に導いた優秀な人形だ。そして……

「その…申し訳ありません。私のせいで重要な証拠品が…」

俺が上層部にこっぴどく叱られる原因を作った人形でもある。

榴弾で車を巻き込んで大爆発を起こし、HVTの無力化に成功したのだが、その際に証拠品を乗せた車ごと爆破させてしまったのだ。

結果、証拠品は全ロスト。麻薬取引の件で起訴するも証拠不十分を言い渡された。正規軍との癒着疑惑等、なんとか別件の容疑で幹部や構成員を起訴することに成功するも、組織を完全に壊滅させるまでには至らなかった。

「ああ…気にするな、俺はお前たちが無事だっただけで十分だよ」

多少の損害があったものの、1人の犠牲者も出さずに済んだのだから。

「なあ、なんでアレを使わなかったんだ？」

「アレ…？」

「ほら、誓約の指輪」

「ああ…それは……」

416は少しの間考え込んだのち、こう答えた。

「だって指揮官を束縛する重荷にはなりたくないもの。45やあの2人もそう考えているはずよ」

大切な相手の都合を無視してまで自分の想いを貫きたくない。彼女たちはそう判断したのだろう。

「それに…」

「？」

416はしばらく俯き、顔を上げると俺の心になにかを打ち込むように答えた。

「それに、自分で左手の薬指に指輪を嵌めるなんてナンセンスでしょう、指揮官？」

番外編 いつかあなたが振り向いてくれる日まで

## #11 彼女たちはプライスレス

「くそっ、どこに行ったんだM4は……」

かなりの広さがあるこの施設。1人で探すにはどうにも骨が折れる。

(仕方ない、誰かに協力を仰ぐか…)

どこかに口が固くて信頼できるヤツは……と辺りを見渡してみるところ…。

……いた、Vectorだ。

誰にも秘密を漏らさないというよりは他人に対して無関心というべきか。とはいえ最近はそのような性格も変わりつつある。

この基地には各階の渡り廊下に“くつろぎ広場”というスペースが用意されており、職員や人形たちの憩いの場として利用されている。そんな「普段みんなが集まる」場所で彼女が読書に耽っているのは少し意外だった。

「Vector、珍しいな。お前がここを使ってるなんて」

「指揮官か…。別に、私だって時々ここにいるよ」

「それとも…」

彼女は本を閉じ、まっすぐと俺の目を見つめた。

「ここは私に似つかわしくない?」

そう、そんな性格も変わりつつ…あれ?

「いや…そういうわけじゃ……!」

「ふふっ、ごめんごめん冗談だよ。…それで? 私になにか用があるんじゃないの?」

まったく心臓に悪い…。まあ少しタチは悪いが冗談を言えるほどまでにVectorは変わった。うん、そういうことにおこう。

「ああ、ちよつと面倒なことが起きてな。話せば長くなるんだが…」

「……」

「…ほんとだからね？信じて？指揮官を信じて？」

「いくらなんでもそんな…、いや…ペルシカさんならやりかねないかも…」

どんなに信憑性が低いことでもペルシカさんの名前を出せば大抵のことは信じてもらえる。あの人が原因でよかった。いや、よくはないな……。

「とにかく他の人にバレるまでにM4を見つければいいんだよね？」

「そのとおりだ。話が早くて助かる」

うん、やつぱりVectorに頼んで正解だったな。真面目に取り組んでくれるし優秀だ。

「ちよつと待つて…すぐ済むから」

そう言うときVectorは隣の椅子に置いていたバッグを開きゴソゴソとなにかを取り出した。

「よし、これでオーケー」↑にやんこヴェクター

「君なにしてんの??？」

えっ、いや、なにしてんの？それハロウィンパーティーの時の服だよね？

「人間に対して警戒心が強いネコもいるし、この姿ならその心配はないでしょ？ほら、指揮官も」つネコミミカチューシャ

「あ…ああ…なるほど、そういうことか…そういうもんなのか？」

一瞬納得しかけたがその理論はおかしい。野良猫じやあるまいし警戒心が芽生えたりはしないだろう…。それに警戒心を解くにしてもこんな仮装で通用するはずもない。もしかしてVectorって天然なのか？

彼女の顔をみる限りふざけているようには見えない。恐らく本人は真面目にそう考えているのだろう、となると反論するのはなんか気が引けるな…。

よし、これ以上は何も言わないことにしよう。あと、俺はネコミミ

は付けないからな。恥ずかしい。

「そう…指揮官に似合うと思っただのに…」

「似合わない、どう考えても似合わない」

そうキツパリ断るとVectorは残念そうにネコミミをバツグにしまった。

本当に付けないの？（・ω・）といった視線をチラチラと向けてくるがダメなものはダメです。諦めなさい。

「でも外見がネコになったなら中身も少しはネコっぽくなってるんじゃないの？」

「うーん、どうなんだろうな」

たしかに45は人懐っこくなったというかすごい甘えてくるようになった。元々の性格か416も親猫のように45の面倒を見ている。

なるほど、外見だけでなく内面もネコに近づいているというのは理にかなっている。さすがに俺たちを警戒するほど野性化してはいないと思うが。

「指揮官の匂いにするものをその辺に置いてたら、そのうちM4から寄って来ると思う」

「適当なことを言うな。こっちは真面目に考えてるんだぞ」

「ソースはG41」

「……」

なんだろう、G41なら本当にそんなことを言っただけだから困る。

「本当に上手くいくか…これ…」

「物は試しだよ、ほらその制服脱いで」

Vectorに促されるまま、着ていた上着を脱いでその辺の手すりに掛けた。あとは少し離れたところから目標が寄ってくるのを待つだけだ。

・ 10分後 ・

「全然M4来ないんだが……」

かれこれ待ち続けているが彼女が現れる気配は全くない。素直に探しに行った方がいいんじゃないか、これ。

「待ち伏せには忍耐力が大事だよ、ライフルの子たちが言ってた」

「なにお前は読書を再開してるんだよ、飽きたの？ねえ飽きたの？」

罨の監視を続けている俺には目もくれず、Vectorはコーヒーを啜りながら本を読んでいる。ちくしょう。

と、ここですぐに動きが見られる。1人の戦術人形が罨に近づいてきたのだ。

「！おいVector、きたぞー！」

(えっ、うそ。適当に言ったのに)

だがその正体はM4ではなく、別の人形だった。

「あれは……G36……？」

手に持った書類を見てなにかつぶやきながら近づいているのはG36。配給や弾薬などの在庫管理、俺の身の回りの手伝いなど戦闘以外のことを進んでやってくれる優秀な人形だ。

「……これは……ご主人様の……」

「なんで見ただけで俺のだって分かったんだ」

「…指揮官の部下ならまあ分かるんじゃない？私はどうでもいいけど」

それはそれで傷つく。

「まったく、制服をこんなところに脱ぎ捨てて……。あとで注意しないと……」

「……」

ん？俺の服をじっと見つめてどうしたんだ？

「…」キョロキョロ

「……」クンクン

「…ふっふっ♪」

G36は俺の服を片手に、周囲に誰もいないことを確認すると服の匂いを嗅いで去っていった。普段は堅物な表情を見せる彼女だが変に笑顔だった。おかしいな、結構一緒にいるのにあんな笑ってるとこ

みたことないぞ。

「ていうか…俺の服……」

「G36のことだから洗濯して渡してくれるよ、はい次」

「次？」

「作戦続行だよ、シャツ脱いで」

ええ……。

・ 10分後 ・

「Vectorさん、僕思うんですよ。他にもっといい方法があるんじゃないんでしょうか」

「たった一度の失敗で諦めるのはよくないよ。何度も繰り返し続けて実ることだってあるんだから」

罨の監視を続けるインナーシャツ姿の俺には目もくれず、Vectorはクツキーを食べながら本を読んでいる。ちくしよう。

と、ここですぐに動きが見られる。1人の戦術人形が罨に近づいてきたのだ。

「！おいVector、きたぞー！」

(えっ、うそ。その場しのぎで言ったのに)

だがその正体はM4ではなく、別の人形だった。

「あれは……Five—seven……？」

タピオカミルクティーを飲みながらスマホを片手に歩いているのはFive—seven。こうしてみると部隊の中でも今時な女の子の部類に入る気がする。

「これは…指揮官のシャツ？なんでこんなところに…」

「どこをどう分析して俺のだと判断したんだ。なに？あいつ科学捜査班出身なの？」

「現代の科学技術の進歩はすごいからね、戦術人形が普及してるくらいだし」

それとこれとは違うだろ。

「もおー、指揮官だったら。いくら暑いからってこんなところに脱ぎ捨て

ないでよね……」

「……」

嫌な予感がする。

「…」キョロキョロ

「……」スーハー…スーハー…クンカクンカ

「…はああ／＼／＼」

Five—sevenは周囲に誰もいないことを確認すると、俺のシャツをえげつない速度で嗅いで去っていった。普段は明るくお気楽な雰囲気の彼女だが、あれは完全に犯罪者のそれだった。次会う時にどんな顔をすればいいんだ。

「いや、そんなことより俺のシャツは…」

「Five—sevenはいい子だから悪いようにはしないよ、シャツが戻ってくるかは知らないけど。さ、次行こう」

「まだやるのか…」

「今度こそ上手くいく気がする」

「本気で言ってるのか？」

「いえすイエス」

こいつ……。

「つていつても上は脱いだし、あとはズボンしか…」

「……」

「……」

「…まさか……」

「分かってるなら早く脱ぐ」

あなたは鬼ですか？

こればかりは素直に従う訳にはないのでさすがの俺もVect Orに食い下がる。

「いや…さすがにパンツ姿で基地を出歩くのはまずいだろ…。誰かに見られたらどうするんだよ」

「指揮官、部下のエリート人形達にいやらしい行為をしでかしたのが上の人間にバレると、パンツ姿で歩く変態のレッテルを貼られるのどっちがマシ？」

「どつちも嫌だわ」

だがまあ考え方によっては後者であれば俺の社会的地位と信頼は地に墮ちるものの、処分は嚴重注意程度で済むかもしれない。なんだこのジレンマ。

「やるしかないのか……」

・ 10分後 ・

「なんだろう、なにか大切なものを喪った気がする。」

「何も捨てることができな人には何かを変えることなんてできな  
いってアルミンが言ってたよ。指揮官も人間性を捧げないと」

畏の監視を続けるパンツ一丁姿の俺には目もくれず、V e c t o r  
は紅茶を飲みながら本を読んでいる。ちくしょう。

と、ここぞついに動きが見られる。1人の人物が畏に近づいてきた  
のだ。

「！おいV e c t o r、きたぞー！」

「ふーん」

「おいコラ」

「こいつやっぱり飽きてんじゃねえか。」

「冗談だよ、でもあれM4じゃなくて……」

「あれは……!?!」

「やあ、指揮官。こんなところでなにをしている？」

遭遇に最も恐れていた人、ヘリアンさんだった。なぜだ……！なぜこ  
んな時にヘリアンさんが……!?!バレたら一番まずい人に見つかっ  
ちやっただよオイ……!

「もう一度問おう。そんな姿でなにをしている？答えたまえ」

「……こちらスネーク、発見する前に発見された。これより逃亡を開始  
する」

「逃がさん」

「こちらスネーク、死んだ。」

「……本部所属のヘリアンさんがなぜうちに？今日は特に大きな作戦会

「議もないはずですが」

「ここでV e c t o rが機転を利かせてヘリアンさんに質問した。でも君、ネコのコスプレしてることを忘れてないよね？」

「この技術スタッフに諸用があつてな、別棟の工廠に向かう途中だったのだ」

「だがこの職員から、『4階の渡り廊下付近で全身下着姿の男がなにやらコソコソ怪しいことをしている』…と通報が入つてな」

「駆けつけてみるとその正体は貴官だったというわけだ。まったく…なにをしているんだ……」

ヘリアンさんは頭を抱えてため息をつき、呆れた顔をしていた。



「なるほど、この件はペルシカが一枚噛んでいるわけか…」

「そうです、僕は悪くありません。全部ペルシカさんが悪いんです。

「というか、M4A1を探すにしても他に方法はなかったのか？どう考えても非効率的だろう」

「ごもつともですとも。普通にV e c t o rと二手に分かれて探した方がよかつたよね、これ。」

「お言葉ですが本作戦を提案したのはすべて彼女でして…まあたしかに実行したのは僕なんです…」

俺とヘリアンさんの視線がV e c t o rに向けられる。

「はあ、なんでここで私に振るかな。バカ指揮官」

「途中から心の声でてるぞ」

「バツが悪そうに不貞腐れてるが、お前も共犯なんだから当然だろ。こうなりや道連れだ。」

「ふむ…なるほどな」

「そういうとヘリアンさんは少し笑みを浮かべ、V e c t o rに問いかけた。」

「Vector、この場に君も関わっているのもなかなか興味深い。指揮官をからかってみてどうだった？」

「…悪くありません。UMP45やFive-sevenが指揮官でよく遊んでいるのも頷けます」

こいつやっぱり俺で遊んでいやがったのか…。しかし誰かをからかうなんて昔のこいつでは考えられないことだ。やはりVectorは変わった。それがいい意味なのか悪い意味なのかは置いて。ヘリアンさんはどうやらうちのVectorを少し気に入っている節がある。映画の一件でVectorのメンタルに変化があったことが原因だろう。ヘリアンさんもこいつには重い罰を与えたりしないはずだ。

問題はその…俺の処分なんだが…。

ブーツ…ブーツ…

「…ん？」

ここで416から着信がかかってきた。なにかあったのだろうか。

「俺だ、どうした」

『指揮官、M4が戻って来ました。今どちらに？』

え、戻ってきたの…。なんだよ…俺がしてきたことは一体…。

「分かった…すぐに戻る」

「どうした？なにかあったのか？」

「ああ…えーっと…、M4A1が無事に見つかったとの報告が入りました。今は私の部下が保護しています」

「そうか…それはよかった」

「指揮官、M4A1は16Labのエリート人形だ。Vectorのような一般の人形とは違ってバックアップや替えの身体はない。それは分かっているな？」

「…心得ています」

「普通の人形ならまだいい。だがもしもM4A1の身になにか起きたら大問題だ。その責任は誰が取る？貴官だけで背負えるのか？」

「申し訳ありません…」

「貴官は人形に肩入れしすぎる節がある。戦術指揮官としてあつては

ならないことだが、だからこそ貴官なら理解しているはずだ」

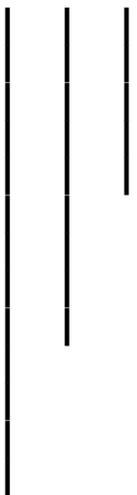
「A R小隊を持つということがどういふことなのか、今一度考え直せ」  
冷静に考えれば分かるはずだった。彼女たちは俺の部下だが私物ではない。ましてや替えのきかないA R小隊であればなおさらだ。もしも取り返しのつかないことになれば……。

「……それで、彼女たちは今どこに？」

「…私の自室です。部屋から出入りしないよう告げていますし、入口に不在の札を貼っているので隠匿性は問題ありません」

「よろしい、問題が問題だ。私も連れて行ってもらおうが異論はないな？」

「…はい、もちろんです」



ガチャッ

「しきかん！おかえ…なにその格好…」

「あー…まあいろいろあってな…、着替えてくる…」

さつきまで上司と普通に会話してたけど、今に至るまで俺パンツ姿だからね？パンツ姿で怒られていたからね？今考えるとシニールすぎる。

「これはこれはUMP45とHK416、ずいぶん可愛くなったじゃないか？」

「なっ…!?!」

ヘリアンさんの登場に思わず45と416が固まる。

「ミラレタ…ヘリアンニミラレタ……」

「指揮官…もうあいつを殺すしかないわ」

「落ち着け416、早まるな」

「焼夷手榴弾ならあるけど？」

「やめんかこの放火魔」

やめてー！仲良くしてー！

「ペルシカの悪ふぎけにも困ったものだ、まさか本当だったとは…。  
どうやらメンタルも少し書き換えられているそうだが、異変はないの  
か?」

ヘリアンさんが416に問いかける。

「…少し違和感はありますが特に支障はありません。半日程度で効果  
は切れますし、問題はないかと」

「そういや416、M4は?」

「指揮官のベッドで寝ていますよ。部屋から脱走した理由はまだ聞いて  
いません。それよりさっさと服を着てください!」

「すまん、ありがとう」

まずは適当な服に着替えてM4と話してみるか。ヘリアンさんと  
45たちだけにするのは少し不安だが…。そういや416のネコミ  
ミ姿は見たけど、M4のはまだ見てないな。どんななんだろう。

「や」と…

部屋着に着替えて寝室に入ると416の言った通り、M4がベッド  
で気持ち良さそうに寝ていた。自分のベッドで女の子が寝ているつ  
て冷静に考えたらレアだよな。

「おおー、ちゃんと生えてる生えてる」

M4の頭には茶色がかったネコミミが生えており、頭を撫でるとピ  
クつと耳が動く。かわいい。

「んう…」

おっと起こしちゃったか?少し撫ですぎたか。

「…ん…!?し、指揮官!?なぜここに!?ここは…ベッド!?まさか  
私…指揮官に…!」

「お…落ち着けM4!なにもしてない!なにもしてないから!!」

まさかこんなお約束の展開になるとは…。

「ふえつ?!…あつ…そうですか…」

そう弁明するとM4は少し残念そうにシユンとした。なんで残念  
そうなんだ。

「落ち着いたか?聞きたいことがあるんだが…」

「どうして部屋から飛び出したりしたんだ?」

「っ！…それは……」

「正直に言ってくれ、M4のメンタルになにか異常があったのなら16Labに連絡して精密検査をしてもらう。ペルシカさんにも説明しないとイケない」

「…すまない、今回はすべて俺の責任だ。このことはヘリアンさんに報告してきちんと処分を受ける」

「だがそんなことはどうでもいい。…もしM4の身に何かあったら…俺は……」

『AR小隊を持つということがどういことなのか、今一度考え直せ』  
俺はもう、家族を失いたくない。

「ち…違うんです！今のところメンタルにはなにも異常ありません！  
実は……」

「ん？」

「その…薬を飲んだ途端、急に指揮官を抱きしめたくなって…。指揮官の近くにいると自分を抑えられなくなりそうだったんです。でもそれが恥ずかしくて……」

「……つまり、俺の近くにいるとどうにかかなりそうだから逃げていったと」

「うう…／／／」

なんだそれ

なんだそれ (困惑)

まあメンタルに異常がないなら問題はないんだが……。いや、これ異常がないと言えるのか？それが異常なんじゃ……。

「大丈夫、それは恐らくM4が普段から抑えている欲求。それが爆発しただけよ」

「!?ペルシカさん!?なぜ……」

「薬の効果はどうかかなーって思って様子を見に来たのよ。どうやら思ったより事態が大きくなってるようね」

「いや本当に……。それより、爆発っていうのは……?」

「指揮官くん、404のUMP45にも薬を飲ませたようだけど、なにか変化はなかった?」

変化…。そういや45は最初なにかを我慢していたが、だんだん抑えられなくなり俺に抱きついたり甘えてきて…。まさか…。

「そういうこと。UMP45も初めは頑張ってたけど、結局欲望に飲まれて理性のタガが外れちゃったようね」

「もつとも、UMP45と違ってM4はシャイだから大胆な行動に移せなかったようだけど」

「指揮官くんだったら憎い男だね、たまにはこの子たちを甘えさせてあげたら？」

「はあ…」

「あの…指揮官！その…頭を撫でてくれませんか？」

「お…おう………」

「おっと私はお邪魔みたいだね。そろそろ薬の時間も切れる頃だし、私は帰らせてもらうよ」

「ごゆっくりー、と言ってペルシカさんは部屋を去り、残るは俺とM4だけになった。

「えっと…指揮官」

「…ああ、分かったよ」

寝ている隙はともかく、面と向かって撫でるのは照れくさいな…。そういえばSOP IIの頭はよく撫でたりするが、M4たちにはしたことがなかった。そう考えると普段は言いたくても言えなかったのだろう。

「…えへへっ♪」

「いつもありがとな、M4」

「…指揮官、ハグしても…いいですか？」

「…ああ、ほら」

ギョツと彼女を抱きしめる。やばい、すげえ恥ずかしい。

「はう…／／／」

すると、M4も俺の背中に腕をまわした。

「指揮官…温かいです………」

「ははっ、そうか。それはよかった」

M4の身体は俺に安らぎを与えてくれた。俺としたことが気づけ

ば、『この瞬間がずっと続けばいいのに』とすら考えてしまっていた。今は戦争中だし、いつ死ぬかも分からない。だがこんな幸せが、平和な時がずっと続いてほしいと俺は願う。

翌日、俺がパンツ姿でいたところを誰かが撮ってSNSで拡散していた。俺は無事に死亡した。

#11 彼女たちはプライスレス

#12 Do not give liquor  
to T-Dolls

晴れた日の午後……

「終わらん……終わらんぞ……。まったく進んでいる気がしない」

今日ほど休みたいと思つた日はないと思う（毎日言ってる）

本当は仕事したくないし部屋でゴロゴロしたい。今日中に終わらせなければならぬ仕事さえなければ今ごろベッドでスヤア……つてするんだがなあ。

「あ……モニター見すぎて頭が痛くなってきた……」

引き出しから頭痛薬を取り出して飲むとするが、手元に水がないことに気づき、溜息混じりに重い腰を上げて冷蔵庫へ向かう。

ふと夏休みの宿題で最も嫌いだつた読書感想文を思い出した。全然筆が進まず、数時間かけてやっと完成したと思つたら母による添削で何度もやり直しさせられたものだ。ちなみに読書感想文を楽に終わらせたいなら去年のを丸写し、もしくは使い回すといい。俺は中学時代の夏をこれで乗り切つた。

なんて昔の思い出に耽つていると、コンコンとドアをノックする音が聞こえる。俺は薬を飲みながらどうぞと返事をした。

「指揮官さまー、総務課から指揮官さま宛に大量の荷物が届いたとの連絡ですわ。ここまで運んでいただきますか？」

「ん？……ああ、あれか。1階の裏口にまとめて置いてくれ。後で誰かに取りに行かせる」

「誰かつて……今人形の皆さんはほとんど出払っているのでは？」

カリーナに指摘されて、だいたいの人形が後方支援や模擬作戦に参加していたり、休暇で街へ出かけて不在であることを思い出した。

「あー……そうだったな……。カリーナ、悪いがここまで運んできてくれないか？俺も今手が離せないんだ」

しかし帰ってきたのは了承の意ではなかった。

「ええ…私はこれから同僚とご飯を食べに行くんですけど…」

まあ断られるのは分かっていた。だってカーリーナは午後から休みだし。だが、あえて俺はここで引き下がらない。

「荷物をここまで運ぶのと作戦報告書を80枚書くの、どっちがいい？」

と、俺は柄にもなくカーリーナを脅してみた。とはいえ本当に無理やり手伝わせるつもりはない。俺もそんな鬼じゃないし、パワハラなんてしない。ちよつとした出来心というか、カーリーナの反応が気になったのだが…

「指揮官さまだったらあんまりですわあ！わたくしの事が嫌いになったのですか!?!」

「え」

そう嘆きながら彼女は目を潤ませ、俺の両肩を掴んでグラグラと揺らしてきた。

「ちよつ…冗談だつて！冗談！」

すると今度は俺の腕にしがみつき、引き剥がそうとするが一向に離れようとしない。

「おい…くつつくな…！」

「戦術人形の話は嫌いになつてもカリンの話は嫌いにならないでくださいー！」

どこのフライングゲットだお前は。

ふええ…、それよりも柔らかくて温かいのが当たってるよお…。本物の柔らかさだあ…。

「初めて基地に来た時はとても優しくかったのに…指揮官さまのぽか…」

「うっ…」

至近距離上目遣いからのそのセリフは卑怯だろ…。

「分かった！分かったから…さっさと飯食いに行つてこい！」

「わあーい！指揮官さま大好き！それでは失礼致しますわ!!（超早口）」

俺の降伏宣言を聞いた途端、ものすごい勢いで部屋を去っていったカリーナ。1人残された俺はポリポリと頭を掻きながらタツチパネルを操作し、人形達の管理記録を開く。

「えーと…今基地に居るのは…：ウエルロッドとFALだけか」

確かこの2人には休暇を与えていたのだが、基地に残っているなんて珍しいな。いつもならウエルロッドは近くのカフェへ紅茶を飲みに行ったり、FALならセンスのいい（本人談）服を買いに街へ出かけたりののだが。

「休みの日に部下を呼び出すのって気が引けるな…まあ仕方ないか…」

「で、この大荷物をたったの私たち2人で運べと？」

「かなりの量ですね…」

「オッス、オネガイシマース」

場所は変わって基地1階の裏口。俺はFALとウエルロッドを引き連れ、立ちはだかる大量の木箱を眺めていた。

「もちろんあなたも手伝うのよね？」

「おっとこれから大事な会議が」

「逃がさないわよ」

ちっ…。

「なんで私たちが雑用を…。こんなの総務課の職員に任せとけばいいのよ。アイツらろくに仕事しないんだから」

愚痴を吐くFALを他所に、ウエルロッドは近くにあった手頃な大ききの箱を持ち上げてみた。

「思ったより重いですね。指揮官、中身はなんなのですか？」

「今の時代では珍しい純正の酒だよ。DEAからのお詫びの品だ」

「DEA?…ああ、麻薬カルテルの時のですよね？」

先日のグリフィンとDEAによる合同作戦。目的はカルテルの幹部を確保することだったが、道中で汚職に手を染めたDEA隊員たちに裏切られ、うちの人形が危険な目に晒されたのだ。

「そうだ、お陰で上質な酒が大量に手に入った。さすが欧米の連中は規模がちがうな。本物を見るのは初めてだ」

「ふうん、ワインもあるのね。……まあ悪くないわ」

トンプソンやM16ほどではないが、FALもお酒を嗜む方だ。特に好きなのはワインで、箱からボトルを取り出して熱心にラベルを読んでいる。

「お酒ですか…紅茶は…無さそうですね…」

そんなFALとは対照的に紅茶派のウェルロッドは残念そうに肩を竦めた。まあ確かに事前の情報では送られてくるのは酒のみで紅茶の記載は無かったのだが。

「まあそう気を落とすな。酒が飲めないヤツの配慮も兼ねて、他の飲み物も用意するつもりだ。もちろん紅茶もな」

「！…指揮官！」

「なにかパーティでもするつもりなの？」

さすがFAL、察しがいい。

「大量に酒が手に入ったし、今夜は皆にサプライズをしようと思つてな。後方支援や模擬作戦から帰ってきたところに酒を用意して喜ばせようと考えてたんだよ」

酒以外にもちよつと洒落た料理なども用意し、本格的な宴を開くつもりだ。実はカリーナにもこのことは説明済みであり、酒を除く買い出しはほとんど済ませてくれた。

「指揮官にしては粹なことをするわね。…いいわ、手伝ってあげる」

「急にやる気になりましたね…FAL」

「最近はどういうのなかったもの。ほらウェルロッド、そつち持つて」  
ひとまず酒類の運搬は2人に任せておいていいだろう。もう少しすれば一〇〇式の部隊が帰ってくるし、彼女達に手伝わせよう。

「さて、俺はもうひと頑張りするかな……」

悲鳴をあげる身体にムチを打ち、んーつと背伸びをしながら執務室

へと向かった。

「ふう…やつと終わったあ…」

あれから数時間、ついに今週のタスクを終わらせることができた。本当はもつと早く終わっていたのだが、途中で休憩から戻ったカリリーナに

『申し訳ありません！渡すの忘れてましたわ…あはは…』

と大量の請求書と納品書を渡され、その処理に追われていたのだ。許さんからなああの守銭奴め。

「もうこんな時間か、そろそろ皆帰ってくる頃かな」

訓練を終えた部隊や街へ出かけていた者はすでに帰ってパーティーの準備を進めている。今のところまだ帰還していないのはトンプソンの部隊とAR小隊だけだ。

「大つぴらに酒が飲めるって聞いたらトンプソンとM16は喜ぶだろうな、フフツ…」

なんて独り言をつぶやいてるとFALがやってきた。

「指揮官、入るわ。何ひとりで喋って笑ってるのよ…気持ち悪い」  
「……」

これが独り身の悪い癖だ。周囲に誰もいない状況が普通だからつい独り言をつぶやいてしまう。

「…なんでもない。それより上官の部屋に入る時はノックをだな」

「ちゃんとしたわよ。あなたが気づかなかっただけでしよう？」

そして他者の接近に気づかないから余計にタチが悪い。

「部屋の設営は完了、料理はスプリングフィールドとG36達が用意してくれたからいつでも始められるわよ」

「分かった。俺もすぐに行く」

「待ちなさい、まさかそんなひどい顔で参加する気？」

「なんだ…たしかに俺は整った顔立ちじゃないが…、なにもそんな…」

俺だつてイケメンに産まれたかったよちくしょう。F A Lは俺のことが嫌いなのか？彼女の気に触るようなことはしてないはずだが……。

「はあ…違うわよ。その疲れ果ててやつれた顔であの子たちに逢いに行くのかつて言ってるの。ほら、こつち来なさい」

「え？あ…」

するとF A Lは俺の腕を引っ張り、だらしなく乱れた俺の服を整えてくれた。

「ネクタイも歪んでるわよ…。あなたスタイルは良いし顔もそこまで悪くないんだから、もつとシャキツとしなさい」

「あ…ああ」

近い…F A Lをこんな近くで見るのは初めてだ。彼女の服装のせいもあるが、慣れない距離感から目のやり場に困ってしまう。

「……」

「…F A L？」

突然F A Lの手が止まり、不思議に思った俺は声を掛けてみると…  
「なっ…!？」

F A Lが俺の背中に腕を回し抱きついてきた。思いがけない大胆な行動に頭が真っ白になった。なにか声をかけようにも言葉を失ってしまう。

「ふあ…F A L!?!なにを…」

「…指揮官、感謝してるわ。私たちのためにここまでしてくれて……」  
「！」

耳元で囁かれたのは感謝の言葉。普段のF A Lからは聞くことのできない暖かい言葉だった。

「いつも…ありがとう……」

そう言うと、ギョツと俺を抱きしめる力が少し強くなった。

「F A L…」

「……」

「…少し酒くさいぞ、さてはワインを飲んだな」

「軽く味見をただけよ、別に酔っ払ってなんかいないわ」

「俺には酔った勢いに任せているようにしか見えないんだが…。だいたいお前はこういうことをするようなタイプじゃないだろ」

「…指揮官、野暮なことをいう男は嫌われるわよ。本当に」  
「分かったよ…」

戦術人形が酒を飲むところも変わるもんなのか。もちろん個体差はあるだろうが。しかしFALは他の人形と違って俺に媚びた態度を取ることもせず、FiveSevenと皮肉を言い合ったり建前を使うことなく本音で接してくるような性格だ。

そんな彼女が少し酒を飲んだだけでかなり柔らかい性格になっている。今だって俺の頭を撫でているんだぞ。やだなにこれすごい落ち着く。

「ふふっ、どう？少しは仕事の疲れが癒されたかしら？」

こいつ本当にFALなのか？間違ってスプリングフィールドのメンタルがインストールされてるのでは…なんて言ったらフェレットに鼻つままれそうだな…言わないでおこう。実際だいぶ楽になつたし。

「そのためにこんなことを？」

「さあね。さて、指揮官の顔色も良くなったことだし私は先に行くわ。あまり皆を待たせないですよ？」

そう言うとFALは部屋から出て行った。

「まったく…あいつは…」

普段からああいう取っ付きやすい性格してたら可愛げがあるんだがな。まあ普段の方がアイツらしきもあるが。

—  
—  
—

「このパスタ美味しい…、さすがはスプリングフィールドね」

「お口に合ったようだなにより♪よかったらわーちゃんも今度一緒に作りましよう？」

「そうね…あいつに作ってあげたら喜ぶかな…」

「料理もだけどお酒の種類もすごいわねー…」

「45姉!なに飲んでるの?」

「カルーア・ミルクよ、ナインも飲む?」

「いいの?ありがとう!」

「……まじゆい…」ダバーツ

「ふふっ…ナインにお酒は少し早かったかもね?」

全ての俺の人形たちが帰還し、ついにパーティーが始まった。鉄血との戦いで忙しい日々が続き、久々にパアツと弾ける機会が出来て皆喜んでくれている。特に作戦を終えて戻った者にとっては素晴らしいサプライズになったようだ。スコーピオン、火炎瓶はしまつてこい。

と言っても俺がしたのは会場と酒の用意だけで、あとはほとんどG36達がやってくれたんだがな。感謝。

「ご主人様、焼きたてのソーセージをお持ちしました。」

噂をすればなんとやら、G36が料理と飲み物を持ってやってきた。ちょうど欲しいと思ったタイミングで持ってきてくれるあたり、彼女の気配りは完璧といえるだろう。

「お、ありがとう。……美味しい、やっぱりG36の料理は最高だな」

「ご主人様の好みを把握するのはメイドの務めです」

だがこの場は彼女たち戦術人形を労うために俺が用意したパーティーだ。仕事や戦闘のことは忘れて羽を伸ばしてほしい。それはG36も例外ではない。

「ですが…その…じつとしてるのは……」

そういえばなにもしてないのが落ち着かないってウエディング撮影の時に言ってたな…。彼女に休めと言っても難しいか。

「あー…俺のことは気にしないでいいからさ。ほかの人形と談笑したり、酒の味を楽しんだり、楽にしてくれよ。お前ばかり働かせるのは俺が嫌なんだ」

「ご主人様がそう言うなら…かしこまりました」

そう言つてG36は一礼して去っていった。その背中はどこか寂

しそうな哀愁が漂っていたが、もうちよつと上手い言い方をすればよかつたのだろう。しかし俺にとつては無理難題なのだ。

「もつと気を使ってあげなさいよ、G36が不憫じゃない」

「45、見てたのか」

「まさかあれがG36の本音だと本気で思ってる?」

「え?違うの?」

「…はあー……」

そんなため息ついて呆れられても……。

「あんなこと言われたら指揮官に近づけないでしょ。彼女だつて本当は指揮官と一緒に過ごしたかつたはずよ」

「あー…なるほど……」

「指揮官のことだからもしG36がまたやってきても、『気を使うなつていったら、俺のことは放つていい』って悪意のない追い払い方しそうね」

「……」

45に指摘されてはじめて気がついた。俺はなんて酷いことをしてしまつたんだろうか。G36が普段から身近にいてくれたお陰で余計な気遣いをしてしまった。

「後で謝つて一緒に飲んであげること、分かつた?」

「ああ…分かつたよ」

「でも今は」

「ん……?」

そう45が言いかけた途端、45が俺の腕に抱きついて寄り添ってきた。

「私に付き合つてよね、しきかん♪」

「…なんだ?もう酔つてるのか?」

いつも通り…といえはそうではあるが今日の45は普段よりも大胆というか積極的というか……近い。あと顔が赤い。こいつは簡単に酔うような奴ではないはずだが。

「私はお酒に強いのか知ってるでしょ?どこかのお子様と違ってね」  
「お子様で悪かつたな」

「それで、その大きなお子様はなに飲んでるの？」

「…カシオレ」

「んん？カシオレ？それってただのジュースじゃない？」

「こいつ…自分が酒に強いからって……。」

「いいだろ、ただ単に好きなんだよ」

「もう、しきかんつたらほんと可愛い♪」

くすくす笑いながら俺の頭を撫でだした。くそう、めっちゃめっちゃ悔しい。

「ええい恥ずかしいからやめろ。ていうかやつぱりお前酔ってるだろ…」

2人きりの時ならともかく、こういう周囲にたくさん人がいる時に俺をからかうことはまずない。やはり今の45はいつもと様子が違う。こいつ本当に飲んだんだ…。あ、おい抱きつくな。離れろ。

「あ、45姉！探したよー。指揮官のところにいたんだ。…：…なんで抱き合ってるの…」

「ナイン、いいところに。ひとまずこいつを引き剥がすの手伝ってくれないか」

「んん…ないん…？」

「あちやー、だいぶ酔っちゃってるね…やっぱ飲ませるのはマズかったかな…」

「45になに飲ませたんだ…」

「の…飲ませたのは私じゃないよ!?最初は45姉はカルーア・ミルク飲んでたんだけど、途中で416とM16の勝負に巻き込まれていんなお酒を…」

416?まさかあいつに酒を…!?

「ごめんーちゃんと416が飲まないように注意してたんだけど気づいたら飲んじやってた…：ひゃあっ!?!」

「ナイン…見つけたわよ…一緒にM16への雪辱を果たすのよ…：ほらあなたも飲みなさい!」

背後からナインの肩を強く掴んだのは416。案の定かなり出来上がってしまったている。手に持つてるのは…：なんかかなり強そうな

お酒だな…。

「ちよつ…！無理だよ！私お酒飲めないもん！指揮官助けてえ…」

「おい416、飲みすぎだぞ…」

「指揮官…このお酒は私と45によって手に入ったようなものですよね…？」

「あ？ああ、その通りだが…」

「なのに…なのにあいつはなにも知らずに好きなだけ飲んで…!!私の手柄なのに!!!」

おお…これはもしかするともう手遅れなのでは…。

「指揮官もほら！一緒に飲んであいつに復讐しましょう!!」

「いや俺も酒飲めないし…てかそれグラスに入ってるのなに？」

「イソジンよ」

「頭バグってんのか」

駄目だこいつ…早くなんとかしないと…。

「これを飲み干すことが出来れば私もあいつに勝てる…ふふ…ふふふ…。」

「あ、おい…！」

416が不気味な笑いをしたところで意識を失い倒れてしまう。が、間一髪で受け止めることに成功し、地面に頭を打ち付けずに済んだ。ひとまずソファーまで運ぶか…。

「ナイン、416と45を運ぶの手伝ってくれ」

「あ…うん。これ以上暴れなくてよかったね…」

「あ！指揮官とナイン、ちようどいいところに！スプリングフィールドに教えてもらってチキン作ったんだけど、試しに食べてくれない？」

酔い潰れた人形を運ぶ俺たちの前に現れたのはK2。こいつは…まあ酒に強いイメージがあるな。

「ちよつと待ってくれ…ひとまずこいつらを…よし。で？チキンだって？」

「おおー、美味しそう！K2って料理できたんだね」

たしかにかなり美味そうだ。そういえばずっと仕事に夢中だった

からガッツリ食えてなかったな。

「いただきますーす」

「辛っ!!!」

なにこれかつら!!食えたもんじゃねえっ!!そういやこいつは重度で末期の辛いものの好きだっつてことを忘れてた!!

「隠し味はなんと言っても唐辛子!こないだ後方支援の時に見つけたの!」

「全然隠れてねえよ辛い!!」

「ちよつと無理無理お水お水!」

あまりの辛さに耐えかねたナインが近くにあつた透明な液体の入ったグラスを手に取った。

「あ、それお水じゃなくて焼酎…」

K2が指摘するよりも早く、ナインは一気に飲み干した。そしてお酒が飲めない彼女は口に含んだ焼酎をK2に目掛けて吹き出してしまった。

「ああああ目があああああっ!!!」

「口がああああああっ!!!」

地面をゴロゴロとのたうち回り、悶え苦しんでいる2人。

「地獄絵図だ……」

「なんだあ?楽しそうなことしてんな」

酒瓶を片手にやってきたのはM16とトンプソン。グリフィン二大酒豪の2人である。

「あ、M16。お前416に酒をやるなってあれほど言っただろ」

「私が飲ませたんじゃやない、あいつが勝手に飲んだんだよ。私は一緒に酒が飲めれば誰でもいいんだ」

「あれはかなり面白かったな。ボスがあの場にいなかったのは残念だ」

「酒くさっ…飲みすぎだろ…」

「こんなに酒が飲めるのは久々だからな。たまにはいいじゃないか」

「お前らに関しては何しよつちゆう飲んでるイメージしかないんですがそれは」

保護者のM4はどこだ？はやくこいつらを引き取ってほしいんだが。

「M4ならあそこだ」

M16が指し示す方を見てみるとそこにはソファアームに座ったM4とAR-15の姿が。

「M4、あの二人をなんとかしてくれ…」

「今日も飲んだくれの相手…？クソツツ…」

「M4さん？」

どうやらM4もかなり酔っているようだ。普段あまり飲まなそうな彼女がこんなに酔うなんて珍しい。てか口悪いな…。

仕方ないのもう1人の保護者に声をかける。

「AR-15、動けるか？M16たちを…」

「ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ…」

「……」

まともなのは僕だけか。

辺りを見渡すと人形達は酒に潰れて寝ているか、酔って馬鹿みたいに騒いでいるかでまともなのはほとんど残っていない。

「そうだ、スプリングフィールドなら…」

彼女は酒の嗜み方を知っている。飲みすぎて潰れたりほしくないはずだ。カオスなこの場を落ち着かせるのを手伝ってもらおう。

と思っていたのだが…。

「スプリングフィールド、大丈夫？」

「ええ…ちよつと部屋で休んできます…」

「ほら…肩貸して上げるわ」

モシン・ナガンに支えられ、スプリングフィールドがちようど会場から出ていってしまった。心做しかモシン・ナガンの顔が犯罪者のそれだった気がするが、うん。気のせいだろう。

「スコープオンとUzi、なに作ってるの？」

「モロトフのカクテルだよ。Vectorも作る？」

「面白そうじゃない。私もやろうかしら」

「おい待てなにしてんだ」

出やがったな、放火魔3人組。しかもきつちり酒を飲んで酔っ払ってやがる。

「指揮官が火炎瓶は持つてくるなっていうから作ろうと…」

なんでこういう時だけ頭が働くんだ…。いいかスコープオン、危険物は持たず・作らず・持ち込ませずだ。覚えとけ。

「作っちゃダメなの?」

「ダメに決まってるんだろ」

ダメなんだ…(・ω・)とVectorがしよげているがそんな顔にしてもダメなものはダメです。片付けてきなさい。

しかしまずいな、本当にまともなやつがない。これはそろそろ自分自身の身も危険なのは…。ナインやM4みたいにひどい目にあいそうだ…。

「あの…ご主人様…」

「ん、G36。ちようどいいところ…につ!」

タイミングよく現れたG36。飲んだくれ達の処理を手伝ってもらおうとしたが、それは彼女によって阻まれた。まあ俺に抱きついてきたのだが、俺は今日だけで何回抱きつかれるんだ…多すぎだろ。

「G36さん!?なにをして…」

「ご主人様…無礼をお許しくください。でも…どうしても我慢できなくて…」

こいつ…酒に酔うとこうなるのか…。いや、普段から抑えていたのが酒の力で爆発したのかもしれない。だとしたら厄介…つてうわわわ!

「G36!落ち着け!一緒に飲むのは全然構わないが、俺を地面に押し倒す必要はないだろ!」

説明すると俺はG36に倒されて馬乗りされている。彼女は本当にあの厳格なG36なのか…?

「もう…悪いのはご主人様ですからね…?」

あつ…ちよつ!どこ触って…あつ…待つ…つよ!力つよ!?!戦術人形だから当然か!誰か助けてくれ!

「G36姉さん!?!なにをしているのですか…?」

「あ…G36C」

「……」

突然の実妹の登場で冷静になったのか、G36の動きが止まった。

「……」

「……」

「…えっと…」

「気まずすぎるだろ。」

—

—

—

翌日…

「ご…ご主人様、朝食の用意ができております…」

「ああ…ありがとうございます、すぐ行くよ」

「ではしちゅ…失礼致します」

「気まずい、気まずすぎる。」

昨日の件は記憶にあるようで、G36もかなり動揺している様子。それでも彼女は普段通りを装うとしているが全然できていない。さっきだって俺の制服と間違えてバスタオルを渡してきたのだ。なんかこつちが居た堪れない気持ちになる。

まあ別にこつちとしてはなにか罰を与えようとかそういう気はさらさらないのだが……。あとで落ち着いて話し合ってみよう…。



## 番外編 人生とは短篇話の連続である

【派閥争い】

「ナイン、何回言えば分かるんだ。結果はすでに出てると言っただろ」  
「指揮官こそ現実を見てよ！結果だけがすべてじゃないでしょ？」

「これは決定事項だ。いいか、俺たちはチームで動いてる。個人の勝手な主義主張を持ち込むんじゃない」

「っ……」

「分かったら持ち場に戻れ。この後キャリコたちと哨戒任務のはずだろ」

「……」

ナインはうつむいたまま、拳を固く握りしめている。

そこへナインと同じ班に所属するキャリコとRFBが執務室へやってきた。

「指揮官、失礼します。ナインを見かけ…あ、ここにいたんだ。探したわよ」

「ナインどうしたの？」

「ちようどいい所に来た。ナインをここから連れ出してくれ」

「あ、はい」

「……」

「ナイン、ほら行こう。……ナイン？」

「2人は…2人は私の味方だよね!?ねっ!?」

「ふえっ!?な…なにが？」

「ナイン、見苦しいぞ…」

「なに？ゲームの話…じゃあないよね……」

「指揮官、チームだったらみんなの意見も聞くべきだよね？」

「…まあいい、なら2人にも聞こうか」

「はあ…」

「(なにこの固い雰囲気……)」

「……2人は」

「……」

「きのこの山とたけのこの里、どっち派？」

「……」

「(そんなことかよ……)」

「まあ知っているとは思いますがたけのこの方が売上は上だし、人気投票でもたけのこが圧勝しているんだがな……」

「数字がすべてじゃないもん！だいたい、今の『たけのこ』が売れているのは最初の『きのこの山』が人気だったお陰なんだよ!？」

程度の低い言い争いをする同僚と上司を前に、キャリコとRFBは半ば呆れつつも答えを出した。

「うーん、私はきのこ派かな。ゲームしながら食べても指が汚れないから楽なんだよねー」

「なんだと……」

「わーい！さすがRFB！」

「あとスナックのサクサク感がいいんだよね！」

「ぐぬぬ……」  
喜びのあまりナインはRFBに抱きつき、きのこの魅力を分かちあっていた。指揮官はその姿を忌まわしい目で見ていることしかできな

くない。  
だがたけのこ派の彼が敗北したとは決まったわけではない。最後の1人、キャリコが出した答えは……

「はあ、まったく呆れるわ……」

「きのこなんてただの欠陥品よ、必ずと言っていいほどチョコとスナックが分裂しちゃってるのがあるじゃない。チョコはともかく、スナックだけ食べても美味しくないわ」

「でもたけのこは違う、チョコとクッキーが一体化してからそんなことはないし。それにチョコの量はたけのこの方が多いしね」

同志の登場、愛するたけのこの魅力を上手く代弁してくれたキャリ

「ここに、指揮官は惜しめない拍手を送った。

「パーフェクトだ、ウォルター」

「感謝の極み」

「むむむ……」

「2対2だね……」

戦いは依然膠着状態。睨み合う4人の元へ新たな人物が現れる。

「話は聞かせてもらった!」

「!？」

「その声は……」

「どうも、FBI捜査官のジヨディ・スターリングです」↑社員証を掲げるスコープピオン

「湾岸警察署の青島です」↑光学迷彩マントを羽織ったM14

「何しに来たバカ共」

「なんか楽しそうだったからつい」

「みんなは『きのこの山派』か『たけのこの里派』で分かれちゃってるんだよね?」

M14は腕を組み、真面目な表情でナインに語りかけた。

「うん、スコープピオンとM14は?絶対きのこ派だよね!」

食い気味にM14に詰めよるナインとRFB。指揮官とキヤリコは平静を装いつつ、内心では2人の返答に耳を傾けていた。

『きのこ』も『たけのこ』もどっちも美味しいし、どっちも好きよ。でも、どちらかを選ばなければならぬというなら……」

「「「……」」」

M14が出した答えは……

「その点トツポってすごいよね、最後までチョコたっぷりだもん」

「…は?」

まさかの第3勢力の登場である。

「M14!それはないよお!どっちかで答えてよお!!」

「……じゃあスコープピオンは?『きのこ』と『たけのこ』どっち派だ?」

「私はアルフォートかなー」

「ほんとに何しに来たんだお前ら」

【派閥争い2】

「M14も言ってたけど、結局は自分の好きなのを食べればいいんだよね…」

『きこの派』と『たけのこ派』の戦いは話のネタというかパフォーマンスみたいなものだからな」

「だよね。45姉は何食べてるの？」

「パイの実よ、ナインも食べる？」

「ありがとう！」

「……」

「……ペチャパイの実（ボソツ）」

「……」

「……指揮官……」

「……ん？」

フンッ！

ゴキイツ!!

グアアアアアアアアアアツツ…

【どこまでリアル？】

執務室にて……

書類作業中の指揮官と、それを手伝う副官のHK416

「……」カリカリ

「……」カタカタ

「……疲れたな」

「こら、サボらないで手を動かさなさい」

「そうはいっても3時間ぶっ続けだぞ…右手が壊死しそう……」

『明日やろう』って後回しにして溜め込んでた指揮官が悪いんでしょ。自業自得よ」

「……すいません…」

「はあ…しょうがないわね、少しだけよ。私もちよつと疲れたし」

「…戦術人形も疲れるんだな」

「そりゃあ…人間ほどじゃないけど疲れたりするわよ。コーヒーはミルクだけでいい？」

「うん、ありがとう…。そういやこの前バルソクと通信してたんだけど、寝不足だったらしくて頻繁にあくびしててさ」

「作戦中にあくびとはいいい度胸ね、どこかの寝ぼすけよりはマシだけど。…それで？」

「いや、戦術人形にも寝不足っていう概念があるんだ…って思って。しかもあくびまでするんだ」

「人形にとつても睡眠は大事よ、毎日寝る必要はないけど睡眠中にシステムチェックしたりしてるの」

「パソコンみたいだな…。ってことはあくびにも何か意味あるのか」  
「別に？特に意味はないわ」

「え、じゃあなんで…」

「戦術人形は人間の生活スタイルに合わせて作られたから…まあ人間の真似ごとね。お陰で無駄な機能が多いわ…」

「ふーん…例えば？」

「そうね…例えばお酒を飲んだら酔ってしまおうし」

「ああ…（説得力あるな）」

「その…トイレにも行かなきゃいけないし…」

「あー、たしかに自律人形はそうだな。工業用とか軍用の人形はそんなことないけど」

「エネルギーの供給源に食事が含まれてるからしょうがないわ」

「…その…気を悪くしたらすまないんだが…人間と同じようにするのか…？」

「……指揮官」

「すまん！気になったただけなんだ！聞かなかったことにしてくれ…」

「……まったく」

「でも人形はいくら食っても太らないんだよな。それは羨ましいかも

しれん」

「たしかに人間からしたらそうね」

「歳も取らないし」

「そうね」

「……」

「……?」

「子供の頃に戻りたい…仕事したくない…昼まで寝て夜まで遊びたい……」

「し…指揮官?」

「ちくしょう!輝いていたあの頃に!夢を抱いていたあの頃に戻りたい!!こんな残業休日出勤当たり前の仕事なんてクソ喰らえじゃあああっ!!」ガツシヤーン

「ちよつと…!なにをして…!こら!!」ギユツ

「……」

「……落ち着いた?」

「……うん」

「…はあ…指揮官がいつも頑張ってくれてるのは分かってるわ…。それこそ寝る間を惜しんで私たちのために……」

「…うん」

「でもね、無理はしちやダメ。指揮官は人間なんだから。しんどい時はしんどいって言いなさい」

「……うん」

「私でよければいつでも助けてあげるから…お願いだから自暴自棄にならないで」

「…ん…ありがとな……」

「ほら、休憩はおしまい。さっさと終わらせるわよ」

「ああ…」

「……えーつと…これはもう済ませたやつで……」

「……」

「…指揮官?」

「…いや、たしかに昔に戻りたいとは思うけど、みんながいる今も悪く

ないなって…」

「指揮官…」

「たしかに仕事は嫌だけど、416たちに出会わせてくれたことには感謝だな……。…本当に…ありがとう……。…」

「そうね…私も指揮官に会えてよかったわ」

「さてと、さっさと終わらせて飯でも食いに行こうか」

「ええ、ところでこの書類の提出期限っていつまでなの？」

「……4時間後」

「……」

「は？」

「それかなりヤバいじゃないの！なにしてんのよ!!」

「……イケるイケる…」 スツ…

「何言ってるの！スマホは置いて！早く終わらせなさい!!」

「仕事中にグリフィンのパソコンでエロサイトを閲覧したことがバレた指揮官」

情報部「閲覧履歴は全部記録されています。業務に関係ないことは調べないように」

指揮官「……ウス…」

【どうでもよくなってしまったヘリアンさん】

「(はあ…昨日の合コンもダメだった……)」

「(連絡先を交換できたと思ったら返信は来ないし…だったら最初から交換するなよこのピーパー 【自主規制】 が……)」

「ん…？あれは……」

「近いって…もう少し離れろ」

「いいじゃない、やっと後方支援から帰ってこれたんだし♪」

「(指揮官とFive-sevenか…仕事中にイチャつきやがって

……)」

「あつ、ヘリアンさん。お疲れ様です」

「お疲れ様です」

「君たちは随分仲がいいようだな。だが時と場所を弁えるように」

「すみません…」

「はあ…まったく…」

「?ヘリアンさん、どうかなさいましたか?」

「きつとまた合コンで負けたのよ…いつものことね…(ボソツ)」

「聞　こ　え　て　い　る　ぞ　　F i v e | s e v e

N」

「ヒエツ…」

「あー…大丈夫ですって、また次頑張ればいいんですよ」

「その優しさが逆にキツいんだが…。指揮官はいいな…周りにいるのが異性ばかりで…」

「ほとんど人形ですけどね」

「私も指揮官になろうかな…」

「(ええ…)」

「男性型の人形を導入するようクルーガーさんに上申して…あと男性の職員も増やすように人事課に…」

「(本当に行動に移しそうだな…)」

「んー、ヘリアンさんが指揮官だとなんかコミュニケーション取りづらそうね…なんかお堅いし」

「グサツ

「(F i v e | s e v e N!?)」

「ていうか、合コンで勝てないのってそれが原因なんじゃ…」

「グサグサツ

「(やめて!ヘリアンさんのライフはもうOよ!!)」

「やっぱりヘリアンさんは指揮官よりも代行官の方が向いていると思いますよ♪指揮官もそう思うでしょ?」

「うえっ!?まあ…そうだな…」

「ふふ…ふふふふ…」

「へ…ヘリアンさん…?」

「完璧な計画を思いついた」

「??」

「つまり私が戦術人形になって指揮官の誰かの配下になれば完璧じゃないか!?!」

「(駄目だ…考えることを放棄している…:~)」

「あちゃー…」

「そうと決まればI. O. P. 社に行ってペルシカと相談だ!」

「ちよつ…ヘリアンさん!!落ち着いて下さい!! (誰かこの人もらつてあげてっ!~)」

「(私からみてもヘリアンさんはないわね…:~)」

番外編 人生とは短篇話の連続である

#13 言わなければ分からない たと言ったとしても

グリフィンには年に3回、各支部・基地の戦術指揮官と上級代行官などが出席する定例報告会がある。

内容としては鉄血との戦闘記録や被害報告をしたり、監視対象の過激派人類人権団体及び反戦団体調査報告など……他にもたくさんあるがここでは割愛させていただこう。とどのつまりは超時間拘束されて真面目な長話を延々と聞かされる場なのだ。

まあ聞かされるだけならいいのだが…。

(ああー…ねっむい……)

こう話を聞くだけの環境にいると訪れるのが睡魔である。身体を軽く動かすことができればいいのだが、厳かな雰囲気ので背伸びすることもできない。部屋は空調によって心地よい温度に保たれ、どうにも眠気に抗えない。

よく国会議員が議会討論中に居眠りしていて国民から「税金泥棒だ！」なんて非難されているが、その国民たちの大多数は学生時代に授業中居眠りをしていただろう。学費を負担する親から見ればたまったものではない。

そもそも睡眠というのは人間の本能であり、なにを基準にしたのか分からないマナーや風潮、くだらないルールで縛ることがおかしいのだ。寝たい時に寝て、食べたい時に食べる。そんなニートに俺はなりたい。ダメかな。ダメか。ダメだな。

「——以上です、今後も監視の強化を図っていきます」

「ご苦勞。続いてS12地区、報告を」

「はい、定期偵察によって観測できた鉄血の数は——」

まあ座ってるだけで給料が貰えると考えればいいか…。この仕事、待遇は褒められたものではないが、環境は悪くないからな。

…おっと、そろそろ終わりそうだな。やっと帰れる…。

「以上で報告会を終了する。最後に統合本部直属の代行官より戦術指

「揮官各位へ連絡事項がある」

……?なんだ。

「フアシリテーターがそう言うのと小太りでいけ好かない顔をした代行官が立ち上がり口を開いた。

「戦術指揮官に求められる素質は高い指揮能力や優れた頭脳だけではなく、コミュニケーション能力も重要だということは君たちも知っているだろう。戦術人形と信頼関係を築くことは作戦能力の向上にも繋がる」

「よって、指揮官各位には定期的に隷下の人形と面談を行い、彼女達と真摯に話し合える場を設けることを命じる」

また面倒くさそうなことを…。

「面談の内容は映像として記録し、期日までに統合本部へ提出するよ。うに。解散」

最後にヘリアンさんがそう告げると会議室内の照明が灯され、束縛から解放された参加者たちが続々とその場を後にする。会議中の静寂からうって変わり、各々の他愛もない会話や落ち着きのない物音で喧騒に包まれた。

俺は混雑している出入り口を眺め、少し時間が経ってから部屋を出ることにした。

軽い背伸びをして疲れた目を擦り、スマホで次のスケジュールを確認する。今のところ入っている今日の予定は戦術人形の装備品メーカーであるEOT社とAC社との打ち合わせのみだ。

まだ時間もあるし社員食堂に寄って昼飯済ませるかなあ…とポーツとしながら耽っていると

(面談ねえ……)

ふと、小太りの代行官が言っていたことを思い出した。やだなんで私あんなヤツのことを思い出したの?これって恋?

冗談はさておき、グリフィンは民間軍事会社だが元軍人や特殊部隊出身の人間はそう多くない。入社した時に軍事戦術訓練を受け武器の扱いや戦闘を学ぶが、元々は一般人である。指揮官の場合、求められているのは戦闘能力ではなく、戦術人形との高いコミュニケーション

ン能力だ。

しかし俺は他人と関わるのが苦手だ。知らない人と話すのは緊張するし、顔見知り相手でうまく喋れない時もある。できれば誰とも会話したくないまでである。

こんな俺でも厳しいことで有名(カリリーナ談)なグリフィンの選抜適正試験をパスできたのだから謎だ。ホントどうやって合格したんだろう…。

(信頼関係か…)

ときどき考えてしまうことがある。

もし俺が指揮官の立場を失い、彼女たちの指揮権限を別の指揮官へ譲渡されたとして、彼女たちは俺にどう接するようになるのだろうか。

何事もなく今まで通り接してくれる？よそよそしく他人行儀になる？

考え方を変えよう。機密情報保持などの観点から彼女たちの記憶データに何らかの書き換えが行われるのは当然だろう。コンピュータと同じで記録容量確保のため、不要と判断されたり優先順位の低い記憶は人形自身の意思に関係なく削除される。その時俺に関する記憶も消されるのだろうか。新しい指揮官との思い出によって“上書き”される？

今までの思い出や楽しかった出来事も無かったことになるのか。

こんな小難しい理屈を人形に求めていること自体間違っているのは分かっている。戦術人形はあくまで会社の備品だし、俺はそんな彼女たちに勝手な理想を押し付けている。

そんな自分が、俺は嫌いだ。

「相変わらず貴官は覇気がないな、目が死んでいるぞ」

「…ヘリアンさん」

「やる気がない・生気がない・頼りない、この三拍子が揃えている貴官がなぜこの仕事をこなせているか理解に苦しむ…」

「相応の結果は出しているじゃないですか。むしろ感謝してほしいくらいです」

「ああ…先日の合同模擬演習で貴官は上位11%という記録をたたき出したんだったな。だからこそ余計にタチが悪い」

ひどい物言いだな…。だがエリートのアR小隊だけでなく、非正規の404小隊の指揮権まで俺に委ねているあたり、どうやら俺は上層部に気に入られているようだ。

入社したての頃、よそと比べて暇そうだなと今の支部に赴任したわけだが、まさか最前線の激戦区になるなんて…。まあそのぶん活躍できたわけなんだが。

「おお、そういえば新人のくせに比較的治安が安定していて仕事の量が少ない管轄区域を初の着任先に選ぶなどと舐め腐っていた時もあつたな」

えっ、俺の心読まれてるの…？怖えよ…。

「いやあ…ほら、やはり最初は低いハードルから挑戦していくべきなんですよ。そこから段々ハードルを高くして少しずつ成長し…」

「よく言う…。君はハードルを飛び越えるのではなく、くぐるタイプだろう」

呆れたと言わんばかりにヘリアンさんはため息をついた。だがすぐにその表情が変わり、優しい眼差しを向けた。

「だが、そんな君だからこそ人形たちは惹かれるんだろうな」

「…どういう意味ですか」

「君は見かけによらず優しい心の持ち主だ、そして誰よりも彼女達のことを見ている」

「買いかぶりすぎです。第一僕の戦術はあまり褒められたものではあ

りませんよ。よくFALなどに怒られ…」

「君の戦い方を見れば分かる」

ヘリアンさんはまっすぐな表情でそう告げた。

「ふふつ、まあ確かに少々無茶をすることもあるがな。それは君が彼女達を信頼しているが故だ」

「そして人形たちも君の気持ちに真摯に応えようと戦っている」

「だからこそどんな困難な状況に陥っても決して諦めず、窮地を脱することが出来る。お互い信頼しあえている証だよ」

代行官としては珍しく部下のことをよく見てくれている人だ。ほんと、なんで男ができないんだろうな…。誰かもらってやれよ、俺がもらっちゃうよ？

「…単純に人形が高性能で多少無理ができるだけだと思いますけどね」

「そうか？私はそうは思わないがな」

「…ヘリアンさん、聞きたいことがあるのですが」

「なんだね？」

「もしも僕が人形の指揮権限を失って別の人間が指揮官になった場合、彼女達の記憶にある僕はどうなるんですか？」

「…ほう、君がそんなことを聞くとはな」

「ちよつと気になっただけですよ、別にどうってことはないです」

「戦術人形の記憶管理については君も知っているだろう」

「……」

「…丁度いい機会だ、彼女達と改めて“話し合い”を試してみたまえ」

「もしかしたら君自身が探していた答えも見つかるかもしれない」

そう告げるとヘリアンさんは俺の肩をポンと叩き、会議室から去っていった。

探している答え、自分でもそれが何なのか分からない。俺はいつた

いなにを求めているんだろう。どんな答えなら安心するのだろうか。

俺は……

「指揮官、部隊長の招集と撮影機材の準備が完了しましたよ」

「ありがとうございます。じゃあ第一部隊から順に始めよう」

「分かりました」

ROに指示を出し、俺は軽く身だしなみを整えた。

今日は統合本部からの無茶ぶり課題である人形たちとの面談の日。試験導入ということもあってまずは部隊長のみ、順次全人形にも行う予定だ。まあ後方支援などで出払っている部隊がいるから、今日のところは基地に待機中の隊長5名だけだな。

「ではFAL、入ってください」

「指揮官、失礼するわよ」

まずは第一部隊隊長のFAL。初期メンバーの1人なんだがこいつとこんな堅苦しいことをするのはなんか不思議な気分だな。

「貴方と面談だなんて変な感じね…しかもカメラで撮られているなんて」

「同感だ」

お互いに苦笑しながらFALは椅子に腰掛けた。

「さて、お前とは長い付き合いになるよな。出会った頃が懐かしい」

「たしか指揮官がここに着任してからまだ1ヶ月も経ってなかったわよね？あの時は何度痛い目にあつたことかしら……」

「はは…それは忘れてくれよ……」

新人の時はうまく人形を指揮したり戦術的に動くことができず、事ある毎に人形達に重傷を負わせてしまっていた。特にFALは所謂エリート気質で（実際エリートではあるのだが）、よく手痛い言葉を受けていた。まあARの人形を重傷にしようって大概だよな…。

「あの頃のセンスは本当に最悪だったわね、今の子たちが見たら面白い反応をしそうだわ」

「にもかかわらずよく俺にきてくれたな…無能と判断されて見捨てられてもおかしくなかったと思うんだが」

「……まあ他の人ならそうかもしれないけど…知ってるでしょ？わたしは見間違いないの。最初はある体たらくだったけど、指揮官をひと目見た時から私たちを導いてくれるって信じてたわよ」

そんなこと思ってくれていたのか…。年甲斐もなくウルつときてしまった…。( ; ω ; )

FALは口調こそ厳しいが周りのことをよく見ていて面倒みがいい。当時戦果を挙げられない俺に助言してくれたり、よく戦闘の勉強に付き合ってくれた。お陰で今では合同模擬演習で上位11%の記録を残すほどまで成長した。

彼女がいなければ、俺は指揮官としてここまで名声を博していなかっただろう。それどころかハマをして最悪命を落としていたかもしれない。

「FALと会ってなかったらって考えると怖いな…ほんと感謝してるよ」

「ふふっ…そうね、今の貴方は1人じゃないんだもの」

ここに入った当初の思い出話で盛り上がる。こいつとこんな風に話したのは久しぶりかもしれない。

「なあ、ひとつ聞きたいんだが」

「なに？」

ついに俺は本当に聞きたかったこと、彼女たちの本意を問い掛け

た。

もしも俺がお前らの指揮官を外されたらどうする？

「…はあ？なによ急に……」

「まあ…そうね、不本意だけど上からの命令なら従うしかないんじゃないかしら」

おおかた予想通りだな…FALは仕事に忠実だからすんなりと受け入れるだろう。”プロフェッショナル”である彼女らしいといえる。

「命令だもの、指揮官が変わっても上手くやるわよ。…：貴方以上に私の能力を引き出してくれる指揮官なんていないと思うけど」

「…あなたのことは忘れないわ」

「…：そうか、FALらしいな」

「どういう意味なのか気になるわね。褒めているの？それとも貶しているのかしら」

「もちろん褒めてるさ。…さて、そろそろ終わりにしよう」

「あら、もういいの？」

「十分だ、上が求めているのはこういうもんらしい。真意は分からないがな」

「…貴方も大変ね……」

「お互い様だ、今日はありがとな」

俺は笑顔で彼女に手を振り、統合本部に提出する書類に印をつけた。

…：ちゃんと笑えてたかな…。

「RO、終わったわよ」

「分かりました。次はM4よ、入って」

「ええ」

ROから指示を受けたM4は少し緊張した表情で部屋へ入っていった。

「……答えを間違えたかしら……」

「？FAL、どうかしましたか？」

「…なんでもないわ。RO、私の番はこれで終わり？」

「ええ、今日のところは自由に過ごしていただいて構いません」

「そう。じゃあ失礼するわ」

「お疲れさまでした」

FALは待合席で待機中のトンプソンたちに手を振り、その場を後にした。静かな廊下に彼女のヒールの音が高らかに響く。

やがて音が小さくなり、FALの姿が見えなくなったことを確認すると

「…FAL…なにかあったんでしょっか…？」

M1014は面談を終えたFALの様子に違和感を覚え、両隣に座っているトンプソンとUMP45に話しかけた。

「さあな、順番が来れば私たちにも分かるだろう」

「……」

「でもよかったです、指揮官には私たちAR小隊を拾ってくれた恩が

ありますから」

「恩なんて大袈裟な…大層なことをしたつもりはないよ」

FALの時と同様M4とも昔話で盛り上がっていた。うん、やっぱりこの子はいいい子だ……。

「M4、もしある日突然俺が君たちの指揮官じゃなくなったらどうする？」

「えっ……？」

「もしもの話だよ。だが君の本心を知りたい、真面目に答えてくれ」

思いがけない問いかけにM4は一瞬キョトンとしたが、すぐにハツとして考え込んだ。

「…それは指揮官が異動になった際の話ですか？それとも…亡くなった場合でしょうか？」

「そうだな…前者だったらどうする？」

「でしたら、私も異動を上申します。私の指揮官は指揮官だけです」  
なるほど。

たしかに俺が異動になっても特別な人形のM4ならばペルシカさん等のコネを使って無理やり俺の隷下に居続けることもできなくなるだろう。

「嬉しいことを言ってくれるな、じゃあ俺がこの仕事をクビになっ  
ていなくなったら？」

「それは……」

しばらくの間沈黙が続く。ちよつと可哀想な気もするが俺は彼女たちの意志を知りたいのだ。

「分かりません…。もしそうだったとしても、私はできる限りそうならないように尽くします」

「たぶん他の人形もみんなそうすると思います。自分たちでできる限りの努力をして…それで……」

それでも駄目だったら？——

と聞きたいところだがM4をいじめるのはここら辺にしておこう。

だってちよつと泣きそうだもん。

「ありがとう、M4の気持ちがよく分かったよ。こんなことを聞いて悪かった」

「い…いえ…すみません…」

「今日はこれで終わりだ。あとはゆつくりしてくれ」

「はい…失礼します」

M4はペコリとお辞儀をし、部屋を去っていった。

「そういえばAR小隊の記憶って消えるのかな…」

バックアップの利かないAR小隊たち。恐らく他の人形たちとは記憶の扱い方が違うだろう。

もし人形たちに記憶処理が施されてもAR小隊なら俺のことはずっと覚えててくれそうだな…。

---

「はははっ！なるほどなあ！そういうことか！」

「なっ…なんだよ…」

「ボスも可愛いところあるじゃないか。なんだ？私たちに忘れられるのが怖いのか？」

「ぐっ…」

続いて第十部隊長のトンプソン、全隊のなかで最も付き合いが長く、出会ったのはFALよりも少し前である。SMGのため新人指揮官の時はよく重傷にさせてしまい、全壊してバックアップから記憶を戻すことも少なくなかった。

そのためトンプソンをはじめSMGの人形たちからは嫌われ気味だったのだが、FALのお陰で指揮官として実力がつき、こいつも俺のことを認めてくれるようになった。

「お前は怖くないのか？俺のことや他の人形たちとの思い出が無かったことになっても…」

「人形だからな、そうなってしまおう覚悟は決めてる」

「もしかしたらすでにいくつか大切な記憶が消えているのかもな」  
盲点だった。

俺が知らなかっただけで、もしかしたら俺の元に来る前にも指揮官や仲間がいて、同じように大事な思い出があったのだろうか。

それは分からない。誰にも……。

「これいいか？」

「…1本だけだぞ」

廊下は禁煙のため待機中ずっと我慢していたのだろう。トンプソンはやっと吸えると言わんばかりに箱から1本タバコを取り出し、紅く綺麗な唇に挟んで火を灯した。

青白い煙がゆっくりと上っていく。

こいつってほんと美味そうに吸うよな…。

「そうだな…グリフィンの仕事は好きだが、こんなに好きにさせてくれるのはボスぐらいだろうからな。今の記憶があるうちに私もここを辞めるよ」

「本気で言ってるのか？」

「本気さ、ボスさえよければついていくぜ？他の奴らにも声をかければ何人かついてきそうだな」

こいつも嬉しいことを言ってくれるな、重苦しいことを考えていたが少し気が紛れた。

「ははっ！下手すりや全員来るんじゃないか？（笑）」

と、冗談交じりに言ったら真顔で「それはない」と一蹴された。悲しい。

---

「では指揮官さん！失礼します」

「おう。M590とSpitfireにも楽しみにしてるって言つと

いてくれ」

第四部隊長のM1014と面談を終え、残るところは1人のみとなった。

「えーっと最後は…こいつか…」

表向きは第三部隊の隊長、裏の顔は404小隊所属。UMP45だ。

厄介なのを最後にしちやっとな…、と考えつつペットボトルのドリンクを口に含んだ。

「しきかくん、会いに来ましたよ〜♪」

「!?…ゴホッ！ゲホッ！」

「きやつ！ちよつと…大丈夫？」

「ゴホッ…。ああ…」

急に現れた45に驚いてしまい、不覚にもドリンクでむせてしまった。カッコわる…。

「…あら？カメラは？」

「お前は404の人形だからな。情報漏洩防止のために記録撮影は一切禁止。書類提出のみで構わないと上からのお達しだ」

「ふーん……」

納得したのか、それともなにか不満があるのか。どっちつかずの返事をしながら45はゆつくりと俺に近づき…

「で？指揮官は私とどんなお話をしたいのかな？」

「…その前にまず席に座れ」

45は後ろから俺の首に両手を回して抱きついてきた。何度か離れるよう言ったが一向に聞く耳を持たず、最終的にこちらが折れてこのまま話を続けることにした。

「そういえば基地に戻ってきたのも久しぶりじゃないか？」

「あっちの任務が長かったからね、しばらくはこっちでゆつくりさせてもらおうつもり〜」

ふふっ♪と嬉しそうな45の笑い声が俺の耳をくすぐり、抱きしめる力がほんの少し強くなった。

詳しくは知らないが404の作戦内容は過酷な上に長期間に渡る。

そのため基地を離れることが多い。久しぶりに基地でゆっくりできる嬉しさもあるのだろう。他の404メンバーやグリフィン関係者がいる前では決して現さない一面を、45は俺と2人きりの時だけ見せてくれるのだ。

……正直45と2人きりで会うことを内心楽しみにしている自分がある……。それどころかこうして過ごすことを喜んでいたり……。

ええい冷静になるんだ俺！こうして（小悪魔な女の子に）騙されてはいけない！……あつ、いい匂いする……。

「最近さ……」

「ん？」

「他の3人とよく話すんだけどさ……」

「うん」

「ずっとここに……指揮官のもとに居たいなって思うんだ」

「アンジェリアさんが聞いたらどう思うだろうな」

「……指揮官、女の子と話してる時に他の女の子の名前を出すなんてありえないから」

「わ……悪い」

「……もちろん無理だって分かってる。私たちは……」

みんなの汚点だから

「私たち変わっちゃったなあ……誰かさんのせいで」

「頬をつつくな……、別にそんな悪いことじゃないだろ」

「でも404以外にも守らないといけないものが……失うのが怖いものが増えて……。昔よりも弱くなっちゃったなって……」

「弱いもんか、戦う者は護るべきものがあるからこそ強いんだよ」

「お前らを正式に受け入れることは俺にもできない。だがお前らが帰ってくる家を用意することはできる」

「だから安心して任務を遂行してうちに帰ってこい」

「……うん」

自分でもだいぶクサイことを言ってしまう恥ずかしさに苛まれる。

だが45の様子をみるかぎり、気にする必要はなさそうだ。嬉しそうに俺の頬を撫でたりつついたりし続けている。なに？ 気に入ったの？ 俺の頬。

「…なあ45」

「なあに？ 指揮官」

「もし俺が404の指揮権を失って、二度とお前らと会えないってなったらどうする？」

「ふふっ、なにそれ？ もしかして皆にもそんなこと聞いてたの？」

「まあな」

「うくん…」

45はしばらく考え込んだ。

「そうなったら自分から記憶を消すかもね…本当は嫌だけど。心に残し続けるのは40だけで十分」

「辛い思いをし続けるくらいなら無かったことにする…か。人形は便利だな」

「でも…指揮官のことなんて忘れてたくない」

「無かったことになんてしたくない」

すると45はギュツと俺を抱きしめ

「だから…お願いだから…嘘でもそんなこと言わないで……」

「45……」

震える45の手を握り、彼女の頭をそつと撫でた。

「大丈夫だ、俺はここにいます」

「急に消えたりしないから」

部屋はしんと静まり返り静寂に包まれる。聞こえるのは空調と自分の鼓動の音。

そして、45のコアが脈打つ音だけだった。

ある朝、俺は急に本部から呼び出しを受けた。

なにか重大な問題が起きのか。身に覚えのない呼び出しに不安を募らせ、ヘリに乗って上級代行官たちの待つ本部へ向かった。

よほどのことがない限り、本部から直接命令が下されることはない。それも俺宛ての指示ときた。大規模な殲滅作戦の打ち合わせだろうか、だとしてもわざわざ直接本部に足を運ぶ必要はない。

そう考えている間にヘリは本部屋上に着陸した。

「指揮官！来たか」

ヘリポートにはすでにヘリアンさんが待っていた。この人ならなにか知っているはず、ヘリを降りた俺は開口一番に呼び出しの理由を聞いたです。

「ヘリアンさん、なぜ僕は呼ばれたんですか？」

「……」

だが彼女はなにも答えなかった。

「ヘリアンさん？」

「私から説明することはできない……」

どういう意味だ……？

「この部屋だ。入りたまえ」

ヘリアンさんに言われるがまま、部屋をノックして入室した。

「失礼します。S04地区所属…」

「ああ、挨拶は結構。わざわざ来てもらってすまないね」

こいつは…あの時の小太りの代行官か。それと何人か見覚えのある代行官と…式典などでしか見たことのない幹部まで…。

なんだこのメンツは…ここはいったい何を話す場なんだ…!?

「結論から言おう、指揮官。本日限りで貴官は部隊の指揮権限を消失する」

「君はクビだ」

……は？

#13 言わなければ分からない たとえば言ったとしても

## #14 その時、彼は本音に気づく

今……なんて言った……？

「君はこの人物を知っているかね？」

小太りの代行官は一枚の写真を俺に見せた。

写っているのは連邦議会参議院議員、イヴァン・トロストイ氏だ。

「2ヶ月前に彼を狙った爆破テロ事件が起きたことは覚えているだろうか」

もちろん覚えている。

いつもと変わらない日々を迎えるはずだったあの日。白昼堂々のなか悲劇は起き、50名を越える死傷者が発生した。しかしトロストイ氏は事件が起きる直前に予定を変更していたため、彼に被害が及ぶことはなかった。

その後テロ組織は犯行声明を発表。近く第二次計画を行うと宣言した。当局はグリフィンへ協力を要請し、俺の部隊はテロリストからトロストイ氏を護衛するチームとして参加した。

「事件からちょうど1週間後の朝、君の部隊とトロストイ議員を乗せた車列が襲撃を受けた。君のチームはテロリストの殲滅に成功したが、トロストイ議員は流れ弾にあたってしまった。幸い大事には至らなかったがな」

「その件に関してはすべて報告済みです。あの場にいた私の部下にも話を聴き、処分を下しています」

「ああそうだな。だが君の処分がまだなんだよ」

「……その結果が解雇ですか」

「話は最後まで聞きたまえ」

すると代行官はまた一枚の写真を差し出した。

「…これは？」

「トロストイ議員の身体から摘出された銃弾だ。調査の結果これは5.7mm弾ということが分かった。我々は当初、テロリストが放った銃弾が偶然トロストイ議員を貫いたと考えていたんだがね」

「あの場で5.7口径の銃を使っていたのは君の人形しかいない。それを知ったトロストイ議員は君の管理責任に落ち度があると主張している」

「グリフィンはそれに応える義務はないと思いますが」

「もちろんだ、君はAnti-Rain小隊を指揮する優秀な人材だからな。我々もその要求は拒否したよ」

「だがトロストイ議員はグリフィンに莫大な融資をしている大手の顧客だ。要求を無下にはできない」

「これも会社のためだ、分かってくれ」

「……」

「なにが」会社のためだ、昨今では稀に見る不当解雇だぞ。その話が本当ならI.O.Pよりも関係がズブズブだし、なんだか大人の闇を垣間見た気がする。

「と、思ったが恐らく」トロストイ氏の希望」というのは建前だろう。目的は分からないがこいつらは俺の存在を消そうとしている。直接命を狙われていないだけマシだが。

「お待ちください。それはまだ検討段階のはずでしょう」

完全アウェイのなか、ヘリアンさんだけは彼らに食い下がった。

「クルーガーさんと人事部の承認が得られていない以上、彼の処遇を我々だけで決めるのは……」

だが代行官たちの表情が揺らぐことはなく、ただ勝ち誇った顔をしていた。

「ヘリアン殿、事態は急を要するのです。マニュアル通りの手順で進めていたのでは手遅れなんですよ」

「あいにくクルーガー社長は正規軍との諮問会議に出席しており、帰社を待っている余裕もない」

「ひいては人理規則第6章プロトコル13―5及び上級契約のガイドラインに従い、今この場にいる我々の権限のみで彼を解雇とする」  
「っ……！」

「……どうやらここまでのようだ。ヘリアンさんが反論できない以上俺に抗う術は残されていない。クルーガーさんが不在の間を狙うとは随分と用意周到である。やはり裏でなにか大きな力が動いているに違いない。」

「では指揮官、この書類に署名を。ああ安心してくれ、次の日働き口の候補はいくつか用意してある。好きな仕事を選ぶといい」

俺は用意された席へつき、提示された書類に目を通していった。

あいつらともお別れかあ……。久々にぼっちの生活の始まりだ。とはいえ俺は一人が好きである。一人でいれば誰にも裏切られず、なにも失わず、心を傷つけられることはない。

つまり一人になることになんの不安もないのだが。

ふと先日行った戦術人形たちとの面談が頭をよぎった。

——もしも俺がお前らの指揮官じゃなくなったらどうする？——

『私の指揮官は指揮官だけです』

『もしそうだったとしても、私はできる限りそうならないように尽くします』

『たぶん他の人形もみんなそうすると思います。自分たちでできる限りの努力をして……それで……』

あの時のM4A1は流しそうな涙をぐっところらえていた。

『でも……指揮官のことなんて忘れてたくない』

『無かったことになんてしたくない』

『だから……お願いだから……嘘でもそんなこと言わないで……』

あの時のUMP45は不安で身体が震えていた。

……。

……………。

こんな状況だからだろうか。俺はあることに気づいた。

俺は彼女たちに特別な感情を抱いている。他人からは相手にされず、ずっと一人だった俺に、彼女たち人形はなんの偏見や否定もせず接してくれた。初めて感じる優しさに俺は溺れてしまっていた。

その安らぎは偽物だと分かっていたのに。

人間という脆く儂い命と、人形という書き換え可能な記憶。

不都合な真実から目を背けながら、俺は彼女たちと楽しい毎日を過ごしていた。こんな日々がずっと続くと信じていたのだ。

そんなはずがあるわけがないことに気付かないふりをしながら。

本来なら他の指揮官のように人形は消耗品と割り切って扱うのが正しいのだ。彼らから見れば俺がしていることはただの“おままごと”にすぎない。

そんな家族ごっこにハマりすぎた結果、たかだか人形相手に強い愛着が湧いてしまった。

「この一枚で最後だ。フルネームで記入してくれ」

最後の同意書。これに署名をすれば俺は指揮官としての役目を終える。そう言われた俺は彼が示す空欄にペンを近づけた。

「その必要はない」

背後から聞こえたのは重く太く、威厳があるがどこか優しさを感じる声。

振り向くとそこには誰も予想をしていない人物がいた。

「ク…クルーガー社長…!?!」

「なぜここに…今は正規軍との諮問会議中のはずでは…」

突然の登場に驚いたが、最も狼狽しているのは代行官と幹部たちだった。

「会議の途中、大量のE・L・I・D. が居住区域付近で目撃されたな。軍はその対応に追われ、会議は中断して後日また行うことになったのだ」

「そんなことよりも…君たちはここで何をしている?」

クルーガーさんは幹部たちの前に立ち厳しい声で問いただした。幹部たちは恐怖のせいかなにも喋られず、ただ目を泳がせていた。第三次世界大戦を生き延びた退役軍人に睨みつけられては無理もない。

最初に口を開いたのは小太りの代行官だった。

「それが…トロストイ議員の件でちよつと問題が発生しまして…」

代行官はこれまでの経緯を説明した。

「事情は分かった。トロストイ氏には私から話をしておこう。いくら大手の顧客とはいえ、社員のクビを切ってまで彼の機嫌をとる必要はない」

「この件について今後なにかあれば必ず私を通すように。私が不在であればヘリアンに引き継げ」

「…承知しました…」

するとクルーガーさんはこちらへ振り返り、俺が先ほど記入していた書類を手にとってクシヤクシヤに丸めた。

「君たちは下がってくれ、私は指揮官と話がある」

「はっ…!では失礼します」

「ヘリアン、君は残れ」

「?…はい」

ヘリアンさん以外の幹部と代行官たちは部屋から退出した。

めっちゃめっちゃ緊張する……。しかも近くで見ると威圧感がすごい……。ていうかなんだこの状況は……。ひとつの部屋に上司と社長と俺って……。

単純にクルーガーさんは大柄な体格をしているのもあるが、元軍人としてのオーラが只者ではないことを感じさせる。

「指揮官」

「は……はい」

「君はとても魅力のある人間だ。AR小隊や404小隊を任せられるのは君しかない」

「それに我々が望んでいるのはただ能力が優れているだけでなく、君のように人形と深い絆で繋がっている指揮官だ」

「絆……ですか……」

「といっても人形との絆は人間同士のものとは似て非なる概念だ。戦術人形には戦術人形なりのアイデンティティがある。ただ人と同じように接すればいいというものではない」

クルーガーさんは窓に歩み寄り、外の景色を眺めながら問いかけた。

「君はクビを宣告された時、部下の人形たちについてどう思った？」

「正直に言うと少し後悔しました。……分かっていたことですが。こんな思いをするくらいなら、やはり最初から彼女たちと必要以上の馴れ合いは避けるべきだったなと」

そう答えるとクルーガーさんはハッハッハと笑った。

「ヘリアンから聞いたとおりだ、君はかなりひねくれているな」

「クルーガー社長は人形を人間のように扱う指揮官をどう思われますか？」

「私は人形に対して偏見は抱いてないし、重要な役割や責任を人間の代わりに背負ってくれることに感謝している」

「君のように人形としてではなく、人間と等しく接する者がいるのも理解できる」

「だが君は“指揮官”で、彼女たちは“兵士”だ。この関係を忘れて

はいけない」

「戦場で生きていればいつかは非情な決断をしなければならぬし、その結果なにかを失う日が必ずやってくる」

第三次大戦を経験した人間の言う言葉は重みがあった。

「……僕には分かりません。間違った判断をしないか、正しいものを選ぶか……」

「正解なんてものはない。どちらを選んでもそれが最良の選択だったのか誰にも分からない」

「大事なものはどれが正しいものなのかを見極めるのではなく、周りに流されず自分が後悔しない決断をすることだ」

「だから最後までよく考えろ、そして悔いのない方を選ぶ」

「彼女たちを頼んだぞ。若者よ」

クルーガーさんは俺の肩を叩き、期待の眼差しで想いを託した。俺はクルーガーさんに敬礼をし、部屋を立ち去った。

「……」

「……」

「…ヘリアン、あいつらから目を離すな。さもなければ近いうちに面倒なことになる」

「はい、監視を続けます」

「……あの指揮官を失うわけにはいかない」

—————

—————

「まさかクルーガーさんがやってくるとは……命拾いしたな」

「はは……そうですね……」

本部のヘリポートには迎えのヘリが待機しており、ヘリアンさんは屋上まで俺を送ってくれることになった。

「すまない指揮官、私はなにも手助けができなかった……」

「いやあ……気にしないでください。なんとかクビは免れたんですから」

エレベーターを待っていた時、ヘリアンさんは先ほどの己の無力さを謝罪した。

「でもなんか黒い闇の力というか、身の危険を感じましたけどね」

「あの幹部や代行官たちは以前から汚職の疑いがある。決定的な証拠を掴むまで私たちが目を光らせていたんだがな。まさかあんな行動に出るとは……」

金持ちの政治家と大企業幹部の癒着か……。社会って怖いな……。

「それにしても僕を辞めさせてなにが目的だったんでしようか」

「分からん、もしかしたら辞めさせるのが目的じゃなく、その後になにかしでかす計画だったのかもしれない」

「……というところ？」

「貴官はA R小隊の管理権を持っているし、404小隊が指揮下に入った時の秘匿先でもある。彼女たちが参加する作戦は特殊なものが多い。さまざまな情報を持っているだろう」

「貴官から見たらどうでもいいことでも、幹部たちにとってはなにか知られたらまずいことがある、それを貴官に知られてしまった……」

「それで僕は口封じの対象となり、まずはグリフィンから除籍させてその後殺g……いや怖すぎませんか」

「ふふふ、分からんぞ？もしかしたら仲間に誘うつもりだったのかもしれん」

「断ったらあの人らに口封じで殺されそうだし、話に乗ったら裏切り者としてグリフィンに処分されそう……。結局死ぬじゃないですか……」

「冗談だ。とはいえ絶対にならないとは言いきれない。最悪直接命を狙われる可能性もある。こちらでも極秘に捜査をすすめるが身の回りには気をつけるように」

「はあ…分かりました…」

おつかない話をしているうちに屋上にたどり着いた。ヘリはいつでも離陸できる状態になっており、吹き荒れる風に抗いながら乗り込んだ。

「指揮官、もしも身の危険を感じた場合はすぐに報告してくれ。こちらが対応するまでは人形たちに守ってもらおうといい」

「はい、ありがとうございます。ヘリアンさんもお気をつけて」

「レイスト4―2より管制局、指揮官が搭乗。これより帰投する」

ローターの出力が上がり重い機体が宙に浮いた。俺はヘリアンさんに敬礼し、見送られながら本部を後にした。

---

---

「——つてことがあったんだよ。…ねえ？聞いてる？」

隣を歩いているR0635は俺に目を合わせず、周囲を見回しながら答えた。

「聞いてますよ。それより指揮官も仕事に集中してください」

前を歩いているAR―15も同意見だった。

「気を抜いているとその汚職幹部たちよりも先にここでナイフで刺されて死ぬわよ」

「すいません……」

例の日から5日ほど経ったが特になにごともなくいつも通りの日々を過ごしている。

もしもあの時クルーガーさんがいなければ、こいつらとは二度と会うことはなかっただろう。一度失いかけた日常だが、こうして無事に送れていることに感謝極まりない。

するとなにかを見つけたのか、AR―15は足を止めた

「赤い建物の駐車場、男3人組。私たちを見た途端に慌ててなにか片付けてる」

「クスリの売買ね、間違いないわ」

そして今はなにをしているかという治安維持のためのパトロール中だ。基本的に警察の仕事なのだが彼らも人手不足に陥っており、区によっては一部地域の業務をPMCに委託している。ここSO4地区もそれに該当しており、指揮官は人形を連れて定期的に街を見回りするようになっていた。

ROとAR―15が強く警戒をしている理由は、今いる場所がSO4地区でも特に治安の悪いエリアだからだ。

怪しい男たちは車に乗り込み平静を装っている。

「…声をかけよう、行くぞ」

この出来事が原因であんなことになるとは、当時は知る由もなかった。

#14 その時、彼は本音に気づく

## #15 UMP45は動き出す

「グリフィンです。少しお話を伺っても?」

「ああ? なんの用だよ。こっちは急いでいるんだ」

「落ち着いてください、何もなければすぐに終わりますから」

売人と思われる男は運転席に座っており、俺たちに向かって威圧的な態度を取っている。残りの2人は大人しく後部座席に乗っており、こちらの問いかけに素直に応じている。恐らくこいつらはクスリを買おうとした客だろう。なにか妙な動きをしていないか見張るようROたちに指示する。

「変態クルーガーの犬どもめ…」

「全員免許証を見せてください。それと車の登録証も」

「やだね、見せる理由もない」

ひとついいことを教えよう。こんなセリフを吐く奴はだいたい犯罪行為をしている。

「指揮官、車内から薬物の匂いがします」

AR—15の言うとおり、車内からは麻薬特有の匂いが蔓延していた。恐らくフェンタニルだろう。元々は医療用の鎮静剤で合法的な薬だったが、ある国で密造されたものが違法で流通しはじめた。違法のフェンタニルは安価で買えるうえに少量で快感を得られるため、乱用をする中毒者が後を絶たない。最近では薬物事件で最も多く押収されておおり、深刻な問題となっている。

「薬物の匂いがするというだけでも十分正当な理由です。はやく提示を」

「ちっ…ほらよ」

「どうも、全員車を降りてください。車内を調べます。AR—15、保安官に連絡して薬物検査を依頼してくれ」

「了解」

免許証と車を照会すると運転席にいた男は過去に犯罪歴があり、車も盗難車でナンバーを偽造してあることが分かった。

「これ、あなたの車ではありませんね。誰の車ですか?」

「……」

R Oの問いかけに運転席にいた男は答えなかった。

「そう…。いいわ、あなたたちを逮捕します」

男を拘束しようと腕に手錠を近づけた途端、男たちが暴れだした。

「クソが！人形の分際でふざけんじゃねえ!!」

「暴れないで！うつ伏せになりなさい！」

抵抗する男たちをなんとか地面へ押さえつける。

だが売人の男はA R―15の拘束を強引にすり抜け、隠し持っていたナイフを取り出した。戦術人形が相手では勝てないと判断したのだろう。真つ先に俺へ襲いかかってきたのだ。

「くっ…」

間一髪でなんとかかわし、男と距離をとって拳銃を構えた。A R―15とR Oは逃げようとした残りの2人を手錠で拘束している最中であり、この状況で銃を使えるのは俺だけだった。

「ここで止まれ！ナイフを捨てろ！」

しかし男は警告を無視しこちらへ突進してくる。

「っ!!」

なおも距離を詰める男に向かって発砲。弾は腹部と腰に命中したが、男は止まらなかった。薬物のせいで痛覚が鈍っているのだろう。

「ぐうっ…」

「くっ…」

「指揮官！」

男はそのまま俺を押し倒して馬乗りになった。抵抗しようにも地面に倒れた際に拳銃を落としてしまい、振りかざされたナイフを抑えるのに精一杯だった。

「殺してやる…！グリフィンのゴミどもがア!!」

どうやら俺たちに相当恨みがあるようだ。過激派人権団体の人間か？

男の力はかなり強く、正直いってかなりまずい状況である。段々と刃先が俺の顔に近づいてきた。

「っ…っの…」

男の背中を膝で蹴るが効果はみられない。

「がっ……！」

男は片手で俺の顔を殴りつけた。

(…しまっ………)

殴られた衝撃で手の力が緩んでしまう。

グサツ

「指揮官!!……くっ……！」

A R—15がようやく客の男を無力化し、即座に銃を構えて引き金を引いた。売人の身体は数発の5.56mm弾によって貫かれその場に倒れ込んだ。

「指揮官!大丈夫ですか!指揮官!!」

「ああ……かすり傷だ……」

A R—15の呼びかけに対し、俺は目元から流れる血を抑えながら返事をした。

少し顔を削がれてしまったものなんとか直撃は免れ、ナイフは顔の真横に突き刺さっていた。少しでも反応が遅れていれば俺は右眼を潰されていただろう。

「……被疑者は?」

R Oは倒れて動かない男の首に手を当てた。

「…ダメです、既に死んでいます…。それよりも指揮官、血が…」

「問題ない…気にすんな」

「すみません指揮官…私の位置からはてっきり刺されたのかと…」

「…一度目はなんとか避けられたけど多分次は確実に刺されていた…」

「あのままだとA R—15が撃たなければ俺は死んだ。お前は俺を救ってくれたんだよ」

A R—15の頭にポンと手を乗せる。

「あの状況じゃ誰だってそうする、俺だってそうするよ」

やがて緊急車両のサイレンが鳴り響き、先程の要請を受けた保安官たちや医療チームが続々と現場に到着。辺りは瞬く間に封鎖された。

「グリフィンの指揮官、ケガの治療をしよう。こつちへ！」  
保安官に促され俺は傷口を抑えながら救急隊の元へ向かった。

「あ、帰ってきた。3人ともおかえり〜」

「指揮官！ケガは大丈夫なの!？」

基地の司令室に戻ると404小隊の連中がくつろいでおり、ソファで寝転がっていた9とG11が出迎えてくれた。

「ありがとな、ちよつと掠っただけだから大丈夫だよ。てかここで寝るなよ」

「だって今はG36が宿舎を掃除してるんだもん……くあく……」

「指揮官が刺されたって連絡があつてビックリしたよ……ほんとよかつた……」

「あんた大袈裟よ。たいした傷は負ってないってカーリーナも言つてたでしょ」

9と違い416は落ち着いた様子で資料をまとめていた。

「よく言うよ、『現場はどこなの!？』って武器持つて駆けつけようとしたくせに。416が一番焦つていたい顔引つ張らないですよ……」

G11の頬をつねる416の顔はやや赤く、9と45はいつもの光景だと微笑んでいる。相変わらずだなと思わず俺もクスツと笑つてしまった。

だが俺の後ろにいた2人の少女は、暗い表情を変えることはなかった。

「それより……AR-15とRO635、あなたたちはなにをしていたの?」

416が厳しい口調に切り替わる。

「指揮官が傷つけられることは戦術人形としてあつてはならない事で

しょう」

AR―15はなにも答えることができず、ただ沈黙していた。代わりに口を開いたROが弁明する。

「すみません416…あの時被疑者の抵抗が激しく拘束に手間取って…」

「だったら拘束バンドを身体に巻き付けるなり、相手が多いなら応援を呼ぶなりできたはずでしょう」

「あなたたちの対応に不備があったせいで指揮官は危うく命を落としかけたのよ？分かってているの!?!」

416の言っていることはもつともだ。

だがAR小隊は重要任務に携わることが多く、こういった市街巡回に参加することは少ない。抵抗する被疑者を取り押さえる訓練だつて、鍛えあげようにも実際には時間の調整が難しい。そのため今回は訓練も兼ねて実践で育てようと参加させたのだが……。

「416…そこまで…」

「…指揮官、これで分かったでしょう。AR小隊よりも私たちの方が完璧に任務をこなせます」

「ですから今後の任務は私たちを…」

「はい416！一緒にスプリングフィールドのカフェ行こ！新作のパンケーキが出たんだって！」

9が機転を利かせ、416の背中を押しして無理やり話を止めてくれた。グツジョブ9

「ちよつと9…なにをするのよ、話はまだ終わって…」

「ほら、G11も行くよ！」

「うええ…私も…?」

3人はワイワイと騒ぎながら部屋を出ていった。あとで9にお菓子あげよう。

「…ほら、ROとAR―15も行ってこい。今日はもう休んでいいから」

少しでも元気づけようと2人の頭を撫でる。

「…はい、失礼します」

ROとAR―15の細く小さい声で返事をし、部屋から去っていった。

AR―15は他の人形と比べて一際戦果や名誉への執着が強い。AR小隊という特別な存在でありつつも自身だけ民生用の銃を使っていることに引け目を感じているのだ。

ROもパレット小隊から精鋭の特殊部隊であるAR小隊に移籍し、少しでも早く俺たちの力になろうと頑張ってくれている。

そんな矢先で起きた今回の事件。自信を無くしたりしないだろうか…。

「?…45、まだいたのか。9たちとカフェに行かなくていいのか?」

UMP45は指揮コンソールのデスクで静かに読書をしていた。つきりみんなと一緒に部屋を出たと思っていたが。

45はなにも答えず、ゆっくりと本のページをめくった。

「そこ俺の席なんだけど…」

「あら、他人を心配させておいてなにもないの?」

「…怒ってる?」

「…別に?」

彼女は本を読む手をとめず一向にこちらへ視線を向けない。

「悪かったよ…。あの時はちよつと…気が緩んでた。次からはちゃんと真面目にやるよ」

俺が反省の意を述べるとやっと読んでいた本を閉じて立ち上がった。

「45?」

と言ったのも束の間、くるりと振り向いて俺の身体に身を寄せた。

「ほんと…心配したんだから…」

温もりを感じる45の身体は震えていた。

あの時と同じだ。嘘偽りなく本気で俺の身を心配してくれたのだろう。

「すまん…」

「傷、見せて」

「…けっこう深いわね。これだと傷跡残るんじゃない?」

傷跡は目尻から耳の付け根にかけて深く切り込まれており、今も若干痛みを感じる。

だがなぜか。45が触れた途端、心做しか少しだけ痛みが鎮まった気がした。

「ああ、せつかくのいい顔が台無しだ」

「あら、私は悪くないと思うけど?」

45は自身の左目に刻まれている古傷を指でなぞった。

「ほら、お揃い♪」

「これは喜んでいいものか……」

「ほんとは嬉しいくせに」

「どうだかな」

ふと45は傷を撫でる手を止め、俺の目をまっすぐ見ながら問いかけた。

「……指揮官は気にならないの?」

「その左目の傷跡か?」

「…私の過去」

404小隊。その存在は謎に包まれており、出自はおろかいかなる情報も記録に残されていない。グリフィンでの彼女たちの管理を任されている俺でさえ、多くのことは知らされていない。

ただ唯一知られていることといえば、メンバーの性格は残忍で冷酷かつ非情。殺しや拷問は彼女たちの得意分野であり、404とは関わらないのがいちばんと言われている。

そんな彼女たちがここまで心を開いてくれるとは、俺って実はかなりすごいんじゃないか?

「気にならないと言えば嘘になるが、他人の過去に首を突っ込むほど野暮じゃねえよ」

「45が自分から話してくれる時まで気長に待つき。」  
“Need to know”  
「ってやつ?」

「ふふっ、なにそれ? ウェルロッドの真似?」

渾身のドヤ顔を見て45は笑った。俺と二人きりの時にだけ見せてくれる、裏も闇もない本物の笑顔だ。

俺はこの先、彼女の笑顔を守れるだろうか？

「じゃあさ、指揮官…」

「なんだ？」

45は自身の唇に指を当てた。

「“ここ”の味は知りたくない？」

「…っ！」

45は俺を椅子へ押し倒し、見下ろす形で顔を近づけてきた。

その差わずか数センチ。

「指揮官が悪いのよ？ 私たちをこんなに心配させて」

「いやあ…だからあれは悪かったって…。ほら、俺らもカフェに行こ…」

この場を誤魔化すため話題を変えようとするも、45にギュツと両手を優しく握られ、思わず黙り込んでしまった。

45の甘い香りが鼻腔をくすぐる。

「もう…女の子にここまでさせておいて何もしいなんてありえないんだから…」

「責任…とってよ」

「…っ」

人形相手にここまで狼狽える俺が異常？

否、人間だろうが人形だろうが彼女は一人の女性だ。そしてその想いは本物だろう。

今ここで為すべきことはなにか、ひねくれた性格の俺でも分かる。

俺は……。

後悔しない方を選ぶ。

「45…」

まっすぐな瞳で見つめる彼女の顔にそつと手を添え

「指揮官……」

お互いにゆっくりと目を閉じ、徐々に顔を近づけていく。

ふたつの口が重なるまであとわずか……

「指揮官！ いるか!? 問題が発生した!!」

「!?」

勢いよく扉を開いて入ってきたのはヘリアンさんだった。

「:UMP45、いたのか。ここでなにを?」

「い…いや、指揮官に報告をし終えたところですよ」

「そうか。それより指揮官、カーリーナから話は聞いている。怪我の状態はどうだね?」

「:幸い大事には至りませんでした、お気遣いありがとうございます…」

「そのような状態で悪いが今は休ませている暇はない。かなり面倒なことになってしまっただけ」

「なにがあったんです?」

「話はAR—15とRO635が来てからだ、彼女たちも大いに関係している」

そう言うとヘリアンさんは45へ視線を移し、なにかを察した45は出口へ歩いていった。

「はいはい、私は仲間に入れてもらえないのね。分かりましたよー」

扉に手をかけようとした直前、くるりとこちらへ振り返り

(…:またあとでね♪)

「っ…」

「?…どうした?指揮官」

「いえ!なんでもありません!!」

あの顔と仕草は卑怯だ…。ドキドキしてしまってヘリアンさんにバレないよう誤魔化すので精一杯である。

と、45が部屋を出ると同時にAR—15とROがやってきた。

「すみません、遅くなりました。…それでヘリアンさん、なにが起きたんですか?」

「ああ…実はな…」



「指揮官をナイフで襲った男、もといAR—15に射殺された被疑者だが、素性が分かった」

「これから話す内容にはトロストイ氏が深く関わっている」

「トロストイ氏って…指揮官が話していた?」

「ああ、連邦議会参議院議員のイヴァン・トロストイ氏だ」

「Five—sevenたちが就いていた護衛任務の対象ですね」

ヘリアンさんは頷き、話を進める。

「知つてのとおりトロストイ氏が属する参議院は左派政党だ。彼らを支援または賛同している一部の過激派支援団体は、我々グリフィンや保安局の監視対象にもなっている」

「今回射殺された被疑者はその過激派団体のメンバーであることが判明した」

「それってつまり…」

「ああ、メンバーを殺された団体は黙っちゃいない。確実にやってくるだろう…報復が…」

「すでに左派メディアをはじめ各マスコミに嗅ぎつけられた。情報操作をするにはもう手遅れだ」

「圧力をかけることはできないのですか?」

「無理だろうな。アイツらは反戦団体とズブズブだ。グリフィンがどんな声明を出そうと、奴らは得意の偏向報道で“野蛮な殺人集団”と非難するだろう」

「…マスゴミめ」

2060年になった今でも報道機関の在り方は昔からなにも変

わっていない。その情報が正しいものかどうかは二の次。裏づけをせずに話題性や鮮度のみを求め、他人の粗で金を稼いでいる集団だ。

というのもマスコミは『媒体を売る』よりも『有力な広告主から収入を得る』ことを主な財源としており、スポンサー……つまり反戦団体の意向に沿った報道をすることが多い。なかでも民間軍事会社、特にグリフィンはしばしば目の敵にされる。

情報を制するものは戦いを制するとはよく言ったものだが、彼らに『社会の公器』を名乗る資格はない。

「私の……せいで……」

「AR—15……」

「すみません……指揮官、ヘリアンさん……私は……」

AR—15は憔悴した顔でひたすら謝罪をし続けた。目には今にも零れ落ちそうな涙を浮かべている。指揮官を危険に晒し、やむを得ないとはいえ一人の人間の命を奪った。AR—15が感じる責任はとても重いだろう。戦果や名声への執着が人一倍強い彼女の性格を鑑みれば、今の心境は想像に難くない。

「いいえ、悪いのはAR—15だけではありません。私もあの時素早く被疑者を拘束できていれば……416の言うように正しい判断をしていたら……」

自分も同罪だと主張するRO。二人が自責の念に苛まれるなか、俺はどう声をかけるべきか悩んでいた。

「言っただろう、あの時被疑者たちは強く抵抗していたし俺もあそこまで暴れるとは思わなかった。お前たちが悪いんじゃない、上手く指示を出せなかった俺に責任がある」

「……一時間後にクルーガーさんが緊急記者会見を開く。上層部はこの件を重くみているぞ」

「……はい」

そう言うヘリアンさんはROとAR—15をギュッと抱きしめた。

まるで不安に押しつぶされそうな子供を包む母親のように。

「だが安心しろ。グリフィンは必ず、君たちを見捨てない」

彼女の言葉はとても優しく、どこか安らぎを感じた。耳にただけなのに心の霧が晴れた気がした。

……。

同志を殺された反戦団体は確実にグリフィンへ報復をするだろう。その手口が平和的か、はたまた力ずくで行われるのかは分からない。仮に彼らが互いに血を流さない選択をすれば、要求は指揮官である俺の懲戒解雇かAR-15たちの解体処分だろう。

だが過激派の団体が丁寧交渉をしてくるとは思えない。当然グリフィンもそんな要求は断るはずだ。

となると正面からの衝突は避けられない。

最悪の場合、直接俺の命が狙われる可能性もある。

「…はあ……」

これから自分の身に起こりうる出来事が頭をよぎり、思わずため息をついてしまう。そんな不安を拭うように俺はぬるくなったコーヒーを口に流し込んだ。

高い空を翔く鳥たちを窓越しに羨みながら。

「まったく…世話の焼ける人ね」

指揮官たちがいる司令室。そこから少し離れた会議室に佇む一人の影。

UMP45は耳からイヤホンを外して装備を軽く整える。先ほど指揮官の衣服に仕掛けた盗聴器によって、すべての会話と情報は彼女に筒抜けだった。

指揮モジュールを稼働させ自身の小隊員たちへ通信を繋ぐ。

「3人とも聞こえる？仕事を始めるわよ」

#15 UMP45は動き出す

#16 そしてまた、彼女は強くなる

『捜査に問題はみられず、我々は適切な取り締まりだったと認識しています』

『クルーガー氏はこのようにコメントしており、捜査に支障をきたすとして当局は現時点でこれ以上の——』

ピッ

『死亡した男性は参議院支援団体の役員であることが分かりました。これに対し参議院議員のイヴァン・トロストイ議員は先ほど公式SN Sで追悼の——』

ピッ

『彼は今どきの若者では珍しく政治に熱心だったと聞いています。そんな未来ある命が犠牲になったんですよ？民間軍事会社なんてさつさと世間から廃絶して——』

ピッ

『見てください！この美味しそうな焼きたてのパン——』

「ふう……」

「おかえりグリズリー、どうだった？」

「どの出入り口と通路もダメ。この基地、デモ隊と団体の人間に完全に取り囲まれてるよ……」

基地を走り回ったグリズリーは疲れ果て、俺とスコープオンが座つ

ているソフアーに勢いよく倒れ込んだ。

「どのテレビ局もひっきりなしに報道してるもんねー。つまんないの」

スコープオンの言う通り、部屋に設置されたテレビにはクルーガーさんの顔写真と他所のグリフィン基地の映像が映されていた。世間は例の被疑者射殺事件で連日賑わっており、グリフィンの名を聞かない日はないほど大々的に報じられている。

「やっぱここからこっさり抜け出すのは無理かなあ」

「指揮官が思っている以上に外の様子はヤバイよ。上層部の記者会見もあんまり効果なさそうだし」

「あーあ、やっぱ俺も昨日のうちに退避しとけば」

よかつたなあと言いきる直前、こちらを睨むFALと目が合ってしまった。慌てて口を閉じた。

「まったく…誰のせいでこうなったと思ってるのよ…。張本人が真っ先に逃げ出したなんてことになったら、貴方グリフィンから居場所なくすわよ?」

上層部は抗議デモが各地のグリフィン基地付近で起きることを予想しており、帰宅する職員や人形たちに危害が及ばないよう事前に安全な場所へ避難させていた。だが基地を完全にもぬけの殻にするわけにはいかず、自衛として指揮官を含む少数の職員と戦術人形は留まることがなったのだ。

まあ、『少数の戦闘員しか残っていない状態で大規模な襲撃を受けたらどうするんだ?』って疑問が湧くんだが

・今のところデモは平和的に行われている。

・問題の人形と指揮官の身元がまだ特定されていない。

・万が一攻撃された場合でも本部から救援を送る準備は整っている。

これらを踏まえ現時点では過激派組織がグリフィンへ報復を仕掛ける可能性は低い。少なくとも射殺したのが俺たちだということ、所属がこの基地だとバレない限りは安全だろうというのが上層部の判断だ。業を煮やした過激派が無差別攻撃をする可能性もあるがたい

した脅威にはならないだろう。

「分かってるよ…お前らにも悪いと思ってる」

「…別に責めるつもりはないわ。AR―15とROは大切な仲間だし貴方は私の指揮官だもの」

FALは部屋の窓から地上の様子を眺めた。

俺たちが今いる部屋は12階にあり、夜になるととても絢爛な夜景を楽しむことができる。もっとも、今日に入るのは地上で俺たちを取り囲んでいる多数のデモ隊だが。

「こんだけ騒いでるくせにメディアは過激派団体の名前をまったく出さないのよね、ほんとひどい偏向報道だわ」

「さつきより人が増えてるな…」

「そのうち収まるわよ。まだあなたの顔は割れてないんでしよう？」

「それも時間の問題な気がするんだが…ん？なんだあれ…」

基地へ通じるいくつかの道からデモ隊のもとへ複数の車両が接近している。ざっと数えただけでも10数台はあるだろう。どうやら通りすがりというわけではなさそうだ。

「…様子がおかしいわね」

同時に屋上で監視に当たっているチームから通信が入った。

【指揮官、こちらSuper SASS。西側と南側からたくさん車の車両が近づいてくるよ！】

「ああ、こちらも確認した。そのまま警戒維持を。グリズリー、デスクに置いてある双眼鏡をとってくれ」

「なになに？なに見てんのー？」

グリズリーから双眼鏡を受け取り車列を観察する。

「ねえーなに見てんのってばー」

1台の車につき4、5人ほどの人間が降りてきた。手には自動小銃と思われるものを持っている。

「まずい…過激派の連中だ…！」

「ええ!？」

俺は横で驚くスコープオンを押しつけ、基地に残っている警備チームと指揮官たちに状況を知らせた。

「カリーナ！指揮コンソールを…ってアイツは昨日退避したんだって…」

「ヤツらもう嗅ぎ付けたの？それとも無差別攻撃をする気なのかしら…。どちらにしても想定よりも早く動きだしたわね」

「分からん、ひとまず本部へ報告が先だ」

「いや…バレたみたいだよ…」

「は？」

「ほらコレ、指揮官とここの基地が載ってる」

グリズリーが持っている端末を見るとそこには『**【速報】**射殺事件に居合わせたグリフィン指揮官の名前が判明！』のタイトルとともに俺の写真が載っていた。

「マジかよ…」

すかさず耳の通信機に手を当て、1階にいる人形にコンタクトを取る。

「グローザ、過激派の奴らが武装してやってきた。それもかなりの数だ。地上の状況は？」

「今のところ押しかけようとする様子はないけど、勢いはかなりエスカレートしてるわ。この数で突破されると歯が立たないわよ」

するとSuper SASSから通信がはいった。

「あいつらトラックから大量の武器を卸してデモ参加者に配ってるよ。多分最初からいた人のなかにも過激派のメンバーがいたんだと思う」

「…全部隊、配置につけ。本部にも救援を要請する」

「厄介なことになるぞ」

---

---

---

1時間後…

グリフィン基地 正面ゲート付近

『指揮官と人形の身柄を受け渡せ!』

『さもないと力づくで奪い取る!!』

『人殺しが!!』

同刻

グリフィン基地 1階メインエントランス

SOPMOD IIは榴弾を装填したM320を構え、群がるデモ隊を眺めながら隣の同僚に問いかける。

「鬱陶しいなあ…あんな奴らドカーンとヤツちやえばよくない?」

だが同僚は彼女の問いかけになにも答えず、聞こえたのはため息だった。

「ねえ〜AR―15〜、1発くらい撃ってもバレないよね?」

「…あのねえ…プラカードを掲げて叫んでいるだけのうちはあくまで“平和的なデモ”。こちらが攻撃されるまでは手出しはできないの。交戦規定を覚えてないの?」

「それにあの中には過激派とは無関係の民間人もいるわ。誰彼構わず撃たないでよ」

「むう…分かってるよ…」

真つ当な指摘を受けたSOPMOD IIはなにも言い返せず、M320の構えを解いた。

「でもAR―15、よかったの?指揮官と同じで狙われてる身なのに…」

「……」

「…言ったでしょ。これはケジメなの」

無意識に銃を握る力が強まる。

「私のせいでこうなつたんだから……」

「私が…指揮官を護らないと…」

「2人とも交代よ。休んできて」

「SOP II、ちゃんとおとなしくしてた？」

見張りの引き継ぎにやってきたのはM4A1とRO635。彼女たちもまた、基地の防衛のために留まることを選んだ。緊迫した状況から一時的に解放されたAR-15とSOPMOD IIは背中を伸ばし、自身の装備を片付け始める。

「あーあ、結局ず〜つと見張ってるだけだったなあ。つまんないの」「あなたね…」

「SOP IIは動き回るのが好きだもんな、元気でいいじゃねえか」

声をかけてきたのは一緒に見張りをしていたグリフィンの職員。彼は人形ではなく、基地防衛の警備チームとして選抜された人間の隊員だ。

SOP IIと共に笑いあう隊員にAR-15は謝罪の言葉を口にする。

「本当にごめんなさい…人間のあなた達まで巻き込んでしまつて」

「気にするな、これもグリフィンの仕事だ。それにしてもAR小隊とおたくの指揮官は苦勞してんな……」

「あれれ〜？そんなカッコいいこと言っちゃつて、もしかしてAR-15のこと狙ってるの〜？ダメだうちのおねーちゃんだもん」

「ねねねね狙ってないわ!？」

「動揺しすぎです…デИБさん…」

先程までの殺伐とした雰囲気とはうって変わり、いつもどおりの和やかな空気に包まれた。

「い…いいから休んでこい！ほら行った行つて——」  
ドシユッ

「…………えっ」

「あ……」

ドタンツ

「……で……」

「デイブさん!!デイブさん!?!」

ほんの数秒前まで笑っていた仲間が一瞬で地に倒れ込んだ。

M4A1はすかさず隊員のもとへ駆け寄る。力を込めて創部を強く押さえこむが出血の勢いは止まらない。

彼の身体から段々と力が抜けていくのを感じる。

「う……………」

パラパラッ… パンパンツ! トトトトツ…!

「SOP II!正面よ!乱射しながらこっちに向かってる!!」

「あははっ！これで好き放題にやれるね！……絶対許さないんだから…!!」

「指揮官！1名ダウン！繰り返します！1名撃たれました!!」

「なんだと？誰が撃たれた？人形か!？」

「いいえ！警備チームの隊員です！」

RO635とSOPMOD IIは自身の銃を正面ゲートへ撃ち続け、M4A1は通信機へ叫んだ。

だが1人だけ、AR-15はその場から動かずにただ佇むばかりでいた。

「AR-15！デイブさんを安全なところへ!!」

「あ……ああ……」

「…AR-15?」

「!…つごめん!」

「私がカバーするから！急いで!」

バンバン！バン！

AR小隊による制圧射撃のもと、AR-15は瀕死の隊員を奥の部屋へと引きずった。

凶弾に身を貫かれた彼の身体はとても重く感じた。

「AR小隊！医療チームと応援を送った。それまでそこで耐えてくれ」

「了解です!」

「M4A1、こちらワルサー。正面ゲートに大勢押しかけてるわ、防衛線を突破されるのも時間の問題よ」

「WAさん、援護をお願いします！少なくとも今はまだ撤退できません!!」

今のところは上層階からの狙撃支援もあり、襲撃者たちが敷地内へ侵入するのをなんとか阻んでいる。しかし民間人を撃たないよう慎重に狙いを定める必要がある、迅速に敵を仕留めることが難しい。

普段の鉄血人形との戦闘とは違う慣れない戦いを彼女たちは強いられていた。

「あああまどろっこしい！榴弾使えないじゃん!!」

「弾を当てなくてもいいわ！あいつらが足を踏み入れないように抑え込むことに力を入れて！」

「はあ…はあ…」

「う…」

AR-15は隊員を部屋へ運び、改めて容態を確認した。意識と呼吸はあるものの銃弾は隊員の首もとに命中しており、一刻も早く治療をする必要がある。責任感で押しつぶされそうになるメンタルをなんとか保ち、メディックキットを開封して応急処置に全力を尽くす。

(私のせいで…私のせいで!!)

止血帯が入っているパッケージを開けようとするも焦りと緊張で手元がおぼつかない。

「開かないっ…！なんで…!?なんでよ!!」

「しっかりして！私の声が聞こえる!？」

「…はっ…。…う…」

帰ってきたのは声とは言い難い掠れた呻きだった。

(まずい…このままじゃ…)

隊員の身体をわずかに浮かせ、呼吸のための気道を確保する。

(落ち着くのよ…人間の救命処置はM16から教わった。訓練どおりにやればきつと…)

微かだがまだ息はあり、急所を撃たれているものの助かる可能性は残っているだろう。彼の命は今この場でAR-15が行う処置にかかっている。

すべてのモジュールを駆使し蘇生させることのみメンタルを集中させる。

“これ以上私のせいで誰かが傷つけられる姿なんてみたくない。

”

「これで止血は完了、けど失血の量が多いわね…。ひとまずアドレナリンを打たないと」

薬品の入った注射器を隊員の身体へ挿入し、ゆっくりと流し込んだ。

(絶対…死なせるわけにはいかない…！)

「ご主人様、本部からお返事が届きました」

後方幕僚のカリーナが不在の今、代わりに指揮の補佐を務めてくれているのはG36だ。

「お、ありがとう。ヘリアンさんはなんて？」

「現在本部も過激派の襲撃を受けており、救援部隊を派遣するのに時間がかかるとのことですよ」

「やっぱりか…。応援はアテにできなさそうだな」

モニターに映し出されているのはドローンや監視カメラの映像。敵は圧倒的な数で押し込んできており、少人数の我々の状態は芳しくない。思わずため息がこぼれる。

「防衛線は突破されていませんが過激派のなかにまだ民間人が混ざっており、こちらは思うように手が出せません。いかがなさいますか？」

「……G36、後方支援に出てる部隊の位置情報を出してくれ。それと観測された鉄血の拠点の場所も」

「かしこまりました」

G36がタッチパネルを操作するとメインモニターに衛星写真が映し出された。

「こいつは…トンプソンの部隊か。回線を繋げ」

「オーバードロードよりスピード1、応答しろ」

「スピード1だ、どうしたんだボス？」

「拠点監視任務は中断だ。今基地が過激派団体とデモ隊によって攻撃を受けている。お前たちに新たな任務を頼みたい」

【救援に行けばいいのか？いいぞ。すぐに向かう】

「いや、その前にちよつと“おつかい”を頼まれてくれ」

【ほお…ちゃんとお駄賃くれるんだろうな？】

「お前たちが好きそうなことさ……」

---

---

---

「はい…はい…ええ、上手くいつています。今私の部下が始末に向かっています」

「必ず手に入れますよ。……もちろんです。まだあなたと我々が関与していることはバレていません」

「……はい…。あの指揮官さえ消せばあの人形…失礼、彼女はあなたのもんです。必ず手に入れてみせます」

「はい…ではこれで。失礼します」

男はスマートフォンを操作し、通話を終了した。

「つたく、どうかしてるぜ、変態議員め…」

「……私だ、配置はできたか？……さっさと逃げ、逃げられるぞ！」

「いいか、退路を断つんだ。そうすりゃ“確保”と“処理”がまとめ済ませられる。完了したら連絡しろ」

#16  
そしてまた、  
彼女は強くなる

## 【特別編】たとえばこんなバースデー

### ——誕生日

この言葉を耳にすれば多くの人がポップで賑やかなイメージを思い浮かべるだろう。

誕生日パーティーを開けば当日は一日主役になれる。みんなから祝福の言葉を贈られ、みんなから素晴らしいプレゼントを貰い、みんなで豪華なケーキを食す。主役だけでなく参加した人たち全員が充実した一日を送れるだろう。

だが幸せの象徴である結婚式が人生の墓場と揶揄されるように、誕生日パーティーも例外ではない。

他人の誕生日を忘れないよう気にかけて生活するのは窮屈で、さらに仲間が多ければ多いほど覚えるのが大変である。加えて仲間全員の誕生日パーティーを行うとすればプレゼント代やケーキ代など、費用もバカにならない。

誤って誰かの誕生日を忘れてしまった、あるいはお金を出し惜しんで参加しなかったり、安価なプレゼントで適当に済ませようものなら恐ろしい集団心理による同調圧力の捌け口となるだろう。

誕生日パーティーというのは決して賛美なものではなく、所属するコミュニティによっては仲間意識をより高めるための場であり、従わない者がいようものなら排他的な一面が垣間見える儀式だ。排斥の傾向はヒエラルキーによって比例するといっている。この認識は社会全体に広まるべきである。

もつと言えば誰かが祝われてるところを見て、俺もみんなから祝ってもらえるかなーなんて淡い期待を抱こうものなら華麗にスルーされて傷つくし、誰かからお祝いのメッセージが届いたと思ったらよく行くお店のメルマガだったり…。

「指揮官、この申請書類の認可をお願いします」

「ああ…はいはい……」

挙句の果てにいつも祝っている側ばかりで祝われたことは一度もないなんて話はザラだ。

「予算決裁の提出急いで下さい。本部から催促の通知が届いています」

「すぐにやります…」

その点ぼつちの俺はそんな心配をする必要はない。なぜなら最初から祝ってくれる相手がいないから。そもそも誰も俺の誕生日知らないんだけど。俺も他の人の誕生日知らないし。

誕生日に限った話ではないがその人にとって特別な日でも、それを知らない人間にとってはいつもと変わらない日常の1ページに過ぎない。その逆も然りだ。

ていうかみんなどうやってお互いの誕生日知り合ったの？ハツキング？

「(なんだってこんな書類が溜まってるとだよ…誰がこんなになるまで放っておいたんだ？俺か、俺だな)」

実を言うと今日は俺の誕生日である。めっちゃめっちゃ書類作業に追われてるけど。誕生日くらいゆつくり過ごしたかったのだが人手不足のグリフィンでは有給の申請が却下されることが稀によくあるのだ。やはり俺の労働環境は間違っている。

まあ誕生日だからといって誰かと一緒に特別な時間を過ごすわけでもないんだが。俺はひとりが好きなのだ。

「指揮官さまー、虚空を眺めてないで早く手を動かしてくださいー。本気で午前中に終わりませんよ」

「分かってる…てか手伝ってくれよ」

「私や主任ができる仕事はすべて片づけました！あとは指揮官さまの署名と決済が必要な書類だけです！」ドン！（書類の山が置かれる音）  
「ヒエツ」

俺は誰かから祝ってもらうのを期待したりしない。そもそも俺は誰かの誕生日を祝う機会も祝ったこともなかった。

他人には無関心なのに自分の時だけ祝ってもらおうだなんて、それはただの醜い傲慢だ。

結論を言おう。

誕生日は1人で過ごすものである。

自分が生まれたせつかくの記念日、『あなたを祝ってあげるよ、だから私の時も祝ってね』なんて押しかけてくる愚か者に邪魔されるなんてもつてのほかだ。

そのような悪しき慣習に巻き込まれないよう、俺は誰にも知られず1人でひっそりと誕生日を過ごす――

はずだったんだけどなあ……。



「…カリーナさん…これで…よろしいですかあ……」

「えーつと…はい、これで大丈夫です！今日のタスクはひとまず完了です。次からは仕事を溜めないで計画的に片付けてくださいねー」

「善処します…」

よし、これで今日は自由の身だ。戦術人形たちは後方支援に派遣したり、戦術訓練の講習に参加させてある。基地には俺の隷下の人形はほとんどいないはずだ。

「……それはそうと指揮官さま」

「なんだ？」

カリーナは書類をファイルに綴じたあと、すぐに帰るわけでもなく俺の傍に寄ってきた。

なにか言いづらいことがあるのか、後ろで手を組みながらもじもじしている。

「…購買の在庫抱えてるから買ってくださいってのはダメだからな、この間買わされた快速修復契約無駄にたくさん残ってるし。いや使う予定のないもの買った俺も悪いんだけどさ」

「ち…ちがいますよっ！そういうんじゃないです！」

「…？じゃあなんだよ」

「その…」

「この後…時間ありますか…？」

「え…」

なにを躊躇ってるんだ？誕生日は一人で過ごすってきつき決めただろう。『ああすまん、この後用事あるからごめんね☆』って適当に断ればいいんだ。答えは最初から決まっている。

そう、適当に断って…。

「ん…指揮官さま…？」

くっ…！眩しい！

至近距離上目遣い、チラリと見える豊満な胸元！カーリーナのことだから狙ってるわけじゃないんだろうけどあざとい…あざとかわい…！

だが訓練されたぼっちはこんな分かりやすい誘惑には乗らない。

故人いわく、触らぬ神に祟りなし

カーリーナの真意がどうであれ、俺は……。

「ああ…そうだな、悪いが…」

---

---

---

「では私はいったん書類を届けてきます！すぐ戻りますから待っていてくださいねー」

「ああ…お気をつけて」

「(なにしてるんだ…俺は…)」

結局俺はカーリーナの誘いに乗ってしまった。過去の過ちは繰り返さないはずなのに…ぼっちの風上にも置けねえ…。べつ…別におっぱいに釣られたわけじゃないんだからねっ!?

まあ…かわいい部下からの誘いだし、ありがたく乗っておくのがオトナの余裕というヤツか…。それに今はまだ昼下がりで。ひとりの時間を楽しむのは夜になってからでも遅くはない。やだ俺すごい成長してるわ。

「指揮官さまー! お待たせしました」

「お…早かったな」

「…やつと指揮官さまと一緒に過ごせますから」

「そ…そうか」

「では行きましょうか、指揮官さま」

カーリーナはまるで遊園地にやってきた子供のように部屋を飛びだし、廊下を早足で駆けていった。途中で廊下を走ってはいけないことに気づいたのか、後ろでのそのそと歩くこちらに合わせてくれたのか。道を引き返して俺の隣でゆっくりと歩きだした。そんな彼女が歩きやすいよう俺はできるだけ歩幅を合わせる。

廊下の窓からは暖かい陽射しが差し込み、心地よい安らぎを与えてくれる。

「今日は指揮官さまのお誕生日ですね」

「知ってたのか」

「もちろん! 後方幕僚として当然ですわ!」

「…去年は祝ってもらってないけどな」

「う…それは…。き…去年は作戦とかでバタバタしてて…」

「あーいい、いい。俺もお前の誕生日祝ってないしな。気にすんな」

もとより、俺は彼女の誕生日を知らない。

「その…それで今日は指揮官さまにお祝いがしたくて…」

「別にそんなことしなくてもいいぞ。上司の誕生日を祝う業務なんてないし」

「そつ…そんなんじゃないですよ！純粹に日頃の感謝も込めてお祝いしたいんです！」

「ほんとに？なんか裏とかない？うま○棒をプレゼントして、『お返しとして私の誕生日にはブランドバッグを用意してくださいね！』みたいなオチじゃないよね？」

「違いますつ！もう！指揮官さまはひねくれすぎです!!」

「…というか、指揮官さまは私のことをそういう女だと思ってるんですか!？」

「冗談だ、冗談。悪かったよ」

俺は知っている。

彼女はとても素直な人間だ。人形だろうが人間だろうが誰とでも分け隔てなく接し、自分が騙されることはあっても決して誰かを騙すようなことはしない。まあ…たまに在庫の押し売りをすることはあるが…。それも彼女なりのコミュニケーションのひとつなのだろう。

金銭的な面はともかく、人間関係において損得勘定で動く性格ではない。バカみたいに人を信じ、バカみたいに人を氣遣う。カーリーナはそういう人間だ。

「でも…私は指揮官さまのそういう性格、ところ大好きです♪」  
「…つ！」

そんな彼女の温かい優しさに俺はうっかり溺れて勘違いしそうになる。

「なんだかこうしてゆっくりお話しするの久しぶりですわねー」

「最近は掃討作戦の連続だったからな、楽だった昔に戻りたい…」

「正直ひとりが好きな指揮官さまのことだから、今日は適当な理由で断られると思ってました」

「…なぜ分かった…」

「ふふん、伊達に指揮官さまと長く付き合ってますからね。指揮官さまが考えていることなんてお見通しです！人形の皆さんがほとんど不在なもの、つまりはそういうことですよね」

まったく…この後方幕僚には敵わない。

でも、だからだろうか。

この可愛げのある後方幕僚と誕生日を2人で過ごしたいと、実は内心どこかで感じていたのかもしれない。

「ねじ曲がった性格とその眼は相変わらずですけど、昔と比べると指揮官さまはだいぶ成長しましたね」

「お前はヘリアンさんかよ…そんなこと言っていると彼氏できずに婚期逃すぞ」

「ななななに言ってるんですか指揮官さま！あんな人と一緒にしないでください!!」

「(あんな人…?)」

「私は…今はいいんです！大変ですけど仕事は楽しいですし、同僚や人形の皆さんもよくしてくれますし…」

「多分ヘリアンさんもそうやって仕事を優先したからあんな末路になっても痛いいたい分かった悪かったって！」

「ばか…」

「…でもお前モテるだろ。この前も休憩所でエンジニアたちが話してたぞ。通りがかりで聞こえただけだけど」

「へーそうなんですか」

「…無関心だな…」

「私が欲しいのはひとつだけですから」

「それに…今はこうしてあなたと一緒に過ごすのが…とても幸せなんです」

2人で話しているうちにいつの間にかエレベーターに辿り着いた。

「え？なんて？」

「なんでもありませんっ。ほら、エレベーター来ましたよ」

扉が開くと誰も乗っておらず、俺たちは気兼ねなく会話を続ける。

「ところでどこに行くんだ？」

「スプリングフィールドさんのカフェです。キッチンをお借りしてるんですよ」

「…2人きりじゃないのか」

「え〜？もしかして私と2人で過ごしたかったんですかあ〜？指揮官さまも可愛いところありますね〜♪」

「ちげえよ…ツンツンすんなやめろ」

「…私も本当はそうしたいんですけど…」

エレベーターがカフェのある2階に到着し、カーリーナは颯爽と飛び出した。

「…指揮官さまをひとり占めするのは、今日はここまでにしておきます♪」

「…カーリーナ……」

「エレベーターから出る時は上司が先だ。社会人として当然のビジネスマナーだぞ、覚えとけ」

「今言うセリフそれですか!？」

—————  
—————  
—————

「スプリングフィールドさん！お待たせしましたー！」

「ようこそいらつしやいました！指揮官、お誕生日おめでとうございませす♪」

「おう…ありがとうございます」

「それで」

「これはいったいどういう状況で…？」

「あー…あはは…」

いつもはキレイに整理整頓されているキッチン。しかし今はたかさんの調味料がこぼれていたり、辺り一面に調理器具が散乱したりとめちやくちやに散らかっていた。

「空き巣でも遭ったのか…？それとも地震？ていうかそこ明らかになにか爆発した跡だよな？」

「いやあああああつー！」

「!?!?!」

突然奥からなにかが倒れた物音と聞き覚えのある悲鳴が響いた。スプリングフィールドは『あちゃー…』と苦笑いをしており、俺は物

音の原因を探るべく食品庫の方へ向かった。

「なにしてるんだお前…」

「し…指揮官!?…なんでもないわよ!」

そこにいたのは頭から小麦粉を被って白くなったWA2000だった。なにかに驚いたのだろうか、腰が抜けてへたり込んでいる。

「いや、なんでもなかったら悲鳴あげないだろ。なにがあつた?」

「…ゴ…虫が急に出てきたからびっくりしたただけよ!なんともないわ!」

「あー、まあキッチンとかこういうとこだと仕方ないわな」

ていうかこの子、殺しのためだけに生まれたんじゃないやありませんでしたっけ?

「ほら!指揮官の後ろ!!」

「?…うわ、ほんとだ。けっこう大きいな」

「指揮官、わーちゃん?大丈夫ですか?」

「あつ、スプリングフィールド!そこにデカイ虫がいるから気をつけろ」

「あら?本当ですね…」

スプリングフィールドがやってきた途端、外敵の接近に気づいた虫は俊敏な動きで彼女に襲い掛かった。

だがスプリングフィールドはまったく躊躇うことなく、素早く地を這う虫を両手で包み込み

「自然へおかえりっ」

プロ野球選手もびっくりのレーザービームで窓の外へ放り投げた。虫の存在に気づいて捕獲し投げるまで、この間わずか4秒である。

「すげえな…」

「あんた只者じゃないわ…」

「うふふっ♪こういうのには慣れてますから。もう大丈夫ですよ」  
「だつてさ。ほら、立てるか?」

地べたにへたり込んだままのWA2000に手を差し伸べる。

「あつ…うん…」

WA2000は拍子抜けした表情で俺の手を掴んで立ち上がった。

彼女が動く度に小麦粉が宙を舞い、思わず笑ってしまいそうになる。

「…ありがとう」

「それにしてもわーちゃんが料理だなんて珍しいな」

「それは…そのっ…なんていうか…」

「指揮官にお菓子をプレゼントしたいって一緒に作ってたんですよ」  
♪

「ちよっ…！スプリングフィールド…!!」

「なるほどな、そんな気を遣わなくてもいいのに…」

「なに言ってるんですかー、私たちの大事な指揮官さまのお誕生日なんですから！あ、WAさんタオルどうぞ！」

「カーリーナ…お前もしかして他の人形にも俺の誕生日言いふらしたのか…？」

「え？もちろん。だって皆さんでお祝いしたいですもの！」

「はあ…」

「ま、どっかのこじらせ者のせいで今日は無理そうだけど？みんな残念がってたわよ。特にSOP IIとかFive—sevenとか」

「……」

「まあまあ。みんな遅くとも今夜には戻ってきますし、大丈夫ですよ」

「スプリングフィールドさーん！少しキッチンお借りしますね！」

「ええどうぞ♪指揮官はカフェでゆっくりしてくださいね」

「ああ…」

俺が自分の誕生日を人形たちに言わなかったり、遠ざけたりしたのはただぼつちの時間を楽しみたかっただけではない。

彼女たち人形には誕生日という概念がない。製造された日、俺の所属になった日、初めて出会った日など、記念日と言えるものはある。だがそんなものは人間の誕生日と比べれば些細なものだ。

人形にとつても誕生日の重みを理解するのは難しいだろう。故に、彼女たちから誕生日について聞かれることは今まで一度もなかった。にもかかわらず人間の誕生日を祝えなんて酷だろう。それに祝ってもらったお礼に俺ができることは何もない。

現にさつきスプリングフィールドから祝いの言葉をかけられた時

も、なんて顔をすればいいのか分からなかった。

冒頭で持論を述べていたが誕生日を1人で過ごしたい理由の半分はこれである。とはいえ皆に教えたカリーナを憎んだりはしない。彼女も悪意があつてしたわけではないだろう。

「WAさん！ボウルごとレンジで加熱したらダメですよ!!」

「え？…きやああ!!」

キッチンがやたら騒がしいのが気になるが。

「大丈夫なのか…」

俺は彼女たちになにができるのだろう。

—

—

—

「指揮官さまー！お待たせしました！」

「料理つて最初は結構大変だったけど慣れば案外簡単なのね」

「ふっ…ふふふっ…ふふ…」

「おいなんか1人病んでるぞ」

カリーナたちが運んできたのはたくさんのフルーツが盛られたバースデーケーキだ。他にもチョコレートやさまざまな形を型どつたクッキーもある。

「おお…すごいな、思ったより本格的だ」

「へへん！私もけっこう料理できる方なんです！…まあスプリングフィールドさんにほとんど手伝ってもらったんですけど…」

「あら、カリーナさんこそとても筋がよかったですよ。お陰でいい焼き加減に仕上がりましたし。わーちゃんも…あの…頑張ってくれました」

「ちよつと、なにその苦笑い。私だって結構活躍したんだから！」

「ほう、たとえば？」

「えっ？えーと…チョコ溶かして生地をこねて生クリームかけて…後はまな板とかお皿洗つたり？調理器具を戻したり？」

最後ら辺はただの後片付けじゃねえか。

「ほんじゃ、いただきm」

「ちよつと待ったあ！」

「なんだよ……」

「指揮官さま、これはバスデーケーキですよ？となると食べる前に必要なことがあるじゃないですか」

カリーナはニヤニヤしながらケーキにロウソクを立てた。

「え、いや普通に食べたいんだけど。恥ずかしいし……」

「ダメです！さあ火をつけますね、スプリングフィールドさん照明お願いします」

カリーナの合図で部屋の照明が落とされ、ロウソクに灯された火がゆらゆらと煌めいていた。

「さあ！どうぞー！」

全く気乗りしないがここまでくると“本日の主役”の運命だと割り切るしかないのだろう。ロウソクへ顔を近づけ軽く息を吹きかけた。

「指揮官、お誕生日おめでとうございませう♪」

「お……おめ……おめでと……」

「おめでとーございまーす!!」

「はっず……」

歳の割に気はずかしいことをさせられたが、3人から盛大な祝福を受けてつい頬が緩んでしまう。

「さあさあ！ケーキどうぞー！」

「……いただきます」

おお、めちやめちや美味しい。スポンジと生クリームの間ペースト状のイチゴが練り込まれており、なおかつ甘すぎない仕上がりととなっている。実に俺好みの味だ。見た目も然ることながらお店に出せるレベルである。まあ実際にお店をしてるスプリングフィールドも作っているから当然ではあるのだが。

クッキーもバターの香りが口に広がり、軽い食感も相まっていくらでも食べられる気がするくらいおいしい。

「そのクッキー、焼き加減や味のバランスは全部わーちゃんがやってくれたんですよ」

「ほんと苦労したんだから。感謝して食べなさいよ！」

「そうなのか…」

「？…指揮官さま？」

「こんなにも美味しくて、笑顔で祝福されて、嬉しくて幸せなはずなのに。」

どうしても素直に喜べない自分がいる。

「あんまりこういうことは言いたくないんだけど…」

「その…2人は人形で誕生日がないだろ。なのに俺の誕生日を祝わせて…」

「それに俺にはお返しを用意することもできない。俺が感じた幸せをお前たちに返すことができない…」

思いの丈を述べると真っ先にWA2000が呆れた顔でため息をついた。

「まったく…そんなくだらしないこと気にしてたの？アンタって本当にバカね」

「だいたい私たちだって人間の誕生日がどれだけ大切かくらい分かってるわよ」

「わーちゃんの言うとおりです。確かに私たちには誕生日なんてありません」

「ですが私たちの大切な指揮官が…かけがえのない大切なあなたが生まれてきてくれた特別な記念日ということは理解しています」

「それは私たちだけでなく、あなたの部隊全員です。だからみんなあなたの誕生日を一緒に祝いたいです」

「お返しは…そうですね…。これからも指揮官と一緒にいさせていただければ、私たちを頼っていただければ十分ですよ♪」

「そういうこと。だから…まあ…これからもせいぜい長生きしなさいよ」

「はは…まさか人形に諭されるとはな…」

「ほんと指揮官さまの悪いところですよ…まあそこがイイんですけど」

すると騒がしい声と共にカフェのドアが開き、後方支援から帰投した人形たちがやってきた。

「たっだいまー！指揮官ー！誕生日おめでとう!!」

「こらSOP II！ちゃんと身体の汚れを落としてから…」

「おう、おかえrぐへっ…！SOP II…食事してる時に抱きつくのはヤメテネ…」

「はいコレ！誕生日プレゼント!」

差し出されたのは恐らく鉄血人形から剥ぎ取ったであろう生体部品だった。あえて具体的な部位名は出さないが。SOP II、食事してる時にそういうの見せるのはヤメテネ。

「指揮官おめでとう！…この間話してた新作のゲーム買ってきたから後で一緒に遊ぼ！」

「センス抜群の私が指揮官にピッタリの紅茶を用意したわよ。ケーキと一緒に楽しみましょう」

「あら、指揮官って紅茶が苦手なの知らないの？それにケーキには紅茶よりコーヒーでしょ。指揮官ー、コーヒー豆買ってきたから一緒にブレンドしよ？」

「なっ…ただの紅茶じゃなくて飲みやすくしてケーキにも合う紅茶だけど？少なくともあなたが作るニガイコーヒーよりかはねえ？」

「そうですよFive—seven！紅茶を冒流するのは許せません！いいですか？紅茶とは発祥こそ中国ですが英国によってより味に磨きをかけられた由緒あるお茶で…」

「昔の私なら誕生日なんて理解できないし、こんなの用意しなかったけど。…指揮官ならあたしみたいな人形からのプレゼントでも、受け取ってくれるよね」

——この世に産まれた者ならば誰しも平等にやってくる生誕祭。

それらを祝うのに人間も人形も関係ない。

いつもはひとりで過ごすのが好きでも”人生”という長い目で見れば、たまにはこんな記念日も悪くないのかもしれない。

【特別編】たとえばこんなバースデー

#17 The Enemy of my enemy

「もしも民間人に危害が及ぶとグリフィンの責任問題にかかわります。最悪の場合ご主人様がすべての罪を被る恐れも…」

「代償なしになにかを変えたいと願うのは愚者のすることだ。地上のM4達やスタッフはリスクを負ってでも守らなきゃならない」

「……もともと…俺が招いた問題だしな…」

【ボス、作戦通り奴らをおびき寄せた！このまま基地へ向かうが早めに救援をよこしてくれよ！】

「了解だ、過激派がいるギリギリまで引き付けろ。そのあとは右翼側に回り込んで支援に……ちよつと待て、お前らなにを連れてきて…」

【ご主人様、スピードチームの後方から高速で追尾する反応あり。移動速度からして人形型ではないと推測されます】

ふと脳裏に嫌な予感がよぎる。

そしてその予感は今、目の前で現実となった。

「映像を切り替えろ、急げ！」

モニターがスピードチームに随伴するドローンの映像に切り替わる。

俺はこの時ほど自身の見通しの甘さを悔いたことはなかった。

「これは…マズい…！」

30分前……

【それで？ 私たちになにをしてほしいんだ？】

「お前たちの近くに鉄血の小規模な拠点が複数ある。そこを攻撃してほしい」

「はあ!? こっちはたった4人だぞ? 冗談キツイぜ!」

「少しちよつかいをだして鉄血を引きつけるだけだ。完全に掃討する必要はない。それにごく少数の反応がいくつかあるだけだしな」

「だが引きつける数は多い方がいい。派手にかましておびき出せ」

「分かった…それで? 基地のどこまで引きつければいいんだ?」

「戦力が最も集中している正面ゲートだ。上手くいけば過激派団体の奴らを挟み撃ちにできる。鉄血が近づいてくると知ったら民間人もさっさと逃げるだろ」

「そんな調子よくいくかねえ…了解だ。全員車に乗れ! ずらかるぞ」

スピードチーム、もといトンプソンたちとの通信を終了し、モーターをドローンからの映像に切り替えた。

「恐れ入りますがご主人様、どういった作戦をお考えでしょうか?」

「G36、”ハイダーのバランス理論”って知ってるか?」

「三者間の認知関係のバランスを保とうとする人間の心理状態を表す理論ですね。それがなにか?」

「そうだ。最も分かりやすい例だと”敵の敵は味方”ってやつだな」

「ここでは民間軍事会社と過激派団体、中身は人間同士が争っているが人類が本来すべきことは潰し合いじゃない」

「人類に反旗を翻した”暴走者”を止めることだ」

「つまり…”鉄血”」

G36の顔が少し固くなったのがわかった。

「…お言葉ですがご主人様、奴らを第三勢力として介入させるのはおすすめできません。民間人を危険に晒してしまいます」

「なにも大勢の鉄血を引き連れてこの場でやりあうわけじゃない、ヴェスピドとかを数体近づけて少し混乱を起こす程度だ。近くに鉄血がいると分かれば英雄気取りの民間人たちも逃げるだろうし、過激派の連中もグリフィンだけじゃなく鉄血も相手にしなければならぬいから戦力を分散させられる」

「それに鉄血の規模も監視所程度だしな。地の利はこちらにあるから予想外のことがあっても十分対処できる」

「…………ご主人様がそうお考えなら…」

Q. あなたは敵に囲まれ絶体絶命、逃げ場はありません。ここで新たにお互い共通の敵が現れました。さてどうしますか？

A. すべて叩き潰しましょう。

---

---

「着いたな、一旦この辺で降りるぞ」

「ここは……」

スペードチームは指揮官がマークした鉄血の監視拠点付近に到着した。しかし辺りは見渡す限り廃屋しかなく、とても拠点と言えるような建物は見当たらない。

「ねえ、トンプソン、本当にここであってんの？」

M2 HBはそのそと車から降りながら気だるそうに問いかけた。

「そのはずなんだが……ちよつとボスに確認してみる」

トンプソンが通信機の回線を切り替える直前、付近を偵察していたCZ-805から通信が入った。

「トンプソン、南東の方で鉄血の拠点見つけたんだけど……指揮官が言ってた情報とちよつと違うというか……」

「あん？ どういうことだ？」

「うーん……口で説明するより見たほうが早いと思うからちよつとこつちまで来てくれない？」

一同はCZ―805がいる場所へ集合した。

「で、なにがあるんだ？」

「ほら、あそこ。情報よりかなり大きくない？」

CZ―805が指さす先には今はもう使われていない工場があった。周囲には歩哨と思われる鉄血人形がうろついており、現在は鉄血が廃工場全域を占拠しているものと思われる。おそらくかつての生産ラインを再利用して人形を製造しているのだろう。

指揮官からは監視所があると聞いていたがこれほどの広さを持つ拠点を監視のためだけに用いているとは考えづらい。それに座標が事前の情報と少しズレている場所に位置していた。

「どうする……？」

「ボスと話してくる、ここで待ってる」

トンプソンはその場から離れ、指揮官へ通信を繋いだ。

「ボス、ちよつといいか？ 確認したいことがある」

【目標地点にはついたのか？】

「ああ、だが指定された場所に監視所なんてなかった。すこし歩いた先に鉄血が占拠している大きな工場を見つけたんだがこいつのことを言っているのか？」

【んん？……うーん……？】

返ってきたのは否定とも肯定ともとれない相づち。

普段はハツキリと的確な指示を出し、公私共に曖昧な言葉を嫌う指揮官。そんな彼にしては珍しいとトンプソンは内心想いつつも口には出さず、静かに答えを待っていた。

二人の間に沈黙が流れる。

【……】

【……】

やがてしびれを切らしたトンプソンが返事を求める。

「…ボス？」

【あー…とにかく時間が無い、適当に引き付けてくれ。】

「了解だ。スピード1、アウト」

「…聞いただろ、行くぞ」

トンプソンは指揮官との通信を終了し、隊員たちに指示を出す。

車へと戻る道すがら、TMPがCZ-805へ話しかけた。

「あまり言いたくないんですけど、あれつてもしかしなくても鉄血の生産工場ですよね…」

「うーんあの大きさだともしかしたらマンティコアとか作ってたりして」

「うう…やめて下さいよ…縁起でもない…」

やがて彼女たちが乗り込んだ車両は目の前の鉄血拠点へと進撃していった。

そして時は今に至り……

## グリフィン基地 8階司令室

「おいトンプソン！なんでマンティコアなんか連れてきたっ!？」

【こつちだつてまさかケンカ売った場所が装甲人形の製造工場だなん

て思わなかったさ！だいたいそつちが送ってきた情報が間違っているのが悪いんだろうが!!」

先ほどのトンプソンとの通信。計画の歯車にズレが生じ始めたのはここからだろう。

衛星によつて観測された鉄血拠点、情報と違う位置情報、小規模な監視所ではなく大きな工場。

脳裏によぎった違和感はやがて一つの答えを導きだす。

「G36…さっきの衛星写真…日付はいつになっている…？」

「少々お待ちください。……これは…」

「…2週間…前です……」

「ああー…やっちゃまった…」

そう、情報が間違っていたのではなく、情報の“鮮度”が落ちていたのだ。

なぜ最新の衛星画像ではないのか。

通常であればグリフィンの諜報部門が用いる偵察機や衛星によつて鉄血が観測された場合、即座に全基地・支部へ情報が共有されるようになっていいる。観測された対象が無力化されるまでは諜報部が常に監視を担い、諜報部から送られた情報を頼りに実働部隊の俺たちが掃討作戦などの計画を立てるようになっていいる。

だが今回の騒動によつて政府および捜査当局は、事態が解明されるまでグリフィンの活動を一部凍結。輸送機以外の兵器使用は禁止となり、武装レベルは自衛のための最低限度のものという厳しい制限を受けていた。

「申し訳ございませぬ…ご主人様…。私がもっと早く気づいていれば…」

「いやG36は悪くない。情報の管理を怠ったのは俺だし、それにまさか鉄血が2週間で製造拠点を築くなんて予想だにしなかった。これは全部俺の責任だ」

「……全部…俺のな……」

「っ…しかしご主人様…」

ビーツ！ビーツ！ビーツ！

G36が言葉を紡ごうとした途端、基地に警報が鳴り響いた。

「なにが起きた!？」

「ゲートが突破されました！デモ隊が施設に侵入しています…！」

【指揮官、こちらRO635です！奴らにゲートを破壊されました！このままでは基地に侵入されるのも時間の問題です！救援を！】

通信からは切迫したROの声だけでなく、耳を劈く銃声や誰のものとも知れない悲鳴や叫び声がかましていた。

「トンプソンさんのチームも対応を求めています。どちらにせよ、マインティアを率いたまま基地に近づけるわけにはいかないかと」

「……G36はここで通信管制を。なにかあればすぐに知らせるように」

「ご主人様？なにを…」

俺はG36に告げるとプレートキャリアを着用し、シューティンググラス型の指揮システムと自身のヘッドセットに繋げた通信機を起動した。

「トンプソン、あとどれくらい持ちそうだ？」

「なんとか攻撃を避けつつ距離を保ってる！こっちはM2 HBがいるが通常弾しか持っていなくてな。完全に撃破することは不可能だ！次から散歩と偵察に行く時にも必ず徹甲弾を装備させるんだな！」

「了解だ、こちらが片付き次第すぐに増援を送る。それまで耐えてくれ」

予備のマガジンをポーチにすべて収納すると、ソファアに立て掛けていた“AR-15”を手にとってチャージングハンドルを引いた。

1発の300BLK高速弾がチャンバーへ送り込まれる。

「オーバードロードより1階の警備チームへ、今から救援に向かう。そ

れまで制圧射撃に留めて弾薬を節約するように」

【了解ですー……ん？指揮官？いまなんと……】

「G36、非戦闘員は地下シェルターへ避難するよう指示、他の指揮官の部隊には武器庫とヘリポートを防衛するよう要請してくれ」

「了解しました。ご主人様……ご武運を」

「ありがとう、ここは任せた」

「FAL、グローザ。4階で合流しよう。M4達のもとへ向かうぞ」



#### グリフィン基地 1階メインエントランス

「ねえRO！本当に指揮官が救援に来てくれるのかなあ？」

「だからなにかの聞き間違いよ！それよりSOP II！フルオートで撃つちやダメ！弾を節約するようにって言われてたでしょ!？」

「ええく？でもM4も聞いたよね？今から救援に向かうって」

「そうね……確かに聞き間違いでは……」

「すまん遅くなった。RO、負傷者は？」

「し……指揮官!?!なぜここに……救援は？」

「俺が救援だ、全員少し下がるぞ」

「わー！指揮官カッコいい！やっぱり指揮官も一緒に戦ってくれるの？」

「まあ……慣れないことはしたくないんだがな。それで負傷者はどこに？」

「あちらです、指揮官」

M4A1が指す部屋を見ると警備チームのデイブが血塗れのまま横たわっており、傍でAR-15が処置を施していた。

「FAL、タオルを濡らして持ってきてくれ。AR―15、デイクの容態は？」

「指揮官…今は意識を失っています。応急処置も無事に終わりました」

デイクの首へ手を当てると辛うじて脈は動いていた。

「弾は首元を貫通していてなんとか出血は止まりましたが…失血した量が多く一刻も早く輸血が必要です」

「全部1人でこなしたのか？AR―15って救命講習受けてたっけ？」

「あ…いえ…前にM16から教えてもらったんです」

「でも早急に医療施設へ運ばないと彼の生命は持たないわよ。ヘリは飛ばせないし…どうするの？」

FALの言うとおり現在輸送ヘリはすべて格納庫に収納されており、パイロットを含む全スタッフは地下シェルターへ避難している。暴徒が基地へ攻め込んでいるなか、今からヘリを用意することはかなりリスクだ。

「ご主人様、戦域内に所属不明のヘリが接近しています。飛行制限空域であることを警告していますが応じず、登録番号の照会にも返答はありません」

「なに？」

G36からの連絡を受けて窓から空を見上げると確かにヘリコプターが飛んでいた。だがかなりの高高度を飛行しており、撃墜しようにもこちらには有効な対空火器はない。

俺は屋上にいる狙撃班へ通信を繋げた。

「WA、そこからヘリを捕捉できるか？」

「確認したわ。ここから直線距離で800m…真正面から近づいてきているわね。今なら0ひとつ多くてもパイロットに当てられるわよ」

「マジかよすげえな…」

「ベ…別にライフルの人形ならこれくらい余裕よ」

「ああ、まだ撃つなよ。そのまま待機だ」

「ご主人様、所属不明機からの通信要請が入りました」

「俺の回線に直接繋いでくれ」

【かしまりまりました。3、2、1…】

【グリフィンの指揮官へ、こちらは国家保安局所属のMH-60。コールサインはヴァルチャー2だ】

聞こえたのは男の淡々とした声。

「国家保安局がなんの用だ。まさか俺を逮捕しにきたのか？」

俺の問いかけに応えたのは先ほどの男ではなく、どこか聞き覚えのあるあざとい声色だった。

【はくい指揮官♪なんだかお困りのようね？】

「……45？なんでお前が…」

【そつ、会えなくて寂しかった？】

【指揮官ー！助けに来たよー！】

「その声はナインか、ということとは…」

【うん！416とG11もいるよー】

【ナインがさつき言ったけど指揮官あなたを助けに来たの。でもこれは非正規のお仕事だから、グリフィンと私たちだけのヒミツね♪】

【はは…ほんと…侮れないな、君たちは】

「基地周辺でトンプソン達が乗っている車両がマンティコアに追われている。まずはあいつらを助けてくれ。それまでこちらは俺たちだけで対応する」

【りようかい、また後でね】

通信が終了するとへりは急激に高度を下げ、トンプソン達がいる方向へ飛び去っていった。

「ねえトンプソン！指揮官からはなんの連絡もないの!?!そろそろ弾が

残り少ないんだけど!」

「ひゃあっ!あのマンティコア、タイヤを狙って撃ってきましたよ!」

M2 HBが必死に抗おうと掃射するが通常弾薬では思うように効果を発揮できず、戦意を喪失したTMPは後部座席で身を縮めていた。

「うだうだ言ってる暇があったら手を動かせ!いいか、脚部を狙うんだ!!」

「私とトンプソンさんのホローポイント弾じゃあ豆鉄砲ですよお!」

「ちっ…ボスの救援はまだか…!」

スピードチームが焼け石に水ともいえる攻撃を続けるなか、運転席でハンドルを握るCZ-805は側面から近づいてくるヘリコプターの存在にいち早く気づいた。

「…ん?あのヘリなんだろ?」

【オーバーロードよりスピードチーム、上空に友軍のヘリが接近中だ。航空支援を有効的に受けられるようマンティコアを引きつけろ】

「ボスっ!待ちわびたぞ…よしCZ-805、そのままつすぐ全速力で走り続ける!」

「おっけー!任せて!」

運転席に座っているCZ-805はアクセルを力強く踏み込んだ。

車が走る先にはヴァルチャー2が側面を向けてホバリングしており、MH-60のキャビンに搭載されたM134の銃身が回転を始めていた。

「416、外さないでよ」

「それは嫌味のつもりなの、UMP45?あんなデカブツ目を閉じても当てられるわ」

ヴウウウウウウウン

HK416が言い終わるよりも早く、高速で回転する銃身から鉄の雨が降り注がれた。

毎秒100発もの発射速度を誇るその銃から吐き出されるのは通常用いられる7.62mm弾ではなく、16LABにより開発された劣化ウラン徹甲弾。ありとあらゆる装甲を貫き、無骨な銃声も相まっ

てきながら無慈悲な死神のようだった。

「ははっ…416のやつ、いい目をしてやがる…」

「あつつ!!空から葉莢が…ああ熱いつ!!」

「M2 HBさん!はやく銃座から降りて扉閉じてください!」

やがて銃声が静まると同時にマンティコア特有の無機質な駆動音は消え去り、辺りにはトンプソン達の車両によるエンジンの重低音と、4枚の漆黒の翼が空を切り裂く音が響き渡った。

「指揮官へ、目標を無力化しました。トンプソン達も全員無事です」

「ありがとうございます!ただちにこちらの援護を頼む。悪いがこれ以上は持ちそうにない!」

「了解です」

「こんなこともあろうかと質のいい徹甲弾を積んでて正解だったわね。後でグリフィンに高く請求しないと」

HK416が指揮官との通信を終えるとUMP45はパイロットへ指示を出した。

「中庭に降ろして」

「30秒だ」

「30秒、了解よ。みんな降りるわ、準備して」

「こちらヴァルチャー2、基地西側の中庭へ降下する」

「うう…私だけここにいちやだめ?」

「こんな“デカい的”の中で小火器の攻撃を受けたいって言うなら止めないわ。仮に墜落しても生き延びても助けには行かないわよ」

「うっ…分かったよ…」

「ここが踏ん張りどころだから頑張りなさい、G11」

「防衛線が突破された。正面入口に大勢押し掛けてるぞ」

副操縦士の報告どおり、正面ゲートを破られたことによつて過激派組織や暴徒と化した大勢の民衆が基地へなだれ込んでいた。

「すごい数だねえ…45姉、指揮官は大丈夫かな?」

「心配ないわよ。あの人も」

装備のチェックを終えたUMP45は立ち上がり、小隊員一人ひとりを見つめる。

「相手がテロリストだろうが民間人だろうが武装している者はすべて攻撃対象よ。ただし背中をみせて逃げたり武器を捨てて投降している人間は撃たないように」

「了解っ！暴徒鎮圧任務なんて始めてだね！」

「……ほんと、人間って愚かね」

「指揮官の冷蔵庫にラムレーズンアイスあるかなあ…？」

「ヘリの着陸地点をマーク。各員スタンバイ」

メインローターが放つ強烈な風によって砂埃が漂うなか、華麗な4人の美少女たちがゆつくりと機体から降りる。

「こちらヴアルチャー2、チーム全員の降下を確認。引き続き上空で監視を始める」

「さあ…始めるわよ」



P r r r r r r …… P r r r r r r ……

静かで薄暗い部屋に甲高い電子音が響く。

「なんだ」

男はスマートフォンを耳に当てた。

【目標の予測進路上にすべて設置完了しました。回収班の手筈も順調に進んでいます】

「わかった、私も今から向かう。トロストイ議員にも知らせろ」

【分かりました。では失礼します…】

通話終了

「はあ…なぜ私がこのようなことを…」

「……」

「…私だ、車を用意しろ。急いで向かうぞ」

#17 The Enemy of my enemy

## #18 ついに、AR-15は告白する

【全ターゲットを無力化、もう戦域内に敵はいない。オーバー】  
「了解した、ヴァルチャー2。交戦終了。支援に感謝する」

【これが仕事だからな。ヴァルチャー2、アウト】  
精神を擦り減らされる状況からようやく解放され、銃のセレクターをセーフティに戻すと壁にもたれてひと息ついた。響きわたっていた無骨な銃声はピタリと鳴りやみ、かわりに無線機で指示を出す声や負傷者の救護に追われる足音で喧騒に包まれる。

【ご主人様、まもなく本部から救援と医療スタッフが到着します】  
「分かった。負傷者を1ヶ所に集めてくれ。ヘリポートは空けておくように」

あらかた人形たちに指示を出し終え、ぼーっと空を見上げていると、誰かの足音が近づいていることに気づく。

「驚いた、普段は安全な場所で命令してるだけの指揮官がここまでまともに戦えるなんて。ちよつと見直しちゃった」

「それはどうも。これでも電子戦と指揮能力が優れてる代わりに戦闘はからつきしな45さんの足元にも及びませんがね」

「あら、私なりに褒めたつもりなのに。傷つくなあ」  
「俺も俺なりに褒めてたぞ」

「いくらなんでも伝え方が不器用すぎるわよ、却下。出直してきて」  
「厳しいお言葉を投げつけられたものの、UMP45は安らかな表情をしていた。」

ああ…これだ。この顔を見るとひどく安心する。こうして彼女と過ごすのはいつぶりだろうか。

「で、私がない間元気にしてた？大変なことになってるとは聞いてるけど」

「まあ…なんとか」

「ほんと〜？豆腐メンタルの指揮官のことだからすごい気にしてるんじゃないの？」

「ええいうるさいやめろ頬をつつくな」

くっ…やはりバレたか…。なんなら毎日シャワーを浴びる時にぶつぶつとひとり反省会を開いているまである。

すると45は俺の肩にもたれかかりスマホを取り出した。

「えーつと…殺す必要はなかったはずだと批判する声、あの発砲はやむを得なかったと擁護する声。賛否分かれてるわね」

「らしいな」

「なになに…、『適切な取り締まり手順を徹底させていなかったグリフィンの責任を追究し、市民団体が解体を求めている』…。誰のお陰で安全な暮らしを得られていると思っっているのかしら」

「そういう奴らに限って自分たちの身に危険が及んだら真っ先に助けを求めるんだよな。直接現場を見たわけでもないのに好き放題言いやがって」

「ふくん…指揮官の頼みならどうにかしてあげなくもないわよ？そのぶん“報酬”は高くつくけど♪」

「どうにかするって…例えば？」

「どちらかというど“報酬”の方が一体なんなのか気になるがここはあえてスルーする。」

「そうね…まずはネットでデマ垂れ流してる奴や記事ライターを消そうかしら。物理的な意味で」

「ヒェッ」

こわっ…。なにが怖いって冗談じゃなくガチの目をしてること。しかも404小隊なら痕跡を残すことなく本当にこなせそうだから笑えない。

「批判してる奴らが突然いなくなったらめっちゃめっちゃ怪しまれるぞ…グリフィンが裏工作したに違いないって余計に叩かれるぞ」

「それもそうね…じゃああいつらの身元や住所を特定してネットに拡散するしかないわ」

「手段の落差がすごい」

「どちらかといえば平和的だけどただの嫌がらせじゃねえか。あと手口が地味に陰湿。」

「ていうかなんで方法が『批判してる奴らを消す』だけなんだよ。真実を世に広めて俺に落ち度はないことを証明するとかあるだろ」

するとUMP45はため息をついてやれやれといった仕草をとる。ちよつとムカつくな。

「いい？注目集めやアクセス数稼ぎのために過激かつ極論的な見出しをつけるまとめサイト。事実とかけはなれたり偏向的な書き方で印象操作を狙うネット記事。こいつらは社会の悪よ、徹底的に叩く必要があるの」

「もちろんそれに騙されるネットリテラシーのない奴らも悪いけど、そいつらはやりようによつては上手く利用できるわ。つまりは誤った情報を流す根源を潰せば丸く収まるの。……あのアフィカスは絶対に許さないわ……」

「そ…そうですか」

急に饒舌に喋りだしたな…なにか恨みでもあるんだろうか…。

その辺り興味あるので深掘りしようとしたが、遠くから響きわたるヘリコプターの飛行音で遮られた。G36の言っていた、グリフィン本部からの救援だろう。2機ほど基地のヘリポートへ向かっていったが、1機だけ俺の目の前に着陸してきた。

メインローターが巻き上げる強風に耐えていると片眼鏡モノクルを掛けた真面目そうな雰囲気モウキの女性がドアを開けて降りてきた。

「指揮官、遅れてすまなかった」

「ヘリアンさん！多忙にもかかわらず本部から駆けつけてくださり、感謝します」

「色々と立って込んでいたがな…お陰ですべて片付いたよ。それよりも身体は無事か？」

「ええ、私は問題ありません。ですが人間と人形両方のスタッフに複数の負傷者が出ています」

「よろしい、被害報告は聞いている。ここからは負傷者の手当てや設備の補修は本部のスタッフが引き継ぐから安心してくれ」

「だが貴官を休ませている時間はない、一刻も早く今後の対策と方針を考える必要がある」

「分かりました、ほかの指揮官も招集します」

「いや、その必要はない。声をかけるのはA R小隊と…U M P 4 5、君の小隊もだ」

A R小隊と4 0 4小隊？人形たちを交えて話をするのか？

「指揮官たちではなく人形…ですか？」

「ん？なんだ、U M P 4 5から聞いていなかったのか？4 0 4を派遣したのは基地の救援のためだけではない」

はて、たしかナインが助けに来たと言っていたが…。おい、どういうことだ？と4 5にアイコンタクトを送るが、我関せずといった様子でペットボトルの水を飲んでいる。それ僕が飲んでたやつですよ？

「まあいい。司令室に来たまえ。詳しい説明をする」



ヘリアンさんの指示通り、装備を片付けていつもの制服に着替え、司令室へ向かった。時間まで少し余裕があるがすでにA R小隊と4 0 4の面々は揃っており、どうやら俺が最後に到着したようだ。

「全員集まったな、それでは始める」

「まずは被害報告の共有だが、負傷者の数と容態のみ端的に伝える。完全破壊された戦術人形は0。人間のスタッフは非戦闘員が1名、戦闘員は3名が負傷」

「うち1名は首を被弾したが医療チームによると命に別状はないとのこと。多量に出血したが、応急処置のお陰で回復する見込みがあるぞうだ」

「…！」

「よかった〜！デイブさん無事だつて!!」

「ええ、よかったわ…ほんと…。さすがA R―1 5ですね」

「上手くいくかかなり不安だったけどね…昔M 1 6に教えてもらった

救命措置が役に立ったわ」

よかった……。少ない戦力で急な襲撃に対応したにもかかわらず、誰も命を落とさずに済んだのはかなり幸運だ。さつきまで重い表情をしていたAR―15も、SOP IIと違って声には出していないがかなり安堵している。

「では今後の方針についてだが：指揮官、君の身柄を軍が保護することになった」

「えっ、軍…ですか？」

「そうだ。ついでには明日の0900、サラトフ州のエンゲリス空軍基地に向かってもらう」

ついに軍まで動きだしたと…。

正規軍が民間軍事会社の職員を守るために力を貸してくれるなんて前代未聞だ。たしかに軍の元であれば安心できるが、彼らにそこまですくしてくれる義理はないだろう。クルーガーさんのコネクションであるというなら話は別だが。このなかで一番驚いてるのはもちろん自分なんだが、AR小隊たちも同じように面食らった様子である。

「ヘリアンさん、それはもう決定事項ですか？」

「AR―15…なにか異論でも？」

「わざわざ軍に協力を仰がなくても、私たちだけで指揮官を守ることができます。それが指揮官の部下である戦術人形の使命です」

「これまで私たちはずっと指揮官のもとで戦ってきました！特殊部隊であるAR小隊なら指揮官を…！」

「AR―15、落ち着いてください」

ヒートアップするAR―15をROが諫める。

「っ…！」

「申し訳ありません…取り乱しました」

「ふむ…AR―15、たしかに君の言うとおり”指揮官を”守ることはできるかもしれない」

「だが世間からの批判の矛先は彼だけでなく、グリフィン全体に及んでいる。現に過激派勢力が現れ基地の襲撃まで許してしまった」

「それでどうなった？ 死者こそでなかったが人間のスタッフを負傷し、基地設備も損壊。この先また同じことがないとは言いきれないだろう。当然悪化することさえあり得る」

「それは…そうですが…」

「だからこそ奴らの注目を分散させる必要がある。ここに指揮官がいないことが分かれば基地の前で大規模なデモを始めたり、本腰入れて襲撃することもないだろう」

「これが最善だ。それに我々のバックに軍がついているという牽制にもなる」

なるほど、理にかなっている。それにグリフィンにいるよりも軍の保護下にいた方が安全であるのは明白だ。A R—15や人形たちの気持ちはとても嬉しいが、俺がここにすることでスタッフが常に危険に晒されることは避けたい。

そんなことはみんな理解している。だが納得ができないのだろう。パツと見たところ元々直属ではない45や416は冷静に話を聞いているが、A R—15をはじめA R小隊たちは苦渋の表情のまま拳を固く握り締めている。

そんな葛藤のなかどう声をかけるべきか、俺には分からなかった。重い沈黙を裂くようにヘリアンさんが説明を続ける。

「空軍基地にはグリフィンのヘリで向かう。君たちもこれに同乗し指揮官の護衛をしよう。到着後は404小隊は空軍基地付近の住宅から監視。有事の際のバックアップを任せる」

「A R小隊は帰投して待機。おそらく他の人形たちも含めてここを防衛をしようようになるだろう。場合によっては一時的に別の指揮官の指揮下に入ることもある」

この説明に対し、しばらく沈黙を貫いていたM4とS O P IIだが、この扱いには耐えかねたのかついに不満を露わにする。

「あの…なぜ私たちではなく、彼女<sup>4</sup>たち<sup>4</sup>がバックアップを？」

「そうだよ！ 私たちも指揮官の役に立ちたい!!」

「…勘違いするな、我々は君たちを厄介者扱いするつもりなどない。戦力を消耗し脆弱状態の基地を守るためには強力な君たちが必要だ。」

今、基地の安全を任せられるのは指揮官の人形たちだけだからな」  
するとヘリアンさんはUMP45を一瞥する。

「それに404小隊はあくまで“部外者”だ。できる限り我々のフオローはしてもらうが、自分たちの家は自分たちで守らねばなるまい」  
45はなにも言わず、ただ片手をひらひらと振り返した。

「もう一度言うが出発は明朝9時だ。今日はみなご苦労だった。明日に備えて体調と装備を整えるように。では解散」

それを最後にヘリアンさんは司令室を後にした。明日から軍の世話になるのか、嫌だなあ…。

安全なのはいいが軍の連中は俺たち民間軍事会社を見下している節がある。まあ、E・L・I・Dの駆除が仕事の彼らからしてみれば、鉄血が相手の俺たちなんておままごとみたいなものではあるが。

あれだ。例えるなら体育の授業であまり話したことのない野球部員（正規軍）と強制的にペアを組まされる帰宅部（オレ）だ。いや実話じゃねえか。

「じゃ、私たちもこの後やることがあるから失礼するわ。また明日ね、指揮官♪」

「またね〜！」

「失礼します。ほら行くわよ、なに寝てるのよ」

「うえ…分かったよ、引つ張らないで…」

ヘリアンさんに続き、404の面々も別れの挨拶を告げて部屋を後にしていった。

「私たちも行きましょうか」

「そうですね、今日は早めに準備して休みましょう」

ほどなくしてAR小隊も明日の計画に備えて宿舎へと向かっていった。

しかし、最後尾にいたAR-15がドアの手前でこちらへ振り返る。

「…指揮官」

「ん、なんだ？」

「その…ええと…」

なにかを言いたげな様子だがなかなか言葉を言い出せないでいる。

「いえ…なんでもありません。失礼します」

「…？ああ、お疲れ」

「(あいつどうしたんだ…？)」

まあいいか、風呂に入って寝る前に他の人形たちにも挨拶しておかないとな…。しばらく会えなくなるし、スプリングフィールドのカフェにも寄っていいこう。

—————  
—————  
—————

———— チュンチュン…：チュン…

ピピピピ、ピピピピ、ピピピピ…

「ん…」

カーテンの隙間から朝日が差し込み、眩しさのあまり思わず手で目を覆い隠す。耳元で甲高く鳴り響くアラームを手探りで止めて重い身体を起こした。

「(…もう朝かよ…)」

寝起きでおぼつかない足取りで冷蔵庫へ向かい、冷えたオレンジジュースをグラスに注ぐ。甘く爽やかな果実の恵みが渴いた喉を潤し、次第に目が覚めてきた。

「ふう…」

シワのない真っ白なシャツに袖を通し、ネクタイを締めていつもの葡萄酒色の制服に身を包む。軍の保護区域内では私服で過ごすようになるため、しばらくこいつを着ることはないだろう。

「しかし…冷静に考えても、軍に匿ってもらうなんて普通に生きてたらずありえないよな…」

まあ…ありえてしまうのが今の世の中。そしてこの仕事なんだが…。お陰でこの先俺はどうなるんだとか、人形たちは大丈夫なのか心配でまったく眠れなかった。

「(憂鬱だなあ…)」

正直もう部屋から出たくないな、積みゲー消化したいんだけど有給使って休めないかな。ああそうだと部屋の片づけや人形たちのフィードバック会議の資料も作らないといけないんだった。なんかとてつもなく厄介で面倒なことが目の前にあると、普段は後回しにしていた小さなタスク(掃除とか)を無性にやりたくなるよね。あれなんなんだろうね。

と、まるで月曜日の朝みたいなことを考えているとドアをノックする音が聞こえた。

コンコン

「指揮官、お迎えにありがとうございました」

ドア越しに聞こえてくる大人びた冷静な声。

ちようど身だしなみを整え終わったので、急いで訪問者の元へ向かう。

「おはようございます、指揮官」

ドアを開けると銃をスリングで背中に携えたAR-15が佇んでおり、腰まで伸びた桃色の髪が爽やかな朝の風によってなびいていた。

「おう…おはよう…」

「大丈夫ですか？ 隈ができて…ひどい顔ですよ」

AR-15が心配そうな面持ちでこちらの顔を覗きこみ、まるで水晶のような澄んだ瞳に至近距離で見つめられた俺は思わず目を逸らしてしまう。

「色々考えてたら不安で眠れなかったんだよ…。もう眠い、マジで眠い。なんならもう今日はどこにもいきたくない。だからゲームして過ごしたい。そうだと、一緒にスマ○ラやらね？」

「やりません。もうすぐ時間ですから行きますよ」

「くっ！これがRFBならすんなり丸め込めたのに…」

「…そういえば前にそんなことがあって二人ともG36にこっぴどく

叱られてたわね…。それよりもほら、荷物持ちますから貸してください」

AR—15は白く細い腕を伸ばし、ボストンバッグとスーツケースを渡すよう促した。

「ああ…ありがとう…」

「…なんですか」

「いや、珍しいなと思って。お前が迎えに来てくれるなんて」

AR—15が動きが一瞬だけ止まる。

「…別に…。ただ…。」

「ただ？」

言いかけた言葉の続きを求めるように一瞥すると、今度はAR—15が顔を逸らした。

「…っ！…朝に弱い指揮官のことですから、どうせ寝起きでだらけているんだろうと思ったんです」

「フツ…俺が弱いんじゃない、朝が強すぎるんだ」

「……………ふふっ」

「!?」

なん…だと…………。

優等生キアラでしたっかり者、仕事は真面目に取り組むあのAR—15が…。いつもはしようもない返しを適当に流しているAR—15が…笑っただと…!?

AR—15が珍しい笑顔を見せたのもつかの間、自身にとっても「らしくない」振る舞いをしてしまったことに気づいたようですぐにいつもの気難しい表情に戻った。

「はあ…こんなことで笑ってしまうなんて…」

「そこまで落ち込まれるところもちよつとへこむんだけど」

「ほんと、あなたって人は…」

隣で歩いていたAR—15はそうつぶやくと同時に足を止め、空を仰いだ。

「AR—15?」

「…指揮官だけでなくグリフィンまで危険にさらしてしまった身分

で、こんなことを言うのは許されないけれど」

「今は少しでも長く指揮官と一緒にいたかった」

なんだ、いきなりなにを言いだすかと思えば。

「何度も言っただろ、あれはお前のせいじゃない。いろんな不運が合わさってあんな結果になって」

「でも！」

「！」

「でも…今は軍が動いて…もはや私ではあなたを守れません…」

「私はM4のように指揮能力が高いわけでもなければ、M16のような実戦経験もない」

「ROのようにみんなをまとめられない、SOP IIのように敵を屠れるわけでもない」

「私は指揮官たちに迷惑をかけているだけ…本当は指揮官やみんなに認めてもらって一緒にいたいのに」

「そんな資格はないのに…そう思っている身の程知らずの自分が嫌いで…」

振り向いた彼女の瞳からは涙が零れていた。

「AR—15…」

彼女は葛藤しているのだ。

ここは自分がいい場所なのか、相応しくないはずだと自問する一方で、本音ではAR小隊の一員としてグリフィンにいたいと望んでいる。しかし、自分程度がそんな望みを持つことすら烏滸がましいと苛まれているのだろう。

なら、AR—15の指揮官である俺がすべきことはひとつ。

彼女の価値を、彼女自身に認めさせることだ。

「お前が誰よりも努力していることは当然分かってるよ。それこそあの時だって自分の能力を高めるために市街地のパトロールに参加したんだろ」

「それにテイブの命を救ってくれたのは他の誰でもないお前だ。たしかあの場でAR—15以外に適切な救命措置を知っている人形はいなかったはずだし」

「…私は…」

「ちゃんとできるか不安だったけど、“自分がやらなきゃいけない”と強い意志を持って応急処置をしてくれたんだろ？」

「そんなに自分を卑下しないでくれ。お前が思っているよりも周りにはAR―15を信頼しているよ。厄介者扱いする気はないってヘリアンさんも言ってただろ」

「それでも…しばらくあなたと会えないのはやっぱり辛いです」

「大丈夫だよ、すぐ帰ってくるから。まあグリフィンより待遇が悪ければだけど」

「…：はあ…まさか指揮官に言いくるめられるなんて」

AR―15は微笑みながら濡れた目元をぬぐった。普段と違ってどこか吹っ切れたように明るく、それでも凜とした表情で真っ直ぐ前を向くいつものAR―15だ。

「戻ったらまたシューティングレンジの勝負でもするか」

「ふふつ、次は私に勝てるといいですね」

「…やっぱスマ○ラで」

「ダメです。指揮官はしばらく目を離すとすぐに腕がなまってしまいますから、私と一緒に特訓です」

「アツハイ」

なにげない話をしながら二人でヘリポートまで歩く。つい先ほどまでは長く憂鬱に感じていた道のりだが、あっという間に時間が過ぎていった。

ベッドから起きた時は少し寒かったが、外に出てみると空は青く澄み渡り、ポカポカと暖かい日差しが降り注いでいた。状況が状況でなければ街へ買い物に行ったりどこかへ遊びに行くのにもってこいの

心地良さだ。

そういえばFALと一緒に服を買いに行く約束をしていたのに結局行きそびれたな。事が落ち着いたらきちんと埋め合わせをしなれば。

「おはようございます指揮官。AR―15も一緒だったのですね」

「おはようRO、もうみんな集まってるのか」

「ええ、いつでも出発できますよ」

ヘリポートには俺たちを乗せるヘリが待機しており、すぐに飛び立てるようローター音が轟音を立てていた。

「コールサインはアトラス3―1と3―2。指揮官とAR小隊は3―1に、私たちは3―2に搭乗するわ。到着予定時刻は0940だから、みんな快適なフライトを楽しんでね♪」

まるでこれからリゾート地に向かうかのようなUMP45を見て、AR―15は呆れるようにつぶやいた。

「なにが快適なフライトよ…なにごともないといいけど」

「あつ！私知ってるよ、AR―15！それ〃フラグ〃って言うんだよね！」

「やめなさいSOP Ⅱ縁起でもないから」

SOP Ⅱのことだから悪気があつて言ったわけじゃないんだろうが、命を狙われているこちらの身としては冗談じゃない。いやマジで。

「ほらほら俺たちも乗るぞ」

「私、指揮官の隣の席がいい！」

「あら、指揮官は私の隣ですよね？」

「エッ」

「どこでもいいから早く乗ってください…」

全員が搭乗したことを確認するとヘリは出力を上げ、エンゲリス空軍基地へ向けて空高く羽ばたいた。

「鳥」は飛び立ちました。まもなく我々の予測ルートへ到達します」

「ええ、すでに準備は整っています。落としたりすぐに回収チームが確保する手筈ですから。くれぐれも丁重に扱いますよ」

「……はっはっはっ！これで奴らも終いですな。ええ……はい……はい、では失礼します」

#18 ついに、AR-15は告白する

#19 またしても、彼は地獄を生き延びる

AM 9:00

エンゲリス空軍基地まで約120マイル――

「そこで俺はこう言ってやったのさ、『ヘリアンさんもやればできるじゃないですか』ってな！H A H A H A H A!!」

「ああ、だからあの日、指揮官が死にかけた様子で帰ってきたんですね……」

「褒めたつもりだったんだけどな……地雷だったな……」

ビーツ ビーツ ビーツ

突如、警報が鳴り響く。

「なにがあつた？」

「多数の方角から赤外線を探知、地上から狙われています」

「なんですって!?!」

その瞬間、地上から放たれたロケット弾がヘリの真横を通り過ぎていった。

「ブレイク！ブレイク！」

パイロットが叫ぶと機体は急旋回し、建ち並ぶ高層ビルの合間を縫うように飛びぬけていく。そのわずか数秒後に後方にあつた電波塔が対空ミサイルによつて吹き飛ばされるのが見えた。ヘリは一気に速度と高度を上げた。

「ダメだ！奴ら屋上からも待ち伏せしてやがる！」

「指揮官の安全が最優先よ、振り切つて！」

建物を盾にして射線から逃れようとするのも先読みされており、逃げ込んだ先からも警報装置が絶えず全方向からの危険を知らせている。

「第2波きてるわよ！」

AR-15が言うとおりに左右後方から多数の飛翔体が接近してきているが、咄嗟に放出された欺瞞用のフレアによつて直撃を免れた。だがそれでも砲火は一向に止まず、俺たちはただひたすら逃げ続けるしかなかった。

「わたしに任せて！これ一度使ってみたかったんだ〜！」

制圧射撃のためにSOP IIがドアガンの銃座に着く。一見するとまるで新しいおもちゃではしゃぐ子供のように見えたがそれも束の間、高らかに笑いながら鉛の雨を降らせるその姿はさながら猟奇的な悪魔だ。

「こっ…コラスOP II！危ないからちやんとグリップをしつかり握って！あまりデタラメに撃っちゃダメよ〜！」

「(オカんだ)」

「(まるで母親ね)」

「(お母さん…)」

そしてその悪魔を叱るROはどうみてもママだった。

うん、まあ、ドアガンの撃ち方で注意する母親ってなんだよって話なんだが。良くも悪くもグリフィンとはこういう組織です。他にも料理を作ろうとして爆発物を生成するツンデレスナイパーを始め、白いストッキングを履いた美少女が好きなバイ、ライフルを持ったドスケベセクシーなバイ、時々フェレットになるバイがいます。バイはいねえ。

「こんな街中でヘリを落とそうとするなんて連中も見境ねえな…！」

「一体なぜそこまでして私たちを狙うのでしょうか…！」

「それにあの待ち伏せ、私たちがこの空域を通過すると事前に知っていたとしか思えないわ」

AR-15の推理に思わず言葉を詰まらせてしまった。

「それは…つまりこの計画を外部へ漏らした内通者がいるということ？」

「そうとしか考えられないわね。それに、グリフィンで指揮官の護送計画を把握しているのはごく少数の限られた者のみよ。となると軍の誰かが過激派連中と繋がっていると考えるべきね」

「ああくそっ…これだから軍は信用ならねえ…！」

もともと繋がりがあったのか今回のために買収されたのか知らないが、この地域の駐留軍は腐敗している。これから軍の保護下に入るとはいえもしも中に過激派とグルの人間がいるとすれば、そこはもう

安全地帯ではなくなる。隷下の戦術人形を引き連れることができない以上、グリフィンを離れた時点で信用できる者がいなくなるのだ。こちらのことはお構いなしにパイロットの慌ただしい声が聞こえた。

「フレアをすべて使い果たした。そちらは？」

【こちらも今ので最後だ】

「3―2、こちらをカバーせよ」

僚機への指示に俺は自分の耳を疑った。アトラス3―2、それはUMP45たち404小隊が搭乗している機体だ。

【3―2、Copy<sup>了解</sup>】

「おい、なにをさせる気だ」

「あなたの身を守るのが最優先だ。こうするしかない」

「なにを…ふざけるな！今すぐやめさせろ!!」

「落ち着いてください指揮官」

ROが止めに入るが俺はパイロットの肩から手を離さなかった。

「404を身代わりにするっていうのか!?!」

「指揮官!!」

「…彼女たちはあくまで人形で、あなたは人間。どちらを守るべきかは明らか」

「そして私たちには指揮官が必要なのです…あなたも本当は分かっているでしょう」

「っ……」

ああ分かっている、分かっているとも。頭の中では当然理解している。

だがそれでも、自分が助かるために部下を犠牲にするなんて

俺はまだ、あいつらに光を与えられていない。9に本当の家族を、G11に穏やかな暮らしを、416に最高の栄誉を

45に、本物の海を

ドオオオオオオオオオオ

澄みわたる大空に爆発音がけたたましく轟く。やがて衝撃波が訪れ、俺たちが乗っている機体が大きく揺れた。先ほどまで後ろを飛んでいたヘリが激しく燃え上がり、バランスを失って機体を回転させながら徐々に墜ちていく。

一瞬何が起こったのかわからなかった。いや、正確には認めたくなかったのだろう。たとえ起きてしまったことに変わりはなくても、せめて自分の中だけでは“その光景”を認識したくなかった。

「アトラス3—2がやられた。繰り返す、3—2が落とされた！」

パイロットが叫んでいるがよく聞こえなかった。やがて忌々しく不快な警報音が再び鳴り響いていることに気づく。

無慈悲にも砲火はまだ続いている。

ビーツ ビーツ ビーツ

「……指揮官、ヘリは撃墜されます。衝撃に備えてください」

「っ……」

ROにそう告げられ、俺は自身の身体を縛りつけているシートベルトを力いっぱい掴んだ。それと同時に呼吸が乱れ心拍数が上がっていることに気づく。

うまく息ができない。

不快な脂汗が止まらない。

こわい、いきぐるしい、おちるのか

しぬ、いやだ、

しにたくない、みんなをたすけたい、まだだれもすくえて

おれはみんなを――

「命中した、ヴォルガ川の沿岸に墜落していくぞ」

「こちらセルコフ班。グリフィンのヘリを落としました。これより人形の回収に向かいます」

「ぬかるなよ、もし指揮官が生きていたら連れてこい。クライアントの要望だ」

「了解。聞いただけろう、行くぞ」

通話を終えると男たちは黒塗りの車に乗り込み、黒煙を上げている方向へ走り去った。

そして、路地裏から車列を見送る影。

「……………」

長く伸びた黒髪を後ろでまとめた1人の女がいた。

風でなびく度に身体の生傷が露わになり、風音を抑えるようにイヤープースへ義手を当てる。

「奴らが動き出したわ、行動開始して」



「う……………」

全身の激痛に苛まれ意識が朦朧とするなか、重い瞼を開いた。やがて周りを見渡そうと身体を起こすが、ほとぼしる激痛によって再び地面に戻された。

痛みの元へ触れると生温かくぬらぬらとした感触がする。それが自分の血液ということとはすぐに分かった。それと同時に奇跡が起きたことを実感する。

生きている。

はるか上空から撃ち落とされた輸送ヘリは黒く焼け焦げ、ミサイルの直撃と墜落の衝撃で真っ二つに別れていた。漏れ出た燃料によってエンジンは燃え盛り、コクピット部分はバチバチと火花を放っている。

る。大破したメインローターだけがただゆつくりと回転し続けている。

「……」

それでも、俺はなんとか生き延びた。

だが人形たちは皆地面に突っ伏したまま動かない。彼女たちの手足は千切れ、辺りに散乱していた。先程まで賑やかに談笑していたとは思えないほど惨いあり様だ。

「M4……」

返事はない。

唯一、今さらなんの意味も成さない警報音だけが聞こえていたが、やがて大きな火花が散ると同時に沈黙した。

「ぐっ……」

壁を支えにできる限り痛みが少ない体勢で身体を起こす。足を這いずりながらM4たちの破損状態を確かめる。幸いにも強い衝撃で一時的にダウンしているだけでメンタルは無事だった。素体ごと回収し、修復施設で処置をすれば問題ないだろう。だが、残念ながらパイロットは即死だった。

「……とにかく……助けを呼ばないと……」

通信デバイスを探し始めた途端、一抹の静寂を破るかのよう外から数名の男たちによる声が聞こえてきた。

「あれだ、見つけたぞ」

「生存者はいるのか？」

「アホ、見りや分かんדרろ」

恐らく我々を陥れた張本人達だろう。その声は段々と近づいてきている。

「あの高度から落ちたんだ、誰も助からねエよ」

「指揮官と茶髪で左目に傷のある人形を探すんだ。素体が使え物にならなくてもメンタルさえ無事に確保できりゃいい」

茶髪に左目の傷……45のことか？

幸いなことに45は別のへりに乗っていたためここにはいない。なぜ彼らが45のメンタルを求めているのか、そんなことを考察する

余裕も気力も、今の俺には微塵も残っていないかった。

奴らが近づいてきている。視界がぼんやりとしていてよく見えな  
いが数は5人、全員アサルトライフルで武装している。それに引き換  
え俺は手負いの身でハンドガンのみ。M4たちも倒れたままだ。  
もつとも、墜落の衝撃で四肢がもがれており、意識があつたとてどの  
みち戦えそうにないが。

ザツ…ザツ…ザツ…

足音がかなり近づいている。俺のグロックでは奴らのボディ  
アーマーを貫くことは難しい。となると狙いは頭だけだ。

「…よし…」

スライドを引いて初弾を薬室へ送る。呼吸を整え、掩体から一瞬だ  
け身を出して銃口を奴らへ向けた。

バンツ！バンツ！

「があっ！」

まずは1人。最も近くにいた男が倒れた。続いてもう1人に向け  
て即座に発砲するが、一瞬だけ視界がぼやけ、狙いを外してしまった。  
即座に掩体へ身を隠し、同時にさっきまで自分がいた場所に銃弾が降  
り注いだ。

「(外した…!)」

奇襲は失敗。こちらが制圧射撃を受けている間に奴らは車の後ろ  
へ身を隠し、反撃態勢をとった。残り少ない弾薬でちまちまと牽制す  
るが押し切られるのは時間の問題だ。

「あと2本か…」

撃ち尽くした空のマガジンを捨て、ポケットから予備マガジンを取  
り出した瞬間、足元に円筒状のものが転がってくる。それがスタング  
レネードだと気づいた時には手遅れだった。

「しまっ…！」

刹那、鋭い光と甲高い音に襲われる。咄嗟に目だけは閉じたもの  
の、一時的に視界が真っ白になり、つんざくような耳鳴りが朦朧とす  
る意識へダメージを与える。

虚ろとした目を開けるといつの間にか目の前に男が立っていた。

それが敵であることに気づき、咄嗟に銃のスライドを戻して構えるも間に合わず、顔面を蹴り飛ばされてしまう。

「お前が例の指揮官か。しぶとい奴だ」

リーダー格と思われるスキンヘッドの男がそう言い捨てると、仲間たちが銃を構えながら横たわる俺を取り囲んだ。

「ゲホツ…お前らは…うゝッ！」

「安心しな、命までは取らねえよ。生きてまま連れてこいと命令でな」腹を蹴りあげられた俺はあまりの痛みに寝転がって悶絶することしかできなかつた。

「1つ聞きたいことがある。茶髪で左目に傷のある人形はどこだ？」

「はっ…可愛いお人形さんをお探したらI・O・Pへ電話しろ。番号を教えてやろうか？」

「ほう、まだそんな軽口を利けるとはな。大したもんだ」

男は腰から拳銃を取り出すと躊躇なく俺の左肩を撃ち抜いた。

「ぐあつ…」

創部が焼けるように熱い。たった1発の銃弾だが俺の意識を削るには十分だった。

「まあいい、後でじっくり話そうじゃないか。ここからずらかるぞ。

セニール、車を持ってこい」

リーダー格の男が手下に指示を出す。だが返事はない。

「?おい、セニール…」

後ろを振り返った男たちの目に映ったのは、最も奥にいたニット帽の男が首元から出血し倒れ込む瞬間だった。

「なっ…!?!」

音を立てず、誰にも姿を見せず、武装した男の喉元を掻き切る鮮やかな手際。突然の出来事にこの場にいる全員が驚愕した。すぐに周囲を見渡すが俺たち以外には誰もいない。

「誰だ…どこにいやがる?!」

1人が激昂しヘリの残骸から飛び出た途端、頭を撃ち抜かれた。先程まで怒鳴っていた様子から一変し抜け殻のように倒れる。

「!?!」

その場にいる全員が倒れた男に釘付けになっている瞬間、突如として長い銀髪を後ろで結んだ女性が飛び込んできた。彼らが状況を把握するより先に、彼女は最も近くにいた男に回し蹴りを食らわせて突き飛ばした。

突然の襲撃に男はバランスを崩し、後ろにいたもう1人の仲間へ倒れこむように寄りかかる。2人はすぐに敵と気づいて銃口を向けようとした矢先、彼女によって頭を撃ち抜かれた。

「っ……この女ア！」

最後の1人、俺の近くにいたリーダー格の男が彼女へ拳銃を向ける。同時に彼女は姿勢を低くして銃弾を避け、一気に間合いを詰めた。驚異の反応速度にリーダー格の男は動揺するが、再び狙いを定めて引き金に指をかける。

「遅いわね」

小声でつぶやきながら彼女のナイフは男の喉を穿った。

俺は自分の目を疑った。なんと彼女はこの一連の戦闘をすべて両眼を閉じたままこなしたのだ。

「例の参議院議員が絡んでるっていうからどんなものかと思えば、ともに訓練を受けてないゴロツキじゃない。拍子抜けね」

死体からナイフを抜き取り、鮮血を拭き取りながら辺りを一瞥する。両眼を閉じ黒いマスクで口元を隠しているため、表情はまったく読み取れない。

「アンジェ、敵性存在はすべて無力化。高価値目標 HVTは……ひとまず無事よ」

アンジェ。たしかにそう聞こえた。もしかして俺が知っているあのアンジェさんのことか？

「……」

身体に力が入らない。自由に動かせない四肢は、まるで自分のものではないような感覚を生じさせた。

「怪我が酷いわ、無理に動かないで」

いつの間にか彼女は俺の傍へ近づいていた。

「驚いた。これだけの重傷でまだ意識があるなんて」

彼女は背負っていたバックパックから医療キットを取り出し、慣れ

た手つきで応急処置を始めた。

「…きみは…？」

俺が問いかけると彼女は黒いマスクを外して答えた。

「私は戦術人形のAK-12。今は詳しく説明する時間はないけど、あなた達の味方よ」

#19 またしても、彼は地獄を生き延びる